

---

# ダン=ダンジール

狗薙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダンⅡダンジール

### 【Nコード】

N3344F

### 【作者名】

狗薙

### 【あらすじ】

この世界には魔法や魔術が存在して、人間以外の種族もいる。コレは僕と僕が小さい頃に拾ってきた家族兼友人達とのおはなし。（別名、主人公が溺愛されるお話）

## はじめに

これは、とある世界のとある国の、それこそ辺境にぽつんとあった小さな村。

そこで生活していた、平々凡々だった『僕』のおはなし。

世界には魔法が存在した。魔術があつた。

悪魔と契約した魔法使いがいて魔女がいて

古の力を解放する事ができる魔術師が、陣を描き魔術を駆使して魔王が統括する魔族と戦っていた。

精霊は遙い神子はその声を人に伝える、聖女は想いを込めて祈りを捧げ

騎士はドラゴンと戦い、夜の一族と呼ばれた吸血種族は伝説と語られていた…  
ミディアム

そんな時代に『僕』は生きていた。

この村、ポリメシアで…

## 第一話

辺境にある小さな村、ポリメシアに僕達は暮らしてた。

僕には家族がいっぱい居る。

父さんと母さんは僕がうんと小さい時に病気になって

「遠いところに行ったんだよ」って、おじいちゃんに言われた。

だから血の繋がった家族はおじいちゃんとおばあちゃんだけだった。

でも他にも家族は居るんだ。血は繋がっていないけれどね。

僕が小さい時に皆を拾ってきたんだって。

拾ってきたってなんか変な話だよね。

こげ茶色の髪と目の、すっごく綺麗な女の子みたいな男の子のオーマ。

両親が居なくなって僕が村はずれで一人でいた時、遊んでくれた子なんだ。

オーマも両親が居なくて僕と一緒にだったから

おじいちゃん達にお願いして、一緒に暮らせるようになったんだ。

オーマは凄いいんだよ。何でも一人で出来るし、寒い冬にはお家をあったかくしてくれる。

魔法が使えるんだって！すっごいよね！！

あ、でもこれは秘密にしろって言われたっけ…？

二人目はリセ。

散歩してる時にリセと会ったんだ。初めて真っ黒な髪と赤銅色の眸

を見たよ！

グズグズ泣いていたから、きつと迷子になってたんだね。大人の人でも独りぼっちは寂しいもんね。

僕も迷子になった時はオーマが迎えに来てくれるまで泣いてるし。

お家に連れ帰ったらオーマはすつごく怒ったけど、でもやっぱり優しいから

リセが家出してきた理由を聞いて、一緒にリセがお家で暮らせるように、おじいちゃんにお願いしてくれたんだ。

リセはオロオロしてたけど、のんびりな生活は好きみたい。時々だけど

「はーはっはっは！ざまあみろ！我がいなくなつて存分に苦しむがいい！

いかに我が雑務に忙殺され何度自殺しようとした事かっ！貴様らも味わえ！！」

とか、すつごく遠い目をして空に向つて叫ん出るんだよね。その時のリセには誰も近づかないよ。

三人目はエルオーネ。

銀色と青が混じつたような色の髪と水色の眸をしてるんだ。

でもすつごいのは背中小さな羽根が付いてるの！

これも髪の毛と同じ色なんだ！初めて見たときは女の人だと思ったけれど、男の人だった。

怖いおじさん達がエルオーネの服を破いちゃったから…

でも僕が「やめて」ってお願いしたら、怖いおじさん達は何処かへ消えちゃった。

顔は怖かったけど、案外いい人達だったのかな？

怪我の手当てをするためにお家に連れ帰ったら、おじいちゃん達が

びつくりしてた。

オーマヤリセは僕の頭を撫でてくれたけど…ま、怒られなくてよかった。

あとね、エルオーネって薬師さんなんだって。村の皆からも歓迎されてた。

四人目はゼロム。

うん。すつごくボロボロだったよ。しかも明るいところがダメみたいで

コケとか生えてた岩の間に挟まってた。お腹とかぱっくり割れて、びつくりしたし…

僕の散歩コースじゃなかったら死んじやってたかもしれないよ、まったく。

急いでエルオーネを連れてきて、応急処置をした後、お家に連れ帰ったの。

人を助けたのに、オーマヤリセは「ノスフェラート!？」とか叫んで怒ってた。

ヒドイよね、エルオーネの時は怒らなかったのに、コレって差別じゃない？

あ、ゼロムは二日くらい死んだように動かなかったけど、三日目にはちゃんと起きてきたよ。

五人目はヨルン。

大きな剣を背負ってたんだ。なんでも旅の途中で道に迷ってたらしくて…

僕が村まで案内したんだ。そしたらお礼に今までのたびのお話をしてくれたよ。

すつごく楽しかった！僕ポリメシア以外を知らないかき。

オーマとリセはムスツとしてたけど、エルオーネは引き攣った顔してヨルンの相手をしてた。

ヨルンはエルオーネが好きみたい。「マイハニー!!」とか叫んで飛び掛ってた。

ゼロムは相変わらず昼間は部屋の隅っこで死んだように動かなかつたけど

夜には活き活きしだして、ヨルンとお酒飲んでたっけ。

意気投合を果たしてから数ヶ月単位でポリメシアに遊びに来てくれる。

僕にとっては歳の離れたお兄ちゃんみたいな人なんだ。

毎年毎年家族が増えて、今もすつごく楽しいよ。

今年もきつと楽しい出逢いがあると思うんだよね。

だから今日も僕は散歩に出かける。勿論一人で。だって僕はもう10歳なんだから！

さあ、緑の山々の中を風人ウィーディのように翔けよう美しい水守ウンディーネが歌う湖を眺めに！

## 第二話（前書き）

ぬるいですが、残酷な表現が入ります



## 第二話

今日もよく晴れた空が眩しい。

僕の暮らしているポリメシアは、最近とても良い気候が続いていて作物は豊かに実り、大雨や地震も無くいたって平和な毎日だ。

そんな毎日が嬉しくて、僕はエルオーネが教えてくれた歌を歌いながら散歩をしている。

今日はちよつと崖の近くまで行ってみようかな？

崖の近くといえば、森の彼方エルデーエルヴェの国に続いているんだっけ…

ゼロムを拾ったところだ。懐かしいなあ。

あそこはとても不思議な事が起こるって、おばあちゃんが言ってたっけ。

そういえば、ゼロムは何であの場所に倒れていたんだろう？

うーん。おばあちゃんが言ってたように不思議だ。

「…あれ？」

何だか此処だけ空気が冷たい…冬に吹く風？みたいな。

でも何だか、ソワソワ？ゾワゾワ？した感じがする。

まるでオーマやりセと会った時みたいなの…でも二人の時みたいにな

ずっしりと重たい感じはしないし、いったいどうしたんだろう？

その時、背後の草が音を立て揺れた。

一瞬ビクつとなったけど、見慣れた金髪がふわふわ揺れて、それが誰だかわかった。

「あ、ゼロムだー」

「ちび、ここに居たのか」

「もー！僕はちびじゃないよ、ゼロム達が大きいんだよ！！」

僕は10歳の子供だって言うのに！ちゃんと名前だってあるのに！！ゼロムだけじゃない。オーマやりセも、なんで僕の事を「ちび」って呼ぶんだ？

あ、オーマは「おチビちゃん」って呼ぶけど、二人のと意味変らないよね。

エルオーネは僕の事を「ちっさい勇者さん」ヨルン兄さんは「ちみっこ」

ちよ、これって皆僕の事をチビっていつてるじゃないか！！

僕はぶくうと頬を膨らませる。

エルオーネだけは別と思ってたのに…見事に裏切られたよ。

ジトつとゼロムを睨めば、ゼロムは不思議そうに首を傾げてくる。

いや、僕のほうが不思議に思っただけど…

「珍しいね…お昼にゼロムが動いてるなんて、いつもは死んだように動かないのに」

「ん？ああ。そりゃ死ぬだろ。だって儂<sup>わし</sup>、夜<sup>ミディアン</sup>の一族だし」

「みでいあ？」

「ま、ちびには関係ないか。ポリメシアより先の国々には儂<sup>ミディアン</sup>らはおらん。

つと、それよりもオーマが探していぞ。なんか約束でもしとるんじゃないのか？」

約束？

僕、オーマと約束なんてしてなかったと思うけど…  
うゝん…

「…」

「…」

「…ぴきや…」

「…」

「ねえゼロム。僕なんか今へんな悲鳴？が聞こえた気がする」

「奇遇だな、実は僕も…馬鹿っぽい声が…グあっ?!」

「ゼロムっ?!」

いきなりゼロムが吹っ飛んだ。

それからカエルが潰れたような悲鳴を上げて「ビタンッ！」って近くの木に張り付いた。

あれ…？なんかゼロムの鳩尾辺りから、木の枝が生えてるんだけど…枝の先に赤黒い、グロテスクな塊がひくつきながら突き刺さってるししかも、なんだかゼロムの服に赤いシミがまるでリセにどつかれてお腹に腕を差し込まれた時みたいに、ピクリとも動かなくなっちゃった。

「ゼロム？」

「ぶきやあ！」

僕の呼びかけに答えたのはゼロムじゃなくて、僕の背後、さっきまで僕が通ろうとしていた進行方向から、ふよふよヒラヒラした布にくるまっている小さい塊から聞こえた。

よくよく見ると、なんか赤ちゃんっぽいなあ…

「え〜と。きみは迷子？」

「ぶっ？」

首をかしげて僕を見上げる小さい子。

喋れないから赤ちゃんでいいかな。いいよね。

抱っこしようと手を伸ばしたら、今までふよふよヒラヒラとしていた布が

ジャキンツと突然鋭い刃に変わった、と思ったら目の前が真っ赤になった。

「あ、ゼロ、ム？」

「馬鹿者！！不用意に手を伸ばす奴があるか！？」

ゼロムが怒鳴りつける。僕と、赤ちゃんに向って。

目の前が真っ赤になったのは、ゼロムが僕を抱えて片腕を突き出していたから。

その突き出したゼロムの腕に、赤ちゃんがくるまっていた布だったものが突き刺さっていたから。

ゼロムが僕を庇った。

僕はいつきに自分の体が冷えるのが判った。

「っ？！ぜ、ゼロム！手が、腕がつ！！血がああ？！」

「…儂が串刺しにされた時はばおっとしてるくせに、なんで今は慌てとるんだ？」

「へ、くしざし？いつゼロムは串刺しになったの？って、それよりも手！腕えっ！！」

ゼロムは何を言ってるんだろう？

さっきは木に張り付いてただけじゃないか、まったく。

でも僕を気遣ってくれたんだろうね。

冷え切っていた体が熱を取り戻す。今僕がやるべきこと

一先ず僕は持っていたハンカチをゼロムの腕に巻きつけて止血をする。

急いでエルオーネに止血ような薬を貰わなくちゃ。

「あ、きみもいきなり人を刺しちゃダメだよ！」

「ぶきや？」

「おじいちゃんが言ってた。刺さりどころが悪いと死じゃうんだからね！」

「ぶっ…」

「きみ、下手したらゼロムが死んじゃったかも知れないんだよ？

人を殺すのはいけないんだよ！というか、僕の家族を傷つけないで！！」

「うっ…」

僕の思いが通じたみたいで、赤ちゃんは漂わせていた布にくるまり

なおした。

そして僕に手を伸ばしてくる

抱っこしろって事かな？

あ、ちよっと可愛いかも…

僕は赤ちゃんを抱っこする。

わあ。軽いなあ。お向かいの家に居る猫のロマみたい。  
っ、連れて帰っていいかな？迷子だし、連れ帰った方がいいよね。  
うん。連れて帰ろう。

「僕と一緒にお家に行こう？独りぼちは寂しいしね。  
ね、ゼロムもいいでしょ。赤ちゃん一人なんて危ないよね。うん  
決まり」

「寧ろそいつ連れ帰った方が危ないぞ」  
「何言ってるの！こんなに可愛いのに！！」  
「いや、だて、儂、そいつに殺されたし…」  
「生きてるじゃん。死んでないよ。未遂だよ」  
「いや、だから儂は夜の一族だから。」  
「もー。子供だけじゃ危ないんだよ、この山」  
「それをお前が言うのか…いや、もついい。好きにしてくれ」

僕は赤ちゃんを抱っこしたまま来た道に戻っていった。  
ゼロムもノロノロと僕の後を付いてくる。

帰ったらゼロムの手当てとこの子の紹介をしなくちゃね。

「儂、何度もリセに殺されとるんだがなあ。しかも串刺しだの絞殺だの

もっぱら魔術を使われてじわじわ嬲られるんだけど…オーマは助けてくれんし

エルオーネは笑って薬差し出してきて、一向に助ける気配などないしな

それにしても…ウィーディ風人の幼児など初めて見た　　よくよくちびは多  
種族に好かれるな」



## 第二話（後書き）

主人公ちび（仮）は基本のほほんとしています。  
ゼロムはヘタレです。やられ役です。

頻繁に殺されています。でもちび（仮）には気付いてもらえてないです。

### 第三話

ポリメシアの土地は比較的温暖な気候だったりする。

だからシャシャイや牛や馬と色々な動物を飼っている。

シャシャイは毛皮がもこもこしている愛嬌のある草食動物で、シャシャイの毛皮から糸を紡げる。

誰でもお手ごろに手に入るため、皆が買っていく。収入源の一つだ。牛からは乳を搾り、チーズを作ったりそのままミルクを近くの村まで売りに行ったりして生計を立てている。

馬は交通手段。ポリメシアは辺境もいいところで、近くの村でも早馬で4日はかかってしまう。

そして短いながらも冬はある。とても寒く冷たい冬が…

「でも今って冬じゃないんだよねえ」

「何か言ったかいおチビちゃん？ボクのお話を聞いていたの。いや、聞いていなかったね」

ゼロムとは違うフワフワとした焦げ茶色の髪と、同じ色の眸を持つオーマが

腕を組みながら僕達の前に仁王立ちしていた。

女の子みたいな顔で怒られてもちっとも怖くないよ！

なんていった三件隣のお兄さんが半年ほど帰ってこなかった

のは記憶にまだ新しい。

帰ってきたら来たで、二度と僕のお家には顔を見せに来なくなった。

うーん。部屋の中が寒い…

窓とかに霜がはってるんだけど、これってやっぱり…

僕は抱っこしている赤ちゃんが寒くないように、ふわふわヒラヒラした布を撒きなおしてあげた。

そしてしっかりと抱えなおす。赤ちゃんも寒かったのか、僕にしがみついてくる。

ちよっと痛かったのは気にしないでおこう。

それよりも、僕の横に居るゼロムは既に顔が土気色になっている。

ゼロムってオーマやりセにめっぽう弱いよね。一番年上っぽいのに。

「えっとね、オーマ。何で怒ってるの？」

「『何で』？今おチビちゃんは何でかってボクに聞いたの？」

「えっと…」

「ゼロムがヘタレなのは判りきっていたけど！よくも厄介を持ってきたくれたね。」

使えないにも程があるよ。まったく！ノスフェラート吸血鬼はコレだからダメなんだ。ミディアン

絶対的支配を促し至高にいたる定めシルフェス・ファ・ムートの夜の一族とか名乗つザウーデイとしてそのクソガキが風の皇位精霊の華人だつてのにも気付かないの？最近やつと日中活動できるようになったから、てつきり

そこそこ出来るヤツと思ってたのに。まったく、全然、どうしょ

うもない程、きみはダメダメだね!!」

「????????」

「そこまで全否定しなくても…吸血種族わんわんに対してノスフェラートとは化け物に等しい敬称だ。

悪魔おまえやりセにこそ言われたかないぞ。しかも僕は貴族ではなく平々凡々の平民だ!

支配側しめめすではなく、虐げられる側だったんだぞ!すごい力があつたら逃げてなんかくるか!!

ミティアン  
だいたい夜の一族内での差別が激しくなってきたし、僕は好きでこんな能力を」

え…と二人は何を話してるんだろう?

なんかいつものように専門用語ばかりが出てきて、僕には全然判らないや。

兎も角、オーマはこの赤ちゃんが誰の子供だか知ってるみたいだね。ゼロムも知っているのかなあ?微妙だなあ。

だってゼロムの土気色だった顔が今度は真っ青になってるんだもの。そういえば、ヨルン兄さんがゼロムは『蠟人形が生きているみたいだ』とかって言ってたっけ。

…ロウニンギョウって何?

うん。

「お、珍しいな。ちっさい勇者さんがオーマに説教されてるなんて。明日はゼロムが盛大に木っ端微塵にされて血の雨が降るかもなあ、はははは」

のんびりとしたテノールの声。でも言っている内容が過激なのは、彼がとても冗談好きだからだよな。

背中の羽をパタパタさせながら、綺麗な青銀色の髪を一つに結んでるエルオーネが奥の部屋から出てきた。

エルオーネの肩にはヒーシャがちょこんって乗っかってる。

ヒーシャは真っ白な小鳥でエルオーネの最初の相棒なんだって。

「エルオーネええっ！洒落にならんからやめれ！！儂とて痛覚はあるんだ！！」

「殺したって直ぐに復活するじゃない。ノスフェラート不死者の特徴でしょ」

「オーマの鬼畜っ！サドっ！ノスフェラート化け物と呼ぶな！人間の皮を好んで被る物好き悪魔め！！」

「やっぱりもういっぺん、ううん。あと百回くらい死んどく？」

「すいませんでした！！！！」

うわあ。ゼロムが土下座してる　　本当にオーマに頭が上がりないんだな。

なんか今も色々言われてるし。ま、いつもの事だけど。

「はははは。あれが伝説に語られる一族とは案外伝説なんて当てにならないもんだな」

「エルオーネ、伝説って何？」

「いや。ちよつとね。昔から、それこそ俺や君のお祖父さんが生まれるうんと昔から

オーマたち  
ゼロムたち

悪魔と夜の一族は敵対してるんだ。あ、リセもかな？

でもオーマもゼロムも、リセだって皆優しいだろ？本当は敵対しなくても生きていけるんだよ」

エルオーネは困ったゆうに笑った後、僕が抱っこしている赤ちゃんを見た。

そしていきなり固まった。それはもう『ピシィー！』って音が鳴るくらいに。

「エルオーネ？」

「ちっさい勇者さん、この子をどこからかつ攫ってきたんだ？」

「へ？」

## 第四話

「か、かつ攫うって…僕はただ山に置き去りにされてたから」

「置き去り、ね。比較的魔物が居ない山。でも盗賊は時々入り込んでいるだろう？」

そんな物騒な所に赤ん坊を置き去りにするなんて考えられないな。しかもこの子はただの赤ん坊じゃない。ちっさい勇者さん、見ててなんとなく気付いただろう？」

「あ、うん。くるまってる布が、」

「そう。この布自体が魔力でできている。とても濃密で清らかな風だ」

「風？この赤ちゃんは精霊の加護を受けているの？」

「あー…うん。ゼロムは…いや、オーマは何か言ってなかったかな？」

「（ゼロムってエルオーネにも頼られてないんだ…）」

えーと、しるふふあむーとって言ってたと思うな。あ、あとざうーでって」

「…それは、シルフェス・ファ・ムート ザウーディ風の皇位精霊の華人と言ったんだと思うぞ…風の精霊の幼児だ」

「風の精霊の…え?!じゃあ風人ウィーディの赤ちゃん?!!!」

お話なんてどうでもいいという風に、僕に抱っこされている赤ちゃんはエルオーネを興味津々で見ている。

まあ、エルオーネは綺麗だし背中が大きく開いている服を着てるし。別に露出狂じゃないよ。エルオーネの背中には30センチほどの翼があるからなんだ。

髪の毛と同じ綺麗な青銀色。たしか有翼人って呼ばれててとっても少ない一族なんだっけ。

すると、ふよふよヒラヒラした布がしゅるしゅるとエルオーネに伸ばされた。

ゼロムの時みたいに攻撃をする訳ではなさそうだからそのまま見てたけど、次の瞬間エルオーネが悲鳴を上げた。

「いたたっ!!」

「あわわわ?!」

「きやはっ!」

「羽を引っ張るなっ!痛っ!!」

「ぷきや、きやはっ」

「引っ張なっつつてんだろうが、クソガキ!」

ビクッ!

「ぷえ、ううう…ぷえええええええ!!」



赤ちゃんが思い切り泣き出した。

僕は抱きなおして、よしよしと頭を撫でてあげた。でもまだ泣き止まない。

ふよふよヒラヒラ漂っていた布は、今ではペタンと床に落ちてしまっただ。

エルオーネは二度と引つ張られてなるものか、とても言うように壁際に寄っていた。

「「やーいエルオーネが小さいの泣かした」」

「なっ？！オーマ、ゼロムっ！お前ら揃って指差すな！！」

「ぶええええええええええ」

「あわあわ、泣かないでよお」

いつの間にか怒られていたゼロムと怒っていたオーマが、エルオーネを叱難していた。

でもエルオーネを叱難するよりも僕の方を助けて欲しいなあ。

僕、赤ちゃんのお世話なんてした事ないよ。しかもこの子は精霊の赤ちゃんなんですよ？

魔法や魔術なんて、僕は皆みたいに扱えないよ。  
もーどうしたらいいの？

「おやおや、賑やかだねえお前さん方」

「「「おばあちゃん！」「」」

僕らの声が重なった。

ああ！良かった！おばあちゃんが居た！

おばあちゃんはよこらしよつと抱えていた籠をテーブルに置いて、僕の方へと近寄ってきた。

ウィーデー

そして、風人の赤ちゃんに微笑みかけ、ひょいっと抱き上げた。

赤ちゃんはぶえぶえ泣いてはいるものの、嫌がる事はなくおばあちゃんにあやされている。

「しかしまあ、よくよく坊やは色んなのを拾ってくるねえ。」

オーマや、今回はどんな子を坊やは拾ってきたんだい？まだほんの赤ん坊じゃないか」

ウィーデー

「えつと…風人の　加護持ちだよ、おばあちゃん」

「え！オーむぐっ」

「違うよ。精霊の赤ちゃんだよ！」って言おうとしたらゼロムに口を塞がれた。

何時の間に僕の後ろに？

何だかいつもゼロムとかオーマとか、あ、後リセも神出鬼没なんだよね。

じゃなくて！

ゼロムを睨みあげれば、困ったように笑った。そして小声で僕に耳打ちする。

「<sup>ザウーディ</sup>（華人はとても珍しいのだ。それこそそこらへんに浮遊している精霊よりもな）」

「（だからってウソつく事ないじゃん!）」

「（もしこの村に<sup>ザウーディ</sup>華人が居ると噂が広まれば、盗賊とか騎士団とかがわんさか来るぞ）」

「（精霊の赤ちゃんってそんなに珍しいの?）」<sup>ザウーディ</sup>

「（華人はな。ものすつごく偉い精霊の赤子だからな）」

「（領主様のご子息みたいなの?）」

「（高位精霊の更にも、皇位にあたる…つまりところ王様の子供だ）」

「（!!!）」

「あらまあ、随分と凄い子なのねえ、精霊さまの加護持ちなんて！ヨルンと同じだわねえ。あの子の様に大人になったら強くなるかもねえ。」

「あら、じゃあ親御さんはきつと心配しているでしょうね、何処に居るのかしら?」

「加護持ちって、争いごとに巻き込まれやすいから、ね。」

「多分この村に置いてくれて言う意味で、おチビちゃんに任せたらんじゃないかな?」

「あらあら…じゃあ親御さんが此処に、この子を迎えに来るまで預かりましょうか」

「あー…うん。そーだね」

僕とゼロムがヒソヒソ話しているうちに、オーマがおばあちゃんを説得してくれた。

エルオーネは背中が隠れるようにシヨールを羽織りなおしてたし。

「坊や、この子の名前はなんていうんだい？」

「へ？僕知らないよ、おばあちゃん」

「んまあ！預かってきたんだろう？！ちゃんと名前を聞かなかったのかい？」

「（あわわ！おばあちゃんに怒られる?!）  
え、えつと、そ、そうだ、み、ミルギス！そのこミルギスにしよ  
う！」

「「「!?!」」」

「ぷあ！」

「おや、ミルギスって名前なのかい。じゃあミー坊、泣いてお腹が  
すいたろう？」

いまミルクを温めてあげようねえ。ほら、お前さん達も！パイを  
焼いてあるからお食べよ」

おばあちゃんを怒らせると怖いからね、何とか乗り切れてよかった！

「　　ってあれ、皆どうしたの?」

「おチビちゃん」

「ちっさい勇者さん」

「ちび…」

「「「なんで名前をつけるかな…はあ」「」」

僕はまた何かやっちゃったのかな…？

## 第五話

「皇位精霊 それは精霊の王様、若しくはそれに連なる精霊に与えら得る称号。」

連なるって事は、精霊の王妃様、王子、王女。片親が精霊王でも可。

一般的には低位・中位・高位、おまけに帝位なんてのもある。はい、おチビちゃん復唱!!」

「へ?! えー、と…皇位精霊とは 王族っぽいので、位がいくつあつて」

「オーマ。ちつさい勇者さんは俺達と違って魔術等に詳しくないんだ。」

一気に詰め込むのは逆に混乱しか招かないだろう。特に悪魔<sup>おまえ</sup>と人間の知識量は違いすぎる」

「だからって、『何も知らなかった』ですむわけないでしょ! 基本、人間は物理的にしか束縛される事は無いけど、多種<sup>ほくろ</sup>族は違う。」

程度はあれど、言葉一つで支配されてしまう。特に銘を与えられる事、逆に奪われる事」

「ん、まあ。皇位<sup>ファ・ムート</sup>精霊の、まだ名もない華人<sup>ザウーディ</sup>だしね…」

何だか二人が難しい話をしている。僕は風人<sup>ウィーディ</sup>の赤ちゃん、ミルギスにひどい事をしてしまったのかな? あんなにオーマが眉間に皺を寄せのって滅多にないし。

エルオーネが言葉に詰まる事だつて、ヨルン兄さんが迫った時から  
いだつたのに…

僕がもんもん悩んでると、ゼロムがお茶を僕の前に出してくれた。  
ちゃんとお砂糖とミルクも入れてくれているし、おばあちゃんが焼  
いたパイも取り分けてくれた。  
そして、僕の隣に座ってお茶を啜っている。

「ねえ、ゼロム。僕はミルギスにひどい事をしちゃったのかな？」

「ミルギス            いや、ひどい事ではないぞ。ただ、お前は知らな  
かったんだ」

「でもオーマは知らないじゃすまされないって、言つたよ？」

僕はパイをつつく。さつくりと音を立ててパイ生地が割れて、中か  
らトロリとベリーが垂れた。  
うん。いいにおい。  
パクリと一口食べて、口の中にほんわりと甘酸っぱいベリーが広が  
る。

おばあちゃんの作るパイはおいしい…おいしいけど、僕の気持ちは  
晴れない。

「僕が勝手に名前をつけて、ミルギス自身それが自分の名前だつた  
思つたら

ミルギスのお父さん達、すっごく怒るのかな？本当は自分達が名  
前を付けたかつたんだって…」

「…ちび、お前はあの子をどうしたい？」

「ちゃんと、お父さん達のところに返してあげたい。それから、あやまりたい」

「名前を与えた事か？」

「うん。僕の名前はお母さんが一生懸命考えて付けてくれた、っておじいちゃんが言ってた。

だから、ミルギスのお母さんやお父さんだって、生まれて来た子の名前

すっごく考えてたと思うんだ。だから、僕が勝手に名前を付けちゃってっと思うと」

「だが名前がないというのは憐れだろう。精霊とは名を重んじる。名が無いのとあるのでは力の発揮方が違ってくるのだ。

お前があの子に名を与えた時、ミルギスは嫌がったか？

拒絶などしなかっただろう。お前を信用したのだ。

精霊は赤子といえど、判っているものなのだ。己を服従させるか、否かを」

「ふくじゅう…それって、命令するってこと？」

「そうだ。だがお前はミルギスを服従させ、命令を聞かせたいと思っただか？」

「そんな事！そんな事全然思わないよ！！僕はただっ」

「ふつ。ならば問題などない。ちび、よく覚えておけ」



「ゼロム？」

「名には祈りと祝福を捧げるものだ。そして名を呼ぶ時その者は、確かに存在する。」

お前はあの赤子を、ミルギスを束縛するために名を与えたのではないだろう？

もし、名を与えた事が重荷になるのなら、それはミルギスに対しての差別だ。

精霊だから、人間だから、そんな隔てなど言い訳にしかすぎん。

誇れ 名の重さを知り苦悩したことを。僕は、そんなお前を愛おしく思うぞ」

がしゃん！

僕は今までパイをつついていたフォークを落とした。

ゼロムはまるで、ひ孫でも見るような目をして僕の頭を撫でた。あれ、ゼロムってこんなに大人っぽかったかな？なんかいつも、リセとかオーマにぎったんぎったんにされてたのに…

「ぜ、ゼロ、ム」

がしっ！！

「あ、」

「ぐっ？！」

「なに、しようとしたの、ゼロム」

「少し、向こうで話そうか、ゼロム」

「な、何で儂がっ      ぐえ?!」

オーマがゼロムを掴んだ。エルオーネがゼロムの口に何かをねじ込んだ。

ねえ、オーマ。何でゼロムの首に手をかけて持ちあげてるの？

片腕で持ち上げてるけど、ゼロムって意外と重いんだよ。

エルオーネも何で薬瓶を6本も構えてるの？今さっきゼロムの口に入れたのって…

それに薬瓶の色とか、ものすごく毒々しいんだけど、何に使うつもり？

「二人とも、ゼロムが      」

「おチビちゃんはおばあちゃんの様子見に行ってきたよ」

「ミルギスがぐずってないか、様子見てこいよ、な」

「え、あ、うん。はい」

う、頷くしかできなかった。二人ともいったいどうしたって言うんだろ…

うん。まあ一応心配だからミルギスの様子を見に行くけどさ…

僕はおばあちゃんが居るであろう寝室に向った。

案の定、おばあちゃんはミルギスを抱っこして、ミルクを飲ませていた。

ミルギスは相変わらず、ぷきゅぷきゅと音を立ててる。精霊の赤ちやんの鳴き声って、変ってるんだなあ。

「おや、坊やはミーフ坊が気になったのかい？」

「あ、うん。」

「そうかい。じゃあちよつとミルクを上げててくれないかい。あたしゃ少しおじいさんとリセの様子を見に行ってくるよ。そろそろ商売から帰ってくるはずだからね。二日ぶりさね」

「はい」

そう言つて、おばあちゃん部屋から出て行つた。

僕はミルギスを抱っこして、少しぬるいミルクを口元に持っていた。

ミルギスはぷきゅぷきゅミルクを飲んでいる。

「あのね、ミルギス。僕は君が精霊だから名前を付けたんじゃないんだよ」

「ぷはつ。ぷえ？」

「ゼロムが言つてた。名には祈りと祝福を      きみを縛り付ける  
為に付けたんじゃないだ」

「ぷきゅ」

「きみのお父さんやお母さんがきみと会えるまで、この名前だけで

くれないかな？

僕やゼロムも、オーマやエルオーネだって、おばあちゃんも…きみを歓迎するよ、ミルギス」

「ぷきゅん……！」

あれ？

なんかプルプル震えてる……どうしたんだろう？

はっ、もしかしてミルギスって名前がやっぱり嫌だったのかな？！  
ど、どうしよう、なんかすっごくいい名前とか思い浮かばないよ！

「み、じゃない、ええと、名前嫌だったの？で、でも他の名前とかはっ」

「ぷええええええええええ！！！」

「わああ！！？」

ぶわあ  
！！

ミルギスの泣き声に反応して、部屋の中に風が生まれる。

ベットががたがた震えだし、置いてあった花瓶が天井に当たって砕けてしまった。

しかも窓にもひびが入って……うわあ、修理が大変だよ。

僕はミルギスを抱えているから被害とか無いけど、っていうかミルギスがくるまってきた布がふよふよヒラヒラと僕ごとミルギスを

包んでいて

飛び交っている破片から守ってくれてるみたい。

「ちょ、ど、どうしちゃったの?!」

「ぶきやあああ、ぷええええ!!!!」

「ちび?どうした、何が起こっておるのだ?」

天の助け!もとい、リセだ!  
いや、助けじゃないよ、今この部屋に入ったら怪我しちゃうよ!

「えーと、大丈夫!多分だけど!!」

「当てにならん!」

どっつ!

リセが言つと同時に扉が吹っ飛んだ。  
僕に当たりそうになったけど、ふよふよヒラヒラ漂っていた布が  
またしてもジャキンっ!と硬化して扉を叩き落した。



## 第六話

「り、リセ!」

「ふむ。ちび、怪我は…何を抱いておるか?」

「えっとー。あ、あは…」

何でだろう、何故カリセにはミルギスを見せちゃいけない気がする。さつきオーマに怒られた時よりも、ミルギスは僕の服をギュツと掴んでる。

ぶえぶえ泣いてたのに、今では声を上げないでプルプル震えてるだけ。

「何ぞこの有様は?今し方隠したモノと関係がありや?」

「え、えへ。ちよつと」

「精霊                      ウィーディ  
風人かや?」

「あ!あのね、」

僕が何かを言う前にリセが手を伸ばしてきた。

そして、僕達を守るように、硬化した布がリセに向かって特攻する。

こうやって見ると、何だかりセが悪者のように見えてくるから不思議だ…

じゃなくてっ！

「リセ、あ、あぶな、」

じゅぼっ

「へ？」

「フン。この程度で我の征く手を阻もうなど、笑止！」

も、燃えた？燃え尽きた？ミルギスがくるまっていた布。

エルオーネ曰く、濃密な風の魔力で出来ていた布が、あっさりと燃え尽きてしまった。

右半分だけしっかりと出ているリセの顔には、蛇の鱗っぽい模様が浮き上がっている。

そして普段赤銅色の右目は、今は鮮やかな灼熱の色をしていた。

うわぁ…リセがゼロム相手にどつく時と同じ状況だし。

これって、僕がリセにどつかれるのかな…あ、ちよっと目の前がかすんできたよ。

冷や汗が僕の頬をたゞりと流れる。

いや、本当に無理。ムリムリ。

「ほお…焦獄の火蛇と謳われた我と敵対するなど、ゼロムと等しく愚かぞ」



「ぷえ…や！」

「しょー」くのかじゃ？えっと、」

んーっと…リセはゼロムを馬鹿にしているのはわかったよ。

うん。相変わらずゼロムってばヒエラルキーの下に位置づけされてるんだ。

ミルギスもなんとなく不満げな声を上げてる…「や」とか最後に言ってるし。

「なんだかゼロムが可哀想だな…」

「ちび、あの愚か者、お前になんぞ不埒を働いたとか。

オーマは別段変りないが、エルオーネが便乗するなど由々しき事ぞ？」

リセが視線で「何をされた？」って問掛けてきたけど、僕自身、別にゼロムに何かされた覚えはないよ？

強いて言えば、ひ孫でも見ているような目で、頭撫でられたくらいだよ。

ふらち            いやな事をされた覚えはないから、僕は首を横に振った。

「真かえ？」

僕って信用ないなあ…

「うん。えっと、ミルギスの名前を勝手に僕がつけちゃって…

本当はそれは良くない事だってオーマが言っただけで、でもゼロムは平気だよって」

「銘なを与えた　？」

「えっとね、怒らないで聞いてくれる？というか、家が燃えちゃうから魔法はやめて」

「我のは魔術ぞ。魔法とは悪魔や、悪魔と契約せし人間のみが使うものだ。魔族まじらは違う」

「？　まあいいや。兎も角、ミルギスは皇位精霊の赤ちゃんなんだって。

それでオーマが、僕が勝手に名前を付けると服従させちゃうかもしれないって思ったんだと思う。だから怒ったの。

でもゼロムが『名には祈りと祝福を捧げるものだ』っていうから、僕はこの子が幸せになれるように…

精霊だからとか、そういうのじゃなくてね。でもこの子はミルギスって名前が嫌いみたいなの　どうしょ？」

僕は腕の中でじっとしているミルギス…ゴメン、名前が思い浮かぶまでミルギスって呼んでいいかな？

ミルギスを困ったように覗き込むけど、逆にじいと思えられちゃったよ…

リセに攻撃した時はどうなるかと思ったけど、なんか収まったみた

い。

まさか「ゼロムに等しく愚かだ」って言われたから大人しくしているわけじゃないよね？

いつの間にかリセの眸は赤銅色に戻り、肌からも蛇の鱗のような模様も消えていた。

良かった。家の中が火事にならなくて…

リセはゆっくりと僕達に近づく。そしてミルギスに何かを囁いた。

シルフェス・ファ・ムート  
「風の皇位精霊

成る程のお。我を恐れるのは然り。

風の御子よその子が汝を守護する限り、我は汝を喰らう事はせぬ。

そう怯えるな。しかし逆にその子に刃を向けるのならば、我と他の者達が汝に制裁を与えるぞ」

僕とリセの距離はすごく近いのに、どうして声が聞こえないのか…  
これも魔術なのかな？僕に聞かれたくない事なのかな。

「ぶあ！」

リセが何かを言い終わった後、ミルギスが返事をした。  
うん。何か通じるものがあったらしい。

「ちび。この御子ミルギスと言ったかえ？汝に与えられし銘を嫌ってはおらぬようだ。

単に、精霊食いの魔族と悪魔の気配に慄いておっただけ故、気にするでない」

「え…ミルギス、オーマとリセが怖かったの？皆やさしくていい人なのに」

「<sup>オーマ</sup>悪魔や夜の一族そして<sup>ゼロム</sup>魔族は、<sup>われ</sup>極端な話精霊より<sup>ミルギス</sup>も力がある。あれだ

立場的に我々は捕食する側で、ミルギスは捕食される側。詰まる所、格下ということだ」

「格下？でも、ミルギスはゼロムの事フツ飛ばしてたよ。始めてあった時に」

ゼロムってミルギスより強い？

でもゼロムちよつと不幸体質の一般人なんだけど…

しかもミルギスはほつぺを膨らませて「ぷい」<sup>と</sup>不満げな声を上げてる。

うん。本当にゼロムが可哀想に思えてきた。今度こっそりお酒でも飲ませてあげよう。うん。

「<sup>ゼロム</sup>あの愚か者めつくづくヘタレなのだな。まあ良い。今後このことについて他の者達と話し合う。

ちび、ダリアとグレーンには追々我が伝える故、暫し部屋に入らぬように言ってくれ」

「はい」

ダリアはおばあちゃんグレーンがおじいちゃんの名前。

リセは会った時からおじいちゃん達を名前で呼んでいる。あ、ゼロムもだ。

リセはパチンツと指を鳴らし、魔術で扉を直してから部屋を出て行った。

「ミルギス 名前を気に入ってくれてありがとう。これからよろしくね！」

「ぶきや！」

僕もミルギスを抱っこしたままリセの後を追った。

## 幕間―家族会議―

辺境にある石造りの家。しかしその家は、辺境にあるにしては大きかった。

他の家と比べても二周り程大きさが違う。村長の家ではない。

ごくごく普通の農民が暮らしているのだ。

そう…

異種族にめっぽう愛されている一人の少年が居る、平凡な農民の家だった。

周りの農民から彼らが虐げられる事はない。もし万が一にでも少年とその家族を虐げようものならば

何の前触れも無く少年達を虐げたものに確実に報復と称した、人間では絶対に止められない天災が降り注ぐだろう。

例え魔物討伐隊や王国最強騎士団と名を馳せるものが立ち向かったとしても、彼らを止める事は出来ない。

まあ兎も角、『大量虐殺上等』そんな物騒な代名詞の彼らが平穏に平凡に

ほのぼのと暮らしているのは、少年とその家族がほのぼのしているだけではなく

ポリメシアという辺境にある村自体が、とても平穏で平凡だからだろう。

村人も彼らが異種族であっても構わないようだ。

寧ろ彼らが異種族であると気付いている村人は居ない。

そう

五年程前まで、膨大な魔族を率いて人間を惨殺し魔族の領域を広げていた元魔王の一人とか。

悪魔や魔族も一目置いている神都。そんな神都がブラックリストの

上位に載せている高位悪魔とか。

今では伝説として語られている最強の不死の一族とか…

まさかそんな連中が「平和が一番」と言わんばかりの辺境の村、ポリメシアに居るなど誰も思いはしないだろう。

そんな人外魔境な彼らが溺愛している少年の家の一室でのことだ。楕円形のテーブルに四人が向かい合うように腰掛けている。

「はい。これから『第五回、拾われてきちゃったヤツ』についての会議を始めます」

一人はフワフワのダークブラウンの髪と同じ色の眸。アルトヴォイスの持ち主。

ここの家主が目に入れても痛くない程、溺愛している孫が初めて拾ってきた人物

オーマだ。

「まず議題一。おチビちゃんが異種族

それも何故かいつも厄介な立場の人物を拾ってくる。

その事について意見を出してほしいんだ。今後の対応策としてね

…」

テーブルに肘をかけたまま両手の指を絡めて溜息を吐く。

その姿だけならば美少女が恋わずらいしている図、に見えなくもな

い。

しかし実際は、神都がブラックリストの上位に載せている高位悪魔だったりする。

「今回は殆ど問題が無いと思うぞ」

黙っていれば優雅、麗人、男性の美そんな名詞がぴったり、金髪碧眼の絶世の美青年（村人談）ゼロム。

確かに美しいが、実際はヘタレ。溺愛している少年にすら可哀想と思われている。（本人は知らない）

そんな彼でも伝説と語られる一族なのだ　　が、一度たりともゼロムの本気を見た者はない。

それで何故ゼロムが伝説の一族だと判明したか？  
何度オーマヤリセが殺しても復活し、死なないからだ。そして朝日を浴びると苦しみだす。

（今では気合と根性と、オーマヤリセに鍛えさせられた忍耐で陽光を克服中）

典型的な夜の一族、伝説の一族の特徴と同じなのだ。

「問題が無いわけじゃないでしょう！判ってるの？！

シルフェス・ファ・ムート  
風の皇位精霊なんだよ！銘があつて華人じゃなかったら、此処までしないって」

「別に使役するために名を与えた訳じゃなし、ちびは良い子だろに」

「そんなの判ってるの！だーかーらー…」



「ミルギスは別にいいんだ。問題なのは精霊王シルフの方だろうね…  
ま、あの人はおおらかだから、今回はゼロムの意見に俺は賛成かな。そこまで重視しなくて平気だろう」

青銀の髪の色と水色の眸。髪と同じ色の羽根を持つ稀な有翼人、エルオーネ。

三番目に少年に拾われた御仁だ。物凄く女顔（美形）だが性格は漢前といってよい。

長い青銀色の髪を後ろで一括りにしながらゼロムの意見に賛成した。

「オーマが懸念しておる事は、精霊の事情ではなからう。

ちびになんぞ手を出しようものならば、我らが直々に断罪してくれよう。

しかし問題は人間の方であろう？シルフェス・ファ・ムート風の皇位精霊の御子がおると知られれば、黙っている国はない」

漆黒の髪に赤銅色の眸、今は浮き上がらせてはいないが、その肌には蛇の鱗が刻まれている。

五年程前まで、膨大な魔族を率いて人間を惨殺し魔族の領域を広げていた焦獄イゼルドウグアルの火蛇と呼ばれる元魔王。

彼らが溺愛する少年が二番目に拾ってきた人物、リセだ。

「人間ってそんなに強欲なのか？」

ゼロムが首を傾げ、不思議そうに聞いてくる。

オーマは眉間に皺を寄せ、まるで想い人相手に告白前に玉砕したような表情を浮かべた。

「ゼロムって馬鹿だよ。何見てきたの？君の住んでた場所ってどんなトコ？」

「黄昏の都か？殆どの人間は夜の一族が支配していたな。  
トランシルヴァニア ミディアン

怯えた目の人間が多かった。時々貴族に楯突く人間も居たが身内も含め殺されていた。

何かを欲する事などあまりしない生き物だと思っていたんだがなあ……ちびだって無欲だし」

「ゼロム、それはお前らが恐怖で人間を支配して思考を奪っていたんじゃないのか？」

「失敬な。人間を飼い馴らしておるのは貴族だけだ。

平々凡々の儂はそんなことはしとらん。しかし何故かいつも遠巻きに見られていたな……」

「人間にとっては貴族も平民も関係なく、お前が夜の一族だから怯えていたのかもな」  
ミディアン

「どつちかつーと儂も人間と同じく、貴族に虐げられていたんだがなあ……」

「今はゼロム如きの身の上話など、この上なくどうでも良い。

御子は稀有だ。  
フェア・ムート

皇位精霊は特にな。むしろ初めてではないか人間に見つけられるなど。

そんな珍種が、何の変哲もないポリメシアに居ると判れば攻め込んでこような…」

「だよな。やっぱりそう考えるよね。さすが魔族を統括してただけはあるね」

「あ、儂の話は結局スルーするんかい」

「確かにポリメシアの土地は何処にでもある普通の土地だろうけど…俺やお前らが居る時点で、何の変哲もないって言葉は違ってくるんじゃないか？

人間が攻め込んできたところで、お前ら三人がズバツと片付けてくれるだろうに」

「エルオーネ、お前もスルーか」

「片付けるのは別にいいの。問題はその後さ。領主とかその程度ならどうにでもなるよ。

でもね騎士団とか、コレはまだいいか。神都からの輩が問題なんだよ。あの狂信者<sup>げす</sup>共」

「人間の間で、神都からの通達はほぼ絶対であろう？何処の国の王も無視はできまい。

例えば大衆から神聖視されていても蓋を開ければ欲望渦巻く、愚者の行列ぞ。

そんな輩共が『<sup>ファ・ムート</sup>皇位精霊の<sup>ザウーディ</sup>華人が攫われた』と吹聴してみる。

ちびは魔王<sup>わ</sup>並の悪党扱い、ダリアとグレーンは極刑。ポリメシアごと灰にされかねんぞ」

「ちっさい勇者さんが悪者に仕立て上げられる…神官が聞いて呆れ

る」

エルオーネが肩にかかる青銀色の髪を軽く払い、溜息を吐く。  
その顔は憂いを帯びても美しい。

今までスルーされていたゼロムが、ポロリと言葉をこぼす。

「ミルギス自身に自分の意思でここに居ると言わせればよかろうに。  
実際、本人はちびを気に入っているし。

まだ他の人間に気付かれてはいないのだから焦らずとも良いだろう」

「ゼロムってさあ…本当に人間の穢さを知らないの？

ボク、ちよっとトランシルヴァニアに行ってみたいよ。

どれだけ人間が無欲なのか知り合いたいし、伝説の一族も見てみたいし」

「やめれ。滅ぼされるぞ。特に今黄昏の都を支配しているのは正真正銘の神だ。  
はげもの

だいたい、ちび達の事を懸念して、ミルギスが精霊の加護持ちと偽ったではないか。

暫くはこのままでも問題なかつよ。加護持ちと華人とでは反応も違うしな」

「ほあ…すでに先手が打たれているのか。まあ加護持ちと言っておけば問題ない」

リセが腕を組み、軽く頷いた。ゼロムも同様に首を縦に振り、オー

マを見る。

オーマはまだ眉間に皺を寄せたまま、唸っていた。

「まあ、バレないようにするけど。いざとなったら村人の記憶を弄くればいいし」

「オーマ。お前ホント、ちっさい勇者さん以外には厳しいよな」

「ボク、基本人間は食料としてしか考えてないからね」

「悪魔だな」

「ボク、悪魔だし」

オーマはおどけて言う。しかし彼が本気なのは此処にいる誰もが知っていた。

「では、ひとまず…攻め込まれたら皆殺しの方針で」

「賛成」

「「異議あり!」」

リセがあっさりとまとめオーマが頷くが、ゼロムとエルオーネが立ち上がる。  
そして二人の声が重なった。

「めんどくさいではないか！」

「あの子の前で殺しはだめだ！」

「エルオーネの意見は聞くけど、ゼロムはまったく…」

「最強の不死の一族が聞いて呆れるわ」

オーマとリセがあからさまにゼロムを馬鹿にする。

ゼロムの考えとしては、自分達が口外しない限り、ミルギスが狙われる事もまた

自分達が大切にしている少年が、危険に巻き込まれる事もないと思っていた。

そしてそれは事実だった。

結局、暫くは大丈夫だろうと言う事で、今回の話し合いは終了したのだった。

## 第七話

ミルギスが僕達と一緒に暮らしてすでに一月が経った。

村の人達は僕がまた拾ってきたのかって呆れてたけど、誰も文句は言わなかった。

寧ろ赤ちゃんをホッポリ出すミルギスのお父さん達の事を怒ってた。事情を話すと、皆ミルギスを歓迎してくれた。精霊の加護持ちだからってだけじゃないみたい。

ミルギスは最初、不思議そうに村の人達を見てたけど、大丈夫って判ったらぶきやぶきや笑ってた。

精霊の赤ちゃんは普通の人間の赤ちゃんとは変わらなく未だ一人で座る事もできないでいる。

でもね、見ててすごく可愛いんだけどね…

ぶきやぶきやと笑うのが特徴のミルギス。

でも誰もその事にツッコミを入れない。ほら、可愛いと何でも許せちゃうあれだね。

ミルギスは僕やおじいちゃん、おばあちゃん他の村の人にも懐いている。

でもオーマを前にすると、泣く一歩手前みたいな感じになるからなあ。

あ、でも僕が抱っこしているとプルプル震えてるだけになる。一応泣かなくなるから　　いいのかな？

リセの時はもっとヒドイ。僕が傍にいても全力で泣くんた。

しかも泣き声が「ぷえええええ！！！！」じゃなくて「むつきゃああ！！！！」になってるんだ。

本当にミルギスは変った泣き声してると思う。

リセ曰く、「我らの氣に当てられている故、仕方なし」だそうだ。別にリセもオーマも威圧感があるわけじゃないんだけどな…

だからオーマとリセはミルギスのお世話から外してる。

だって、ミルギスがおお泣きするんだもん。なんか可哀想だしね。

初めて会った時から、エルオーネはミルギスを苦手に思ってたみたい。

羽を引つ張られたのがよっぽど痛かったんだね。

だからミルギスの面倒を見る時は羽が隠れるような服を着てるんだ。まあ、ミルギスもエルオーネに怒られてからは、羽根を引つ張らなくなったけど…

昼間はだいたい僕達がミルギスの世話をしている。

おじいちゃんとおばあちゃんは畑や糸紡ぎのお仕事あるしね。

僕はまだ小さいからおばあちゃんのお手伝いの方がいいけれどもう少ししたらおじいちゃんと一緒に隣の村までの配達業を手伝うんだ！

で、夜のミルギスの世話はゼロムがしてるの。ゼロムって夜行性なんだ。オーマが言ってた。

エルオーネは薬師として忙しいから夜くらいはゆっくりしなくちゃ体を壊しちゃうし。

ゼロムはミルギスの事をしっかりと世話してると思う。

だってミルギスってばゼロムを見て、すっごく喜んでるんだよ。



ゼロムと一日中遊んだ日とかはぐっすり次の日の昼まで眠ってるし。まあ、ゼロムもミルギスと遊んだ次の日は死んだように動かなくなるけど…

でもさ…寝室の分厚いカーテンを閉めきつて、頭まですっぽりと毛布に包まってるのはどうかと思うよゼロム。

あ、僕の家って部屋が幾つもあるし、二階建てなんだ。時々村の集会場になってる。

オーマとリセが何処からか石と大木を持ってきて、家を改築したんだ。

僕が昔、「お部屋いっぱい、ベランダでいたいむしたい！」って言ったらいいんだ。

で、二人はそれを実行したんだって…ごめん。あんまり覚えてないや。

ま、兎も角、僕のお家には部屋が幾つもあった、ゼロム達も一部屋ずつ使ってる。

それでも部屋が余ってるって結構すごいよね。

オーマもリセも魔法や魔術が使えるからって張り切りすぎだよ…

「ゼロムー。そろそろ起きてくれないと、シャシャイの世話手伝ってくれるっていったんじゃん！」

「うぐっ　　す、すまん。もう少し…流石にミルギスの全力を喰らってしまつと回復が追いつかん」

全力って、何？

「もー何言ってるの？怠けちゃだめだよ！」

「…あのな、ちび。ミルギスは精霊で赤子だ。力の制御が出来とらんだ。」

そんなミルギスの相手を儼はしとるんだぞ。風の刃で滅多切りにされたりとか。

真空状態の中に放り込まれたりとか、空に吹っ飛ばされたりとか…子守で命がけてありえん！」

「空が飛べてよかったじゃん」

「最後のところだけか、ツッコミは？！どれだけポジティブな視点なんだ！」

「もー。リセはおじいちゃん達とツラッティ退治に出かけてるし。オーマだって土木作業してるし、エルオーネも、薬草採取がてらミルギスの面倒見てるのに。」

ゼロムだけ怠けちゃダメだよ。ほら。後でお酒をちよこつと飲ませてあげるから、ね。ほら行こうよ！」

「酒…（別にそこまで好きではないんだが…まあ御位相に預かるるか）」

ツラッティって、あの異常繁殖して異様にでかくなったネズミか？」

「うん。被害は出てないけど。見つけちゃったから退治しておくべきだってリセが」

「…妥当だな。そういえばツラッティとは使い魔にもなるんだっ  
か？」

「ゼロム？」

「なんでもない。さて、動けるようになったし、シャシャイの毛で  
も刈り取るか」

「うん！」

そう言つてゼロムはフラフラと歩いていく。

…本当に疲れてる見たい。ちよつと無理強いしすぎたかな？

僕とゼロムが外に出ると、村の入り口の方に人ばかりが出来ていた。

## 第八話

「何かあつたのかな？」

「さあなあ？旅人でも訪れたんじゃないか。ほれ、シャシャイのところにいくのだろう」

「はい」

僕とゼロムが気にせず、裏の牧草地に行こうと歩いていたら、村人ゼクセンさんに呼ばれた。

なんだかうきうきしてる。珍しいなあ。

「おお！ゼロムいいところに、しかもチビまで一緒か！」

「チビって言うなあ！」

「怒るな、怒るな」

ゼクセンさんはいい人だけど、いい人なんだけど、デリカシーがない！

皆して、皆して！もう、コレって絶対にリセとゼロムの所為だよな！？

皆が僕のことちびつと言ううから、ゼクセンさんとか他の村の人まで、僕のことちびつて言ううんだよ。

もう。まともに僕のこと名前で呼んでくれるのって、同い年のティコ達くらいじゃないか！

ぷりぷり怒っている僕をよそに、ゼロムとゼクセンさんは話を進める。

「珍しい事に魔術師が来たんだよ。しかもツラッティがいるって言い当ててな」

「魔術師：なんぞ胡散臭いな。しかもツラッティがいる今の時期にブッキングなど」

「ん、そうか？まあちよつと聞け。その魔術師がツラッティを退治してくれるらしいんだよ」

「リセが出向いとるから今日中に殲滅して戻ってくるだろう」

「それがそうでもないらしい。なんでも今回のツラッティは普通とは違うんだと。」

ウラド市でもめつぼう暴れたらしいんだ。しかも皮膚が硬化して普通の武器じゃ歯が立たないとよ」

ゼクセンさんが身振り手振りで話をする。でもゼロムは呆れたように、聞き手に回ってる。

まあゼロムはリセがすごいって知ってるからね。

ツラッティが普通じゃなくても、リセなら平気って知ってるんだもんね。

でも僕が気になったのはツラッティよりも、ウラドって単語。初めて聞いた。

「ウラド…?」

「おう、チビは知らないか。ポリメシアから馬車で一月行ったところに有るでっかい街だ」

「そっか、馬車で一月もかかる所に大きな町があるんだ。」

「貴族っているのかな? 町の人はどういう生活をしてるんだろう。町には魔術師ばかりなのかな?」

「では、そこで発生したツラッティがポリメシアまで逃走してきたと言っ事か?」

「ああ、魔術なら直ぐに方がつくから安心しろっていったな」

「じゃぁリセに任せれば平気だね。リセは魔術使えるし。ね、ゼロム」

「「「え?!!」「」」」

「僕の言葉に、ゼロム以外の人達が驚いてた。何時の間にこんな人が集まってたんだろう?」

「そ、それは本当ですか? この村に魔術師が…」

誰だろ、この人知らない人だ。

魔術師…？

というか…

「え、皆知らなかったの？四年前洪水が起きた時、川の水塞き止めてくれたじゃん」

「か、川の水を塞き止めた？！」

「おお、そういえばそうだった」

「橋の修理とかもしてくれたよね」

「やだ。それはリセじゃなくてオーマよ、あなたったら」

「ふむ。言われて見れば、川に落ちた子供達を助けてくれたな」

「魔王<sup>リセ</sup>が人助けか…ちび、実はお前も川に落ちたくちか？」

「え、ゼロムなんで知ってるの？あの時いなかったよね」

す、すごいよゼロム！

いつもは全然冴えてないのに、どうして判ったんだろう？

あの時はゼロムと出会う前だったのに…拾う前だったのに！

「なんとなく。（やっぱしな。ちびが落ちたから助けただけか）

まあ遠路はるばるこんな辺境に出向いといてご苦労だったな魔術

師殿。

だが此処には非常に規格外な人外がいるから、心配せずともツラッティなんぞ殲滅する、いても無駄だぞ」

「え、しかし、でも…そ、その者は正規の魔術師なのか?!」

「正規?魔術師って魔術を使える人の事を言うんじゃないの?」

「知らん。正規でなくとも魔術使えるんだから問題なかるう」

ゼロムは何だかさつさとこの場を離れたがつてるみたい。

でも正規の魔術師って何の事だろう?

村の人達も首をかしげているし、でもこの魔術師?の人はすごく焦ってるみたい。

ツラッティってそんなに強暴だったっけ?

「しかし」

「くどい!」

「うわっ」

ゼロムが僕を担ぎ上げた。

ど、どうしたんだろう、いきなり怒鳴るなんて…

周りの人も驚いてみてるし。っていうか、僕も担がれてびっくりだよ。

「そこまで言うなら勝手に退治するがいい。その道は山へ続いている。」



ま、お前が行った処で既に事は終えているだろうがな、さて、ちびよ行くぞ」

「う、うわー。ゼロムおろしてよ」

「こっちのが早かるう」

「う〜」

僕は揺られながら運ばれた。  
そしてゼロムに運ばれながら思った。

「ねえ、ゼロムって魔術師がキライなの？」

「いや…あまり良い思い出が無かった、ただだろうな」

「？」

まるで他人事だ。

ゼロム自身が魔術師を嫌ってるんじゃない？

「ケルトⅡエンゼリカと言う魔術師を知っておるか？」

「知らない。僕が知ってる、魔術とか使ってる人はオーマやりセだけだよ」

「そうか…ケルトはな、魔術師だったらいい。しかしその境遇に耐えられなかった。」

儂はケルトが人間とは思えなかった。変っていると、面白半分で色々付き合ってたんだ。

それから儂はケルトと友人になった。友人になって暫くしてから、ケルトは死病に掛かった。

そして初めてアイツから打ち明けられた時は、酷く混乱したものだ。人間の魔術師だなど…思わなかった」

「魔術師って人間になるものじゃないの？」

「なあちび。儂の故郷は何処だと思う？」

「？ゼロムの故郷…貴族が、近くにいたから王都の方？」

「いや、七つの都市がある、ジーベンビュルゲン黄昏の都だ。トランシルヴァニア

エルデーエルヴェお前達の言葉では森の彼方の国と呼ばれていたか…」

うそ…だって森の彼方の国は絶対可侵の国だっておばあちゃんが言ってた。エルデーエルヴェ

誰もその境界を越えてはいけなくて、超える事ができても、とても大きな代償を払うって。

ポリメシアに住んでる人は誰もその境界まで行かない。

僕は、時々見に行くだけ。それでも皆にはいい顔されないのに…

ゼロムは、エルデーエルヴェ森の彼方の国からやって来た？  
でも、

「それって…どうやってポリメシアにこれたの?!」

「ケルトの魔術ちからがあつたからだ。 儂ちからの能力は酷く使い勝手が悪い」

「ちから?ゼロムも魔術が使えるってこと?」

「いや、儂では無くケルトの才能だ。 儂はケルトあいつの力を喰うばらった」

「う、うばった?え、それって、魔術って、才能とかって奪えるの?」

「ああ、儂の場合はな。 寧ろそれしかできん。 全て奪った。 全てを喰くはらい尽くした

記憶を、思い出を、未来ちからを願ちからいを全てだ      ケルトの死と引き換えに、儂はアイツの命ちからを手に入れた」

ゼロム…何だか苦しそうだ。

悲しいのかな、寂しいのかな      それとも、悔しいの?

「友達が、死んじやって辛いんだ。 その友達と同じ魔術師を見ると  
思い出しちゃうの?」

「…そうかも、しれんし。 そうじゃないかもしれん。  
いや。 コレはきっと、ケルトむかしのことの記憶だ。 昔の事…幼い頃の記憶」

「…あの魔術師の人、早くいなくなればいいね」

「珍しいな。 ちびが人を邪険に扱うなど」

「ゼロムが寂しそうな顔してるからだよ。ゼロムが傷つかないならその方がいい」

「そうか…すまん。さて、ではシャシャイの毛をさくつと刈り取るとするか」

「うん！」

ゼロムは僕を抱えなおした。

さっきは肩に担がれたけど、今度は片腕で抱っこされた。

そして僕達はうらの牧草地へ行く。シャシャイの毛を刈り取りに。

刈り取った毛をおばあちゃんに届けて、午後は糸紡ぎのお手伝いだ。

## 第九話

僕はシャシャイの刈り取った毛を軽く火で炙る。

シャシャイの毛は火に当てると、ふわんと膨らんで倍の大きさになる。

ささっと炙ってから、シュルシュルと一本ずつ毛を抜いていく。

シャシャイの毛は温かくなると、毛と毛の間に空気が入って軽くなるんだ。

だから糸を紡ぐ前はこうして毛を取りやすくしなくちゃいけない。でも火は熱いから、火傷をしないように気をつけなくちゃいけないんだ。

「ゼロム、こっち終った!」

「こっちも終つとるぞ。しあし今年は質がいいな」

「あ、やっぱり?何か手触りがいいんだよね。今年の。さ、おばあちゃんの所に持っていこう」

「ああ。しかし、シャシャイには別に変わった事などしとらんのかな」

「そういえば、リセが何回かお世話してたかも。珍しかったなあ」

「…原因それっぽいな」

リセは殆どおじいちゃんの手伝いで畑を耕したり、チーズやミルク

を隣の村に運んだりしている。

隣の村と言っても、早馬で4日はかかるから、そういった体力仕事は本当は若い人がやるんだ。

でも僕はまだ子供過ぎるからおじいちゃんの手伝いは出来ない。代わりにリセが手伝ってくれている。

長旅は疲れちゃうのに今年は何回か、僕と一緒にシャシャイの世話を手伝ってくれた。

あれかな？

僕がリセに、シャシャイの世話が上手くできないっていったからかな？

そういえば、リセってばシャシャイのご飯に何か混ぜてたなあ…

まあ栄養剤とかかな。エルオーネが協力してくれたからかも。

僕とゼロムは一緒におばあちゃんが糸を紡いでいる工房にシャシャイの毛を運んだ。

ゼロムは何かを考えているみたいだったけど…どうしたんだろう？まあいいか。

おばあちゃんにシャシャイの毛を届け終わって、僕とゼロムは家に帰る途中オーマに会った。

オーマも丁度終わったのかな。

よし。コレでお昼を作ってくれる人をゲットだ！

あのね、ボクもご飯作れるけど。オーマやゼロムのお料理はすごく美味しいんだ。

おばあちゃんもすつごく二人を褒めてた。

リセは微妙かな…なんか昔はお城に住んで、周りの事は全て召使がやってたらしいからね。

エルオーネのはおいしいって言うか、草っぱい味がするんだよね。

食べれないわけじゃないけど…うん。ともかく、二人のご飯は美味しいんだよ。

「あ、おチビちゃん」

「オーマ！噴水造りは終わったの？」

「うん。ボクの手にかかればあんなの簡単だよ。ほら」

「オーマ…あれはやり過ぎではないか      天辺に一角獣のオブジェとは」

村の真ん中に円い容の噴水が出来上がっていた。

三段重ねになってるみたいで、噴水の腰掛ける部分には花のオブジェが作られていた。

二段目は木の実と鳥のオブジェが、三段目はゼロムが言っていた一角獣があつた。

相変わらずオーマはすごいなあ。一日で作っちゃうんだもの。

一角獣…えっと、「けがれなき清らかな乙女」の所に現れる神様の獣だっけ？

へー。馬とあんまり変らないんだ。頭に角が生えてるけど、あれって邪魔にならないのかな。

ま、神様の獣だから何とでもなるのかも。

「別にいいでしょ。迷惑かけている訳じゃないんだから。」

ところで、さっき他の人達が騒いでたけど、いったい何があつた

の？」

「ああ、捨て置きあんなの」

「珍しい      ゼロムが邪険にするなんて」

「魔術師つて人が来てるんだよ」

「はあ？魔術師い？こんな辺境の村に？わざわざ何の為に？」

「えっと、ツラッティが凶暴化してて、しかも魔術じゃないと退治できないって…」

「ツラッティって…魔術師が失敗して放置した出来損ないの使い魔のこと？」

出来損ないでも、製作者の魔術師以上の力の持ち主じゃなきゃ殺せないヤツだね。

でも、どのみちポリメシアにツラッティが出たって、ボクやりセいるし問題ないよ」

「ふーん。でもウラド市つて所で大暴れして大変だったんだって。

だからこつちにも被害が出ないように魔術師の人が一応来たんじゃないかな？」

「被害が出ないようにねえ…ゼロムはどう思う？」

「      大方、ウラド市を塹にしとる魔術師が使い魔作りに失敗したんだろう。

市街で暴れた挙句、捕獲できずに此处まで野放しにしてきた。魔術師が己の使い魔、しかも出来損ないに逃げられたとあっては



面目丸潰れだ。

あわよくば、ウラド市から離れた辺境の村で始末がてら隠蔽工作でもしにきたんじゃないか？」

「ポリメシアはうつてつけだものねえ。近くに森の彼方エルデーエルヴェの国あるし」

「ふ、二人とも、どうしたの。そんないんぺいつて？」

「君（お前）は気にしなくていい」

な、なんかオーマは目が笑ってないよ。

ゼロムも眉間にしわ寄せてるし…ど、どうなっちゃうんだろう？

そんな僕を見て、二人は頷きあつた。

なんか、僕だけのけ者にされてる気がする…

「オーマも魔術師がキライなの？」

「ボクは 割と好きかも。我欲まじゅつしの亡者はいいい味だすし」

「???」

「オーマ…この村で問題起こすでないぞ」

「判ってるさ。でも久々にああいうの食べたいんだよねえ」

「オーマはお腹すいてるの？じゃあ、早くお家帰ろうよ！」

久しぶりだなあオーマがお腹すいたって言うの。

あんまり珍しかったし、オーマの願いもあって僕達の話はそこでお終い。

三人でお家に戻ってお昼の準備をした。

それと同じ頃に、エルオーネとミルギスも戻って来てから丁度いいね！

## 第十話

野菜たっぷりのスープと、オーマがぱつと作ったふつくらなパン。川を上つてきた身の引き締まっているお魚のムニエル。

そして山で採ってきたオレンジを絞ったジュース。

食後のデザートはシャーベットだって。これはゼロムが昨日の夜から仕込んだもの。

初めてシャーベットを見た時はすごく感動した。だって冷たくて、甘くて直ぐにとけちゃう。

オーマもちよつと驚いてた。王都でも珍しい食べ物なんだって！ゼロムっていったい何者？！って思ったけど、ゼロムはゼロムだし別にいいや。

即席で此处まで作れるオーマとゼロムは凄いと思う。

「はい。ミルギス、あ〜ん」

「ぶあ〜ん」

一月も経つと、ミルギスも慣れてくる場面がある。

それはご飯の時。傍にオーマやりセがいてもご、飯を食べている時は泣きたいりしない。

どっちかって言うと、オーマの作るご飯は好きみたい。

ミルギス用にちょこんと取り分けられた食べ物、今では綺麗なお皿の上からなくなっている。

取り分けてくれたのはゼロムだったけど。

エルオーネはミルギスに前掛けをしてくれて、膝の上に乗っける。

普通に椅子に座らせてもテーブルに届かないからね…

エルオーネがいない時はゼロムの膝の上に我が物顔で乗っかってる。でもデザートを食べさせるのは僕の役目！だって可愛いんだよ。ぱくぱく食べてくのが。まるで餌付けしてるみたいでさ！

「生後間もない赤ん坊が固形物を取るって何だかシュールな場面だね。」

みてよ。魚の骨とか器用に吐き出してるし…野性の本能が強いのかな？」

「そうか？俺は華人<sup>ザウディ</sup>は知らないが、普通の精霊の子はこんなもんだぞ。」

そもそも野性の本能<sup>おまえ</sup>つて、悪魔<sup>おまえ</sup>の方が格段強いだろうが」

「エルオーネお前、やけに詳しいな…野生つて、精霊は自然と共にあるのだから野生だろう」

「ああ、俺はハーフだから。有翼人<sup>ウインディーネ</sup>と水守<sup>ノス</sup>の。」

「何だか野蠻<sup>フェラート</sup>と言われているみたいで嫌なんだよ。ゼロムだって化け物<sup>フェラート</sup>と言われるのは嫌だろ？」

「ああ　　つて、」

「「え？」」

「ゼロムは兎も角、おチビちゃん知らなかったの？」

「えええええ？！！エルオーネは水の精霊だったの？！うわあ、う

わっ！」

「…有翼人にしては変わった色だと思っていたが、混血児だったのか」し、知らなかった。エルオーネって水の精霊とのハーフだったんだ！だから時々エルオーネの周りに、水の玉がぼよんって浮かんでたんだ。

庭に池を作って水の中に青いバラって花を栽培したり、川釣りで一番魚を多く捕まえたり

枯れた井戸に何かを放りこんだらぶはーって水が噴出したのも、全部エルオーネが水の精霊とのハーフだから！

あ、噴出した水はオーマが留めてくれたよ。さっきの噴水はそのために作ってたんだ。

すごい。オーマやりセもすごいけど、精霊ってすごい！

ミルギスも大きくなったら竜巻でも起こせるのかな？

あ、でも竜巻起こされても村が壊れそうだから困るかも…

「まあね。有翼人でも稀有だけど…別に俺みたいなのはいないわけじゃないだろう」

「僕はあまり見ぬがな。しかしミルギスが懐いとる訳がようやくと判った。

ウィーディ ウンディーネ

風人と水守は穏やかな気質同士、仲が良いからな　　ぐはっ！

？」

「み、ミルギス?! ご飯の時は遊んじゃダメ! まだシャーベット食べてる途中でしょ！」

食器の破片で怪我したらどうするの!!! 悪い子にはゼロムだって

デザート作ってくれないよ！」

「ぷえ?!」

ゼロムが天井にぶつかって、びたんって音を出しながら床に落ちた。ミルギスはふよふよヒラヒラした布をぺたんと床につけて驚いていた。

あれ…

ミルギス、デザートでゼロムが作ってたって知らなかったのかな？いや、でも、ゼロムが料理作ってるの知らないはずは…

「もうご飯中に遊ばない？」

「ぷうぷえ」

「約束だよ？じゃあ、これ食べちゃおうね」

「先ず、残ってるシャーベットをミルギスに上げた。

「儂の安否はスルーなのか…」

「仕方ないだろう。お前は赤子ではないんだから」

「差別だ…此処にきてまで差別を受けるなんて。儂って…」

「ゼロム。これは差別じゃなくて区別だ。子供と大人の」

「あははは。エルオーネ、ものは言いようだね。にしてもヘタレだねゼロムは」

コンコン。

「「「!」「」」

オーマが笑い終わった時、誰かが扉を叩いた。  
誰だろう？お昼はおばちゃんもおじいちゃんもいないって村の人は知ってるのに…

「はい！って、え、オーマどうしたの？」

「僕が出るよ。おチビちゃんはエルオーネとミルギスと一緒に此処にいて」

「どうして？」

「どうしても。ゼロムはボクと一緒に行くよ」

「ああ」

片腕にミルギスを抱え、もう片方の手で僕を引き寄せる。

背中の羽がパタパタと動いている。皆どうしたって言うんだろう？

「こんにちわ。ウラド市より参りました、魔術師のイースと申します。」

此方のお宅に、リセという方が居るとお伺いしのですが、今はいらっしゃいますか？」

「ああ、リセはここに住んでいるけれど今は出かけているよ。」

どこぞの愚かな魔術師から逃げてきた、失敗作のツラッティを退治しに行ってるけど？」

「…お詳しいんですね。リセという方は魔術師なのですか？」

「さあ？僕はリセじゃないからね。本人に聞けば？」

「…」一緒に住んでいらっしゃるのに、仲が悪いんですね」

「そう？で、魔術師なのになんでここにいますの？ウラド市の不始末を、此処の人達に押し付けるつもり？」

「まさか！綺麗なお嬢さん。私もお力をお貸ししたかったのですが…」

「へえ、でもリセには会ってないんでしょう。じゃなきゃここに来る筈なものねえ」

「ええ。お会いする前に、其方いらっしゃる方に必要ないと言われてしまったので」

ちら。



「（何余計な事を喋ってんだヘタレ！寧ろ追い出せよ！！）」

「（無茶言うな！ちびもおったんだぞ！プライド高そうだから焚きつければリセの所いくと思ったんじゃ！）」

「（他力本願なわけ？！居据わってるじゃないかヘタレ！）」

「（ヘタレっていうな　　すいません。調子に乗りました…）」

「素人に言われたくらいで引き下がるなんて、随分と低いプライドだね」

「お話によると、リセという方は四年前の洪水で荒れ狂っていた川の水を塞ぎ止めたとか…」

「そのような高等魔術を使える方は極僅かですが、私は『リセ』という名の魔術師を聞いた事ありません」

「ふゝん。それで、君は何がしたいの？」

「お会いしたいのです。そして確かめたいのですよ。正規の魔術師か否か」

僕はこっそりと壁に耳を当ててオーマたちの会話を聞いた。  
なんだかオーマもゼロムも普段のニコニコした顔はしてないみたい。  
それって、やっぱり

「オーマ怒ってる」

「ああ、そのようだな。しかしこんな辺境の村に魔術師か…」

「ゼロムも魔術師のこと苦手みたいだったけど、僕もその理由わかった気がする」

「それは、どういう意、」

「だって、オーマは確かに綺麗だけど、女の子じゃないよ！  
昔は女の子っぽかったけど今は違うのに、あの魔術師の人失礼だ  
！」

僕が、ぐっと力説してるのに、エルオーネは僕の頭を撫でただけだった。

そして僕らはまた壁に耳を当てて会話を盗み聞くのだった。

## 第十一話

それから暫くしても、魔術師のイースと名乗った人は僕達の家に居続けている。

オーマとずっと喋ってる。でもオーマは早く終らせたいみたい。ゼロムのほうは全然喋ってない。オーマにまかせつきり。

「ねえ、エルオーネ。正規の魔術師ってどういう意味なの？」

ミルギスはお腹がいっぱいになって、エルオーネの腕の中でぐっすり寝ている。

僕とエルオーネは壁に耳をつけたまま会話した。

「正規の魔術師　多分、魔術師の学び舎を卒業した者の事だろう。」

ほら、ヨルンが傭兵の証を持っていただろう？あれと似たようなものだと思うが」

「ヨルン兄さんが持ってた…傭兵になるのも魔術師になるのも許可が要るなんて、大変だね」

「ああ。最低限のラインを作っておかないと、調和ルールが乱れるからじゃないか？

魔術を扱えるものと、そうでない者の差は大きい。国はそれを管理したいんだろう。」

まあ学び舎と言っても、実際は金持ちか余程の才能の持ち主でなければ入る事はできない」

「へえ、お金持ちって貴族とか？」

「そうだな。まあ気にするほどの事じゃないさ。魔術が習いたければ俺が居るし

魔獣召喚や魔王の技を学びたければ、リセに聞くといい。知識を広げなければオーマだな」

「ええ？エルオーネも魔術を使えるの？！」

「ウンディーネ水守のハーフだからな。ま、水に関することが専らだけど」

「へえ」。でも何でリセが魔王の技なの？そもそも魔王の技って何？」

「それは…魔王の称号、つまりは二つ名を借りて魔術を行なう事を言うんだ。

あー、極端に言う<sup>ロード・コーシエク</sup>と頂に君臨せし闇の名を使えば、大抵の高位魔族は従える事ができる。

でもそれはとても高いリスクがかかるから、まったく使用される事はないけれどね…

リセがそういった事に詳しいのは、昔に色々あったんだよきっと。

リセは努力家で、色々な事を昔から良く知っているんだ。

長く生きているから…かな」

「ロード・コーシエクって魔王で一番偉くて怖いんでしょ？」

殆ど姿を現したことの無い魔王でしょ？すごいね！今度リセに教えてもらおうと」

「だから、危険だから誰も使わないって…」

すごいなあ、リセは。

確か魔王って歴史の中でも殆ど出てこない存在で、姿も殆ど判らないんだっけ？

リセは昔、お城に住んでいたって言ってたから、きっとその時に魔王の事を勉強したんだね。

本当にリセはなんでも頑張る頑張り屋さんだね！

にしても、あの魔術師の人まだいるし…いったいどうしてここに来たんだろう？

…もしかして

「リセが魔王の技を使えるって知ってたから会いたいのかな？」

「違うな。大方川を塞ぎ止められる技量を持つリセの出身が気になるっただろう。」

特に貴族出身の魔術師は、自分よりも才能のある市民出身の魔術師を嫌うと聞いたし…」

「何それ…別にリセ悪い事してないのに」

「まあな…って、どこに行くんだ？」

「僕、リセを呼んでくるよ。会えばすぐにあの魔術師の人いなくなると思うし」

「は？ちよつと待つ」

「いつてきまーす」

僕は反対の扉、つまりは裏口から外へと出て行つた。

エルオーネが何か言つたみたいだけど、ミルギスを抱っこしてるから追つてはこない。

ほら、動くとミルギスが起きちゃうしね。ミルギスの寝起きは悪いんだ。

ふえふえぐすんつてすぐにぐずるから。

ああ、何だか嫌だなあ。

ゼロムは魔術師の人を見ると辛そうな顔をするし。

オーマもニコニコしてるけど、本当には笑ってないし。

早くリセに会わせて、さっさとこの村から出て行ってもらおう。

魔術師の人さえいなくなれば、みんないつも通りに元に戻るよね！

「えーと、リセがツラッティ退治に行つた方は…」

ガサガサ

「え？」

なんか草の間に黒っぽいものが

「う、うわあああっあ！！！！？」

キシヤアアア

ガッン！！

僕はとつさに後ろに飛びのいた。

目の前にはネズミが、多分、これがツラッティだ。  
飛び込んできた勢いが、すごく強かったみたいで地面に大きな穴が  
開いた。

何これ…ぶつかったら僕のお腹に穴開いちゃうよ？！

異常繁殖した異様に大きなネズミ…毛皮？

違うよこれ、針っぱいよ…触ったらちくちくじゃすまないよこれ！

「な、何で、こんな」

え、え、え？

リセとおじいちゃん達が退治しにいったんじゃないの？

何でこんな村の近くにいろの、どうして口の周りだけ真っ赤なの！？  
ふと僕の頭にゼクセンさんの言葉がよぎった。

『皮膚が硬化してて普通の武器じゃ歯が立たないとよ』  
そういえば、オーマも言ってたよね…

『製作者の魔術師以上の力の持ち主じゃなきゃ殺せない』って

魔術なんて僕使えないよ！

使えてもこんな、凶暴なヤツに勝てる気がしない…

「どうしよ、逃げなきゃ…」

来た道を走って戻るつもりでいた。でもその前にもう一匹飛び込んできた。

か、囲まれちゃった…

どうしよう、どうしようっ

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い  
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い  
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い  
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

「ふ、ふわ…」

目の前がかすんでくる。泣いてる場合じゃないのにつ！  
どうしよう…

連レテ行カレル

誰が？



ホラ、振り下口サレル銀色

あの銀色は何？

泣ク声ハカ細イ

何これは？

手ヲ伸バシタ人ハ遠イ

抱エテクレタ人ハ熱ヲ失ツテイク

どうして、真っ赤になってるの…

「う　　うわあああつあ」

訳が判らずに僕は叫ぶ。

こんな事は自殺行為なのに、それでも叫ばずにはいられない。  
だって、何、何なのこれ…

僕はこんな場面を知らない。

僕はこんな真っ赤な地面なんて知らない。

泣いている人が誰なのかも、動かなくなった人が誰なのかなんて  
僕は知らない。

【 】

「ひっ?！」

幾つもの重なった音が僕の耳に聞こえてきた。  
背中がビクリと震える。だて、何だか、怖いよ

そしたら、僕に今まで唸っていたツラッティ2匹は大人しく木の下  
で丸くなる。

な、何?今度は何が起こるの?!

すると、僕の傍に影が落ちた。

「ちび。怯えるな。それらはお前に害を与えぬ」

「リ、セ…リセっ!」

僕は必死に手を伸ばした。

リセはぼくのその手を取ってくれた。そして優しく抱っこしてくれ  
る。

温かいのに、まだ恐怖はなくなるらない。

「驚かせてしまったな。この地に住む魔族は絶対にお前を傷つける事はさせぬ」

【我、リーセンハイドラは此処に誓おう  
我が眷属はそなたを傷つけぬ。何があろうとな】

「ひつく、う、うえ、リセえ。ひつく、ひつう…怖かったお」

また幾つもの重なった音がリセから聞こえた。  
僕は思い切り泣いた。

リセに抱っこしてもらってからも、ずっと泣いた。

リセは何も言わずに僕の背中を撫でてくれる。

それが心地よくて、つらつらとしてしまったのは仕方ないよね…

「…あれを服従させたのは良いが、まさか此処までこの子が怖がるとは思わなんだ。」

さて、これからどうしたものか  
致し方ない。処分して別の  
を連れてきて代用するか…」



## 幕間／家族会議 2

「で？何でおチビちゃんはあるなに泣き腫らした目だったわけ？」

優雅に脚を組み紅茶を一口啜るオーマが、床に正座している  
もつと確に言う

エルオーネの作った強力な痺れ薬を飲まされ、ゼロムに正座させられたリセが、オーマの前に差し出された。

因みにエルオーネとゼロムの二人はオーマから離れた場所に座っている。

これは自分に被害が及ばないよう考慮したためだ。

今のリセの現状は、普段ゼロムが居るべきところなのだが、今回は事情が違ってくる。

「そ、それは…ちょーっと改良したツラッティがちびの目の前に…」

「ねえリセ 君って馬鹿？」

「（ビクッ）！」

甘ったるい声でオーマはリセに問う。

男にしてはぷつくりと柔く膨らんでいる唇がニイと弧を形作り、普段のダークブラウンの眸は赤みを増していた。

笑ってるのに、笑っていない

エルオーネ、ゼロム、リセの心境が一つになった。

本来の力関係で言えば、最強と語られる不死の一族のゼロムが一番強いはずなのだが、性格上それはない。

故に魔王の一人であるリセが頂点に立ち、高位悪魔のオーマは口出しなど出来ないはずだ。

そのはずだったのだが、しかし、それは今適応されない。

この村、ひいては彼らが溺愛している少年の傍に居る為に一つのルールが設けられている。

溺愛している少年は多民族から好かれる。そしてかなり高い確率で何かしら拾ってくるからだ。

嘗て魔王といわれた存在の一つが。

今でも神都とで恐れられている悪魔が。

稀有な種族であり立場の混血の有翼人が。

そして伝説と語られ、その姿を消した最強の一族が。

「少年を傷つない」という絶対のルールを決めていたのだ。

しかし今回はそのルールが破られた。

ヘタレでヒエラルキーが一番下に有るゼロムではなく、そのゼロムを普段いびっているリセが、だ。

「す、すまぬ」

「はっ。謝つてすめば何でもうまくいくと思ってるワケ。ねえ、焦<sup>イ</sup>獄<sup>ゼルドラグアル</sup>の火蛇さま？」

「そ、そう言つ訳じゃ…」

「じゃあ何？土下座？しろよさつさと。死ねよマジで。黽<sup>ヒナ</sup>らせるよ今」

「な、な、ななな！？」

「オーマ、気持ちは判るがもうその辺に。リセだつてちっさい勇者さんを傷付ける気はないんだから」

「何？ボクのやり方に文句あるの？いいよねえエルオーネは。おチビちゃんと一緒にいれてさ。あのクソ魔術師とお話しなかったものねえ」

「（なんであんなにヤサグレてんだ？）」

「（あー…あの魔術師がオーマの神経を逆撫でしてなあ）」

「（逆撫で…普段のオーマからはとてもじゃないが、考えられないぞ）」

「（神都に席を置いている魔術師　正確には導師らしい）」

「（導師…？神都の資金集め役が何故？というか、その後はどうなつたんだ？）」

「（オーマが精神的に追い詰め弄つた拳句、どこぞかに捨てに行つた。それきり知らん）」

「（ゼロム。こちら辺で死体をあげるないつも言ってるじゃないか！）」

「（儂とてちゃんと言つたわ！オーマも理性は残つてたし、別の場

所で始末つけたようだ」

「（始末つけたのに、何でオーマはリセに八つ当たりしているんだ？）」

「（　　　　若いからなあ。感情が制御できてないんだろう）」

「（ゼロム。お前っていったい幾つなんだ？）」

ゼロムは視線を遠くへとやる。エルオーネの疑問イは答え無かった。ゼロムの顔は、完全に憔悴しきっていたのだ。

それもそのはずだ、オーマと魔術師のやり取りを間近で見ていたのだから。

魔術師イースと会話していたオーマは、会話が進むに連れて笑顔が引き攣つていき

神都の教えを説かれた時は、口元が痙攣しだしていた。

そして魔術師が、このポリメシアを私欲の為に灰にしようと提案した時、その場の空気が凍った。

無論ゼロムとて魔術師の話に腹を立て、つまみ出そうと動こうとしたのだが、オーマの方が早かった。

『いい加減、自分の立場弁えて。君さ、中身暴かれてるのにも気付いてないの？』

相手の喉を片手だけで握り潰し、暴れだす前にそのまま宙吊りにした。

そして冷え切った眼で相手を射抜く。冷笑を添えて。

『若さゆえの過ちなんて言葉では片付けられない事態に陥ってるね？  
ウラド市から流してもらっている魔薬ボイズンが此処最近滞っているんだ  
って？薬中の信者って笑える。



でもそれってさ、表向き神都ではご法度でしょ？君、神官だよな。  
簡単にバラしていいの？

導師でもある君が他国に催促しに来て、たらい回しにされた挙句  
に収穫なしだったんだあ。

それで怒った君が使い魔を放ってウラド市で暴れて、でもやり過  
ぎて手に負えなくなってる？

じゃあ面目丸つぶれだよねえ。どうにか汚名返上するために、こ  
んな辺境まできちゃったんだ！』

くすくすと笑うオーマは楽しげに秘密を暴いていく。

ボイズン  
魔薬 それは依存性の高い毒だ。快楽と過去への回帰が約束さ  
れる。

とある毒草と魔獣の血を混ぜる事によって作られる。  
ウラド市は辺境 エルデーエルウェ  
森の彼方の国が近くにあるためか、あまり重  
点的に警戒されない。

されないというよりも、どの国も不思議で不気味な国には近づき  
たくないようだ。

大抵の国は魔薬の精製・売買を禁じている。しかし神都は違った。  
ボイズン  
信者を増やすため、魔薬を薄めた水を参拝者に聖水と称し売ること  
がしばしば。それも金持ちを中心に。

その時ゼロムは思った。

ああ、悪魔で性格悪いんだ。これじゃあ故郷くにの小公爵と大差  
ねえや。

『あはっ。怯えてる。不思議そうな顔してる      ボクね、オーマ  
って言うんだ。』

この名前じゃあ君はピンと来ないかあ。そうだね、オーセルダ・マーティス蠢欲の悪魔つて言えば判る？』

イースは恐怖した。潰された喉の痛みが判らなくなる程、体が震え心が潰された。

神都　アーズカルドの導師としてではなく、また一人の魔術師でもなく、ただ一人の人間として。

恐怖から逃げるように魔方阵を描こうとする魔術師に対し、オーマは少女が花開くように笑う。

そして、必死の思いで魔方阵を描いている魔術師の手に、オーマは少しずつ力を加えていった。

イースは悲鳴を上げる事も許されず、ミシミシと音を立てて潰されていく己の手を見せ付けられた。

肉が潰れる音、肉に圧迫され骨が潰される音。

ぼたっと落ちる血と肉片。ぎちぎちと緩やかにねじ切られていく魔術師の右腕。

恐怖しか感じられなかった状況から、視覚で捉えてしまった現実に激痛が走る。

魔術師の目の端には涙がたまる、オーマはそれを赤い舌で掬い上げた。

その行為が、さらに魔術師に恐怖を与え体を強張らせた。

『久々だなあ。こんなに哀願されて、忌々しく思われたの。いいね。食べ甲斐があるよ』

オーマは笑みを深く、恐怖に屈した魔術師イースの心臓を貫いた。

ゼロムは今さつきまで、この部屋で人間一人を嬲っていたオーマを見て溜息を吐く。

楕円形のテーブルに顎を載せ、行儀の悪い格好のまま顔をエルオーネに向けた。

「（なあ、エルオーネ。オーセルダ・マーティスって知っているか？）」

「（知っている。精霊の間でも評判が微妙な悪魔だ。…オーマがソレなのか？）」

「（うむ。微妙なのか？）」

「（微妙だ。精霊を喰う事もあれば、人間を墮落させる事も有る。しかし専らの被害は人間だ　　神都の神官で精霊や魔族を虐げている者ばかりだから）」

「（成る程な。オーマの本名を知ったあの魔術師、目の前で自殺しようとしたんだ）」

「（賢明な判断だと思う。オーセルダ・マーティス蠢欲の悪魔は残虐な思考の持ち主で有名なだ）」

「…儂、よくぞ発狂せずに過ごしてこれたな」

「ちよつとそこ！ボクがリセを説教してるんだから、べちゃくちゃ喋らないで！」

「「はい」」

「オーマ、我の話を聞いてくれても良いではないか！」

「はっ。おチビちゃんを泣かしてる時点で死刑って決まってるんだよ」

「あそこまで驚くなんて！グレーンだって騎獣が欲しいと言ってたんだもん！」

ちよつとツラッティを改造して、皆の交通手段にしようとしただけだもん！」

別にちびを怖がらせようとか怪我させようとか、泣かせようとか思っ  
てないもん！」

「キモっ！何ももん言ってるの、キモイよりセ。」

「だて、だて、我だって皆の為に色々しようとして頑張ってるんだもん  
！」

「ちよつと二人とも、このキモイのどうにかして！」

「キモイ？！我はキモくないもん！」

「キモイよ！本当にこれが焦獄イゼルドウグアルの火蛇と呼ばれた魔王なの？！」

「「本人が言ってるからそうなんだろう？」」

「ちよつ「うわーん！皆して、皆してっ！また我のこといじめるっ  
！！」」

「「また？」」

「あ…：そういえばリセの家出の原因って、他の魔王達にいびられた  
からだっけ…」

「家出？！魔王が家出？！ドンだけ人間くさい魔族の王様達なんだ  
？！」

「あゝ。判る判る。身に覚えのない事で催促されたり、知らぬ間に人身御供にされたり」

「ゼロムっ！お前もか、お前もそう言う経験があるのか！ひどいな！辛よな！

彼奴ら自分達は好き勝手遊びくさってからに！我にだけ雑務を押し付けるんじゃない！」

「儂の事を散々殺しておったヤツが気安く共感するでない。キモいわ阿呆」

「！！！！！！」

「あ、固まった。ゼロムにキモイって言われて相当ショックだったみたいだね」

「本当だ。オーマが説教するよりも、ゼロムに侮辱された方が効果あるようだな」

「侮辱ではなく事実だろうに…つか、お前らの方が儂を侮辱しとるぞ！」

ゼロムに侮辱？されてから暫くの間、リセは抜け殻の様な状態だった。

溺愛している少年が潤んだ眸で見上げながら説得して、やっとリセが元に戻ったのは暫くしてからの事…



## 番外編 焦獄の火蛇

我が名はリーセンハイドラ。

魔族の王

イゼルドウゲアル  
焦獄の火蛇と恐れられる魔王の一人だ。

いや、魔王の一人だった。

何故過去形で語っているかだと？

フン。当の昔に魔王業なんぞ溝に捨ててきたわ！

嘗ては我も魔王である事を誇っていた。

我ら魔族は数百種にも及ぶ一族が栄えている。そんな中、その一族を統括するのが魔王だ。

魔王とは人間のように世襲制ではない。強く秀でし者が下々を支配し統括する。

魔獣・魔人・妖魔等は皆、我の下僕であつたのだ。

しかしだ…我の所業故か、ここ数百年で支配する種族がぐつと増えてしまった。

人間共も戦を仕掛けては来るが、まったく我の相手にならん。

これは我だけに言える事ではないが、他の魔王たちもやる気がそがれておる。

人間共に殺して欲しい下僕もいる事にはいるのだが、逆に人間が殺されているし…

昔は夜の一族と魔族は争っていたらしいが、我が生まれて600年はまったく姿を見ない。  
ミティアン

エルデーエルウェ  
たしか森の彼方の国に、否、彼奴らは己の国を黄昏の都と呼んでお  
ったか

兎も角、滅んだのかはたまた自国に引き籠もっておるのか、暇潰し  
の相手がおらぬ。

悪魔も我ら魔族と似ている。

ただ彼奴らは我らと違い、人間共しか糧にできぬ事か…人間が居な  
ければ存在できぬ

なんとも不安定な生き物共よ      そんな悪魔共も最近はなりを潜  
めている。

なんでも四方に君臨する聖魔の一人が入れ替わったとか、どうか…

そう、我の余暇は下々の管理に全て費やされていったのだ…

下々の声を聞き、要望をかなえ、行動を起こす。その繰り返しだ。  
はつきり行って単純。そして一定で、我でなくとも誰にでも出来て  
しまう。

戦争もなくいたって平和だ。平和なのはいい。

しかしだ！！

下々が平和でのんびりしているにも関わらず、何故に我だけが雑務に  
追われねばならぬ？！

他の魔王たちとて悠々自適に人間の国へ旅したり、精霊の祭りに参  
加したり

ドラゴンを捕獲してペットにしたり…その他もろもろやっているの  
にっ！

何故、我だけ、城から一步も出られんのだああああ！！！！？



喧嘩か、喧嘩を我に売っているのだな？

イゼルドウグアル

この焦獄の火蛇であるリーセンハイドラに宣戦布告しているのだな！？

憤りを感じずにはいられん！！我も外へ行くぞ！

そう思いいざ扉を開けようとしたら、何故か下僕どもが書簡を持っていた。

しかも明かに、我が統括し支配している一族以外の者まで居る。

「魔王様、判子をお願い致しまする」

イゼルドウグアル

「焦獄の火蛇様！此方の書簡もお願い致します！！！！」

なんじゃこりやあああああつ！！！！！！？

待て待て、待てっ！！

「何故、貴様らが、私の元に、集うておるのだ？」

「「「魔王様が焦獄イゼルドウゲアルの火蛇様ならば城にいらっしゃるから、と」「」

「おい、此処最近、私の領域に出入りしている管轄外の下々とは貴様らか…？」

「「「はい。我が魔王様より許可を頂いております！！」「」

まさか、なんぞ最近書類業務が増えていると思えば、原因はコレか？

私の管轄外、統括しなくてもよい一族の分も、私は雑務をこなしていたと…

寝る間も惜しんで、外に行く事も出来ず、仕方無しと括っていた我に対して

彼奴らめっ、あろう事が己らの仕事を我に回していたのかっ？！！

「おい、貴様らの主の名は？」

「キグナシウス 苛烈なる氷華様でございます。焦獄イゼルドウゲアルの火蛇様」

「ムンドウ・リニア 暴欲の無彩色様です。焦獄イゼルドウゲアルの火蛇様」

「ナウ・ケーオス 混沌の碎片様であります。焦獄イゼルドウゲアルの火蛇様」

我よりも歳下の奴等ではないかああああ！！！！！！

「あの、イゼルドウグアル焦獄の火蛇さま…」

「く、今度は誰の管轄の一族だ?!?!」

「ひっ!? あ、あの、ツェン・コーシエク暁の闇様より  
」

プチっ

「ロード・コーシエク頂に君臨せし闇の… ツェン・コーシエクあの暁の闇殿まで…」

あれ、何だか目がしょぼしょぼしてきたぞ。  
心なしかしょっぱい感じがする。

そっいえばこの部屋の掃除って、どれ位前にしたか覚えておらぬな…

「『『『あ、イゼルドウグアルあの焦獄の火蛇様?』』』」

「魔王なんてやめてやるっつつっ！……！」

皆して、皆してっ！好き勝手に遊びくさってからにっ！

「うわああん！貴様らなんか大っつつ嫌いだあああっ！……！」

もう誰も信じない。

だって、我に全部押し付けてのうのうと生きてるんだもん。  
うつつ。

我っていったい何なんだ？

「うつつ。我は、われは　ぐすんっ」

気が付けば見知らぬ森の湖のほとりに来ていた。

城を破壊した後、どうやって此処まで来たかは覚えてはおらん。

フン。あんな城なんぞ木っ端微塵に吹っ飛ばして清々しておるわ。

…ちょっと前まで収集していた絵画はもったいなかったかも知れぬがいや、もう良いのだ。次は一から、誰にも邪魔されずに集めなおそう。

「うつつ。ぐずぐず。疲れたぞ。もう　　う、うえええん」

ダメだ。何かもう色々とぐちゃぐちゃしていて、だめだ。

「どうして泣いてるの？みちに迷ったの？」

「む？」

「僕のおうちに来る？おばあちゃんが野いちごのパイを焼いてくれるよ！」

「人間のガキが、我に構うな！」

「…う、うえええん」

「なっ、何故に泣く？！！泣きたいのは我だ！！いや、実際は今まで泣いていたがな！」

「う？」

そうだ。もう我は後戻りなどできぬ。魔族を統括する魔王を更に統括している

ロード・コーシエク

頂に君臨せし闇である、あの暁の闇殿の部下を城ごと吹っ飛ばしたのだ。

見つかったら殺されるのが落ち、良くても無元の牢に繋がれるだろう。

「我は、われは…う、う…もう帰れない…つか、帰らんぞ」

「…ねえ、僕のおうち来る？」

何を、この人間は言っておるのだ？

「僕ね、お友達がオーマしかないの。だから僕のお友達になつて？」

「は？ トモダチ？」

魔王をしていた我と、この人間がトモダチになる？

「独りぼっちはさびしいからね。家族はいつぱいのがつれしいよ」

我を恐れず、その小さき手を差し出した人間は、何も聞くことなく我を導いた。

漆黒の髪を厭わず、赤銅色の蛇眼を美しいと褒め、たわいのない話をする。

力弱き手はまさに人間だ、しかし温かくもある。

我が今まで居た場所では感じられなかった温かさだ。

暖かな日差しの中、小さな手に引かれ導かれた先に居たのは

「おかえりおチビちゃ                      そいつ今すぐ捨ててきなさい」

「オーマ？だめだよ。僕のお友達だよ。家族だよ」

「ダメダメ。捨ててこれないならボクが始末つけるよ」

「オーマあ」

「そんな声出してもダメ！」

小さな子供に感化された悪魔<sup>オーマ</sup>だった。

「漆黒の髪に赤銅色の蛇眼、肌も蛇肌…イゼルドウグアル焦獄の火蛇だな？」

「…いかにも。我はリーセ」

「え、リセって言うの？オーマの知り合いだったんだ！」

「「！？」」

「わーい。これで安心だね！おじいちゃん達に言ってくるね」

小さな人間はとことこと走って行ってしまった。

「相変わらずおチビちゃんの名前も聞かずに拾ってきて…  
イゼルドウグアル何で焦獄の火蛇と呼ばれる魔王が辺境の村に居るのさ？」

「…魔王業はついさっき止めてきたのだ」

「は？なにそれ、何の冗談」

「ロード・コーシエク頂に君臨せし闇に、否、その他の魔王の所業に耐えられなくなつてな…」

「魔族って身内には情が深いって聞いてたんだけど？」

「フツ。彼奴らは己が第一だ。他の者の事情など垣間見ん自己主張の激しい鬼畜どもだ！！」



「色々あるんだね。って言うか世間狭すぎ悪魔と、魔王が同じ場所に居るなんて…」

「ああ。そういう汝も今は忙しいのではないのか？」

四方に君臨していた聖魔が入れ替わったと噂されているぞ」

「あー。それ結構微妙らしいよ。でもボクには関係ないし。

知ってた？聖魔って悪魔とは全然別の存在なんだよ。

ま、これを魔王に言ったって仕様が無いけど。あの子に手を出さないならココにいていいよ」

微妙な雰囲気ではあだが、どうやら認められたようだった。

そして、説得の際にはオーマも加わり、我がココにいてもよいと許可が完全におりた。

城に居た時では考えられぬ程のんびりとした生活で、我にとってはこの上ない至福の時だった。

ああ、家出してきてよかった

## 第十二話

魔術師がポリメシアに訪れ、そして去ってからまた月日が流れた。

僕がツラッティに襲われて大泣きしたのも、もう昔になりつつある。うん。今思えばすごく恥ずかしいよ。

僕が大泣きして眠ってから暫くはリセと会わなかった。

何だか落ち込んでるみたいで、エルオーネやゼロムに聞いても「放置しろ」って言われた。

珍しくオーマとミルギスも頷きあってたし。何があっただろう？

まあ、兎も角。ツラッティはリセたちが退治して被害は出なかったんだ。

ミルギスは一人でお座りができて、はいはいして行動範囲を広げていく。

最近が悪戯も覚えてきて、その被害はゼロムが中心になっている。うん。

ゼロムが家の屋根の上まで、ミルギスに吹っ飛ばされた時は僕も驚いたよ。

ミルギスは、はいはいじゃなくて、ふよふよと自分でも空中に浮く事が出来るみたい。

初めて見たときは、おばあちゃんと一緒に驚いて必死に下そうとしたんだよ。

ほら、落ちたら大変だからさ…でもリセに問題ないって言われてからほっとしてる。

むしろどんどん力を使わせておかないと、暴走するからなんだって。

オーマは相変わらずミルギスの面倒は見ないで、村の子供達に勉強を教えてたりする。

僕もオーマに勉強を見てもらっている一人だ。勉強の内容は様々。文字とか、旅をする際に気をつけるべき魔獣や魔物についてとか…本当にオーマは色々な事を知っている。

同じ年には見えないよ…

オーマが教えるのは勉強だけじゃない。

壊れたものを修理したり、その修理の仕方を村の大人達に教えたり。土木作業に従事したり…おおそ外見とは似合わない事をしてるってエルオーネが言ってた。

うん。オーマは女の子みたいな顔で、体格もスラッとしてるしね。  
…僕も人の事はいえないけど、でもちゃんと僕もオーマも男の子だから！

そして最近すつごいことがあった。

なんとリセが騎獣を何処からか連れてきたの！

騎獣って言うのは馬よりも早くて、牛よりも力があつて…兎も角！農作業や放牧を主体とする村にはいないんだ。

大きな街や主要都市のお金持ちの人が飼ってるらしいよ。オーマが言ってた。

そういえば、リセは昔お城に住んでたつていつてたよね。

周りの事も召使がやってたらしいし…わざわざ実家に帰って連れてきたのかなあ？

因みに騎獣は全部で七匹いるんだ。

三匹は馬と似てる。でも毛皮じゃなくて、全身が鱗で覆われてるの。えーと。スケイル・ヒップスって言われる種族なんだって。

本当なら馬が四匹で引いていく大きな荷馬車を、たった一匹で引い

ていく事ができるんだよ！  
額には真っ赤な石が埋まって、すごくキレイ。紅玉って言うんだ  
って。

あと三匹は、犬っぽい。アヌビスっていう種族なんだって。  
茶色のサラサラの毛皮で、体は牛くらい大きいよ。

初めて見た時は食べられそうで怖かったけど、すごく温厚なんだ  
て！

でも、もっと凄いのは歩けるの！二足歩行が可能だってオーマが言  
ってた！！

大きな体の割りに細かい作業も出来るんだ。木にも登れるし、見た  
目ほど重いわけじゃないんだよ！

僕も一度抱っこしてもらった。

ふふふ。ゼロムよりも大きくなれたよ！

最後の一匹は犬っぽい。セイリオスっていう種族なんだって。

アヌビスとは違う真っ黒でふわふわの毛、もふもふしてて肌触り  
がいいの。

すごく珍しい種族で、空も飛べるんだって！

一度空を飛んでるところを見せてもらったよ。

普段は翼なんて無いのに、空を飛ぶときだけ、ミシミシと翼が出て  
くるの！

背中に鞍をつけたら、人を乗つけて飛べるんだって！

ゼロムは驚いてたし、エルオーネはセイリオスを見て「ロウファと  
同じだ」って言ってた。

あ、ロウファって言うのはエルオーネの二番目の相棒で、ふわふわ  
でももふもふの毛が特徴の大きな犬だよ。

オーマは驚くよりも呆れてたかも…

珍しい騎獣ばかりで、大丈夫なのかってリセに言ってた。  
オーマは何が不安なのかな？

朝食の準備を手伝うたためにおばあちゃんの所へ行けば、おばあちゃんは何でか困ってた。

どうしたんだろう？

ミルギスは昨日ずっとゼロムが面倒を見てたから、今日はお昼までぐっすり眠ってるはずだし。

ゼロムも疲れてるから、多分、朝食ギリギリまで起きてこないだろうし…

リセはおじいちゃんや村の人達に騎獣の世話とか好みを教えてるから今は居ないし。

「坊や。川でお水を汲んできてくれないかい。井戸の水が枯れたのか、なくなってるね。」

村の真ん中に噴水があるからいざとなればその水を使っけれど…全員がいつぺんに汲みにいくとなるとね」

「え？なくなっちゃったの？！どうしてだろう？…うん。判った。

川まで行って来るね。そうだ！オーマは…今は居ないんだっけ？」

そういえばオーマ、朝起きて、薪を取りに行った時ルストーに連れてかれちゃったんだ。

朝食ルストーのお家で食べてくるのかなあ？

あ、ルストーは僕よりも三つ年上の男の子で、魔王を倒す剣を作る

のが夢なんだって！

だからオーマから物造り…鍛冶屋になる為の修行を付けてもらってるって言った。

鍛冶屋って武器を作ったりお鍋作ったり、何でも出来る人のことだってゼロムが言ってたよ。

…今度、僕専用のナイフ作ってもらおうかな。

あの時のツラッティみたいに襲われなくても限らないし、お散歩する時もしもの為に…。

うん。相談してみようつと。

つと、話がズレちゃった。水といえばエルオーネだよ！

「おばあちゃん。エルオーネに井戸の事を調べてもらおうよ」

「エルオーネに？あの子は薬師だから井戸とか調べても…」

「大丈夫だよ。僕、呼んでくるね！」

エルオーネは有翼人と水の精霊のハーフなんだよ。

水に関する事柄は色々と知っているって言うし、お願いしても平気だよ！

僕は地下室への階段を一つ跳ばして駆け下りた。そして勢いよく地下室の扉を開ける。

「おはようエルオーネ！お願いがあるんだ…！」

「あ…ちっさい勇者さん。頼むから地下室の扉は静かに開けてくれ。一応薬草だけじゃなくて、液体の薬も置いてあるし割れ物もあるんだ」

「う、ごめんなさい」

「それで？俺にいったい何の用かな？

まさかカンザじいさんが発作起こして、ぼっくり逝ったとか言う  
なよ？」

「カンザじいちゃんはおじいちゃんと一緒にリセから騎獣のお世話  
についてお話してたよ」

「朝から騎獣って

ああ。リセが連れて来たヤツか。

スケイル・ヒップス

確か戦馬と言う軍名のある鱗馬と比較的人間に寛容な魔獣の護獵  
犬……」

「そう！後はセイリオス！ロウファと同じなんですよ？」

セイリオス

「天狼族……まあ、な。ちょっと違うけど」

「毛の色が違うだけで同じじゃないの？」

セイリオス

「平たく言えば天狼族の白狼は防御に特化してるんだ。

セイリオス

で、天狼族の黒狼は攻撃に特化している。どちらも有翼人を護る  
ためにな」

「え、護るって何から？」

「気にするな。白と黒で得意な事が違うって事でいいだろう。

で、俺にいったい何のようだ？わざわざ朝食前に此処に来るなん  
て」

「あーあのね、井戸の水がなくなっちゃったらしくて。ちょっと見

てほしいんつだ!」

「井戸の水が、なくなったと?」

「うん。オーマはルストーに連れてかれっちゃっていいいし。  
僕はこれから川までお水汲みに行つてきます!朝食はそれからな  
の」

「判つた。引き受けよう。ほら、早くしないと」

「うん。じゃあよろしくね!」

今度はそつと扉を開けて階段を上げつて行く。

ドタバタしたら、またエルオーネに怒られちゃうからね。



### 第十三話

薄手の上着を羽織、僕は外へと出る。

勿論、水汲み専用の桶は忘れてないよ！

あ、ちよつと寒いかも…今のこの時期は季節の変わり目かな。  
段々と冬の寒さを風人が運ウィーデーんできてる。

村ではそろそろ薪を集めだしている。ほら、冬を越すのにやっぱ  
り薪は必要だしね。

でもオーマヤリセは、魔法や魔術で村に有る家を改築しようとか話  
してた。

うん。

僕達の家だけがつつり防寒設備着いてるのはずるいもんね。

「あ！おはようセイン！」

真っ黒な毛のセイリオス      セインに挨拶をした。

地面にお腹を付けて寝そべっていたセインは、僕を見てのっそりと  
立ち上がった。

うわー。もっふもふの毛だ〜。

でも何でお家の前に寝そべってたの？

「セイン。どうしてここで寝てるの？」

ちゃんとセインのお家があつちの方にあるでしょ。ここ寒くない  
の？」

セインのお家はちゃんと牧草地に面している所に小屋を建てた。  
スケイル・ヒップスやアヌビス達もそっち側に居る。

不満なのかな？

僕がそう思った事が判ったのかそれとも寒くないのか、セインは頭を横に振る。

「えっと、お散歩してたとか      あ、もしかしてエルオーネに会いに来た？」

「わふっ！」

「そうなんだ！エルオーネはまだ地下室に居たから、でもそろそろ出てくると思うよ。」

「今ね、井戸の水がなくなっちゃった事を調べてくれるよう頼んだから、一緒に行くといいよ」

「わふ！」

「じゃあ、僕は川まで水を汲んでくるね！寒かったらお家に入ってきてね！」

僕はお家の扉を開けたままにして、川がある方へと歩き出す。

「パタン。」と後ろの方から音がした。セインがお家の中に入って扉を閉めたのかな。

「リセの連れてきた騎獣は、他の人への気遣いとかできるからすごいと思う。」

「あれ…？」

「何か動き辛い…」

ちよつと後ろを振り返ると、セインが僕の上着の裾を噛んでた。

「セイン…裾を噛み切らないでね？おばあちゃんは怒ると怖いんだよ、本当に」

セイン、お家に入ってたんじゃないんだ。  
え？

何で、僕のお洋服に噛み付いてるの？

「…エルオーネに会いに来たんだよね？それとも僕に用事があったの？

僕はこれか川に水汲みに行かなくちゃいけないから、後にしても  
らえる？」

セインは噛み付いていた服を放して、僕の隣に並んだ。  
これは僕と一緒に川まで行くって思ってたいいのかな？  
でもエルオーネに用があつたんじゃないの？

「わふっ」

「わふっ！」

「あ、ロウファもいた！」

白と黒のセイリオス。ロウファとセイン。

もっふもふの色違いの毛。大きさは、少しだけロウファが勝ってる。

「ロウファはエルオーネと一緒に行かないの？」

首をこてんと傾げてから、ロウファもセインとは反対側に並んだ。  
大きな犬に囲まれた。

えへへ、ちよつと暖かいかも…じゃないくて！

「一緒に川まで行くの？」

「わふっ」「」

二匹とも仲がイイなあ。

そんなことを僕が思っていると、ロウファが低く屈んだ。

セインは僕の持っていた桶のとなりの部分を啜えてじつとしている。  
え、え？何？

「え〜と。乗っけてくれるのロウファ？セインは桶を持って行って  
くれるんだね？」

僕の確認に、二匹は首を振って答えた。

それから早かったよ！

だってロウファが翼をミシミシ出したと思ったら、ふわぁ！って飛  
んだの！！

「うえ？え？！すごい！すごいよ、早い！空飛んでる！！！」

わくわくしているうちに下に川が見えてきた。

川は相変わらずキラキラきれいなんだけど  
でもなんかヘンなんだよね…？

シュツタ。っとロウファとセインが着地して、僕もするりとロウファから降りた。

それから周りを見回す。だって昨日と違うんだもの。  
何が違うのかって言われたら、ちよっと説明できないけど…  
川は、水はきれいなまま、でも

僕は川をのぞきこむ。何が違うのか、知りたくて。  
ロウファとセインも僕の両隣にいて、一緒に川を見ていた。

「やっぱり…違う気がする。井戸がかれちゃったのと関係あるのかな？」

「ほう。井戸が涸れたと…ウンディーネ水守の怒りでも買ったのではないか」

「え？」

ロウファとセインに聞いたはずだったのに、他のヒトの声がした。  
あれ…？何でこんな冬に川の中にいるの？  
と、いうか…『青』を持つヒト。ふよふよと周りに水が浮かんでる。

「えーっと、エルオーネの家族のヒト？」

「何故、そう思うのだ？」

なぜって、だってロウファは威嚇してないし、セインも普通にしている。

髪の色もエルオーネに似ている青い色なのに。

あ、でも背中に翼はないや。じゃあ。誰なんだろう？

「色が似てたから、なんだけど。えーっとおじさんだあれ？」

「おじっ？！」

「知らない大人のヒトはおじさんって呼びなさいって、おばあちゃんと言ってたよ」

「わ、わたしが、お、おじさんっ？！」

「ねえ、だれなの、おじさん」

「ええい！私には力」どの面下げてここにいるんだ、ん？ヒスオ」

笑ってた。なんて言うか、笑って林檎を握りつぶした時と同じ。

あ、でも今回はどっちかっていうと、ゼロムをいじってる時と似た感じかも。

すぐく生き生きした笑顔をしているエルオーネがいた。

「エルオーネ知り合いなの？」

「はっはっは。ぼこ殴りしたくなるような面のヒスオなんて知り合いに欲しくないぜ！」

「あ、知ってる！ヒスオって、『ヒステリックで全くダメな男』の略でしょ！」

「よく知ってるな。これはちょっと昔に流行った水守の私語ウンディーネなのに」

「おじいちゃんが時々ボヤいてたよ。『ヒスオがうざったいんだよね』って」

「…グレーン。只者ではないと思っていたけれど、ほんと、何者なんだ？」

「え？おじいちゃん？おじいちゃんは婿養子だよ。」

昔はおばあちゃんをモノにするのに、30人切りしたって言うてたよ！」

おばあちゃんは今でも楽しくおじいちゃんとの馴れ初めを話してる。

ポリメシアの村ではすでに伝説になってる。

あ、伝統の間違いだ！

一人の女の子に複数の男の人が告白したら、バトル開始なんだって。でも今のところ、おじいちゃんの30人切りがぶっちぎりで一番多いって言うてたよ。

「僕も大きくなったら、おじいちゃんみたいに30人切りしてみたいなあ」

「…ちっさい勇者さんはそのままできて欲しいんだけどな」

「き、貴様ら！いい加減わたしを無視するなっ！！大体わたしはヒスオではないわ！！」

カルローン「シューテリナス」カンツオーレと言う名がちゃんとあるんだぞ！

しかもエルオーネ！貴様はわたしの世話になっておきながら、なんなのだその態度はっ？！」

「はっ！片腹痛いな。いつ、誰が、どんな理由で、お前なんぞの世話になった？」

だいたい事ある毎に俺にひつついてくるひつつき虫が、でかい口をきくな。

そもそもお前精霊としての自覚があるのか？この子の前で真名を明かすなんて…

言っておくが、この子はこう見えてもかなりの実力者だぞ。

悪魔を制御したり魔王を拾ってきたり伝説の一族を発見したりで、本当に何の用だ？」

「うぐう」



うわあ…エルオーネ、最後の方は一息で言い切った。  
悪魔とか伝説の一族とか言ってるけど、そんなウソ付かなくなってきた  
いいのに。

僕もポリメシアの皆も普通の農民だよ。

えーっと。カルローンとかいうおじさんは悔しそうにエルオーネを  
見てる。

それから僕を見て、ものすごくおでこにしわを寄せた。

「ここに華人ザウーデーがいるだろう。風の精霊王シルフの末姫が…」

「っ?!」

風の精霊王シルフって、末姫ってミルギスのこと？

え、どうしよう。

でも同じ精霊だしミルギスにヒドイ事はしないよね？だ、大丈夫だ  
よね？

「何で風人を探るのが水守ミルギスなんだ？おまえこういうのは同属が探すべきだ  
ろうに」

「本気で言っているのかエルオーネ？だってあの人間の村には

」

「…あ、あーうん。それは、確かに天敵ヤツがいるけどね…  
まさか俺を呼び出すために井戸を涸らしたのか？自殺行為だぞソ  
シ。

間違っただけのヤツ来たらどうするつもりだったんだ？

言つとくが、あの村の人間　　主にこの子に手を出したら殺られるぞ、間違いなく」

エルオーネ。なんだか物騒な言い方になってない？  
というか、ミルギスのお迎えにカルローンおじさんは来たってことだよな。

じゃあ、ミルギスのお父さん達はやっぱり探してるんだ。

「あの…」

「と、いうか、ミルギスとは…？」

「え？」

「あ、」

「まさか、」

「カルローン、ちょっと村外れで話さないか。ってか話を聞け」

エルオーネが強制的にカルローンおじさんの首をつかんで、森の奥まで引きずって行っちゃった。

「僕はお水を汲んでお家に帰ったほうがいいんだよね？」

「「わふっ！！」」

ロウファとセインが力強くうなずいてくれた。

## 第十四話

「で？どうしてお前がここにいる？」

十人中十人が見惚れるほど美しく艶やかに笑うエルオーネ。

「ごほっ…ぐ、ぐびが、じま”で」

「あー、はいはい。ほら、とつとと本題に入れ」

少年から離れ、エルオーネは森の開けた場所までカルローンを引き摺ってきた。

文字通りカルローンの首に左手をかけて引き摺ってきたのだ。

青銀と青が対峙する。

「ごほっ                    先ほども言っただろう。風の精霊王<sup>シルフ</sup>の末姫についてだ。

しかし、すでに手遅れのようだが、な…いったい誰が名を与えた？  
いや問いを直そう。何故名を与えたのだ？魔王が！上位悪魔がいるあの場所で！！」

「不可抗力だ！俺とて止める暇がなかった！！あの場所には確かに上位悪魔がいた。

魔王、いや、元魔王がいた。でも仕方ないだろう…夜<sup>ミディアン</sup>の一族があるの伝説の一族が認めたんだ！」

「…はあ！！？」

水の精霊であるカルローンが目を見開く。驚きのあまり開いた口が塞がらない。

精霊にとって、否。精霊だけではない万物において、名とは己の存在を確固たるモノにする力がある。

そして名は力を与える重要な役割があると同時に、その力を制御する役割もあるのだ。

故に、名は重んじられている。精霊は人間のように同胞を縛り付けることはしない。

名は愛情を籠めて与えられるものと彼らは知っているから。

しかし人間は違う。魔術に精通している者ならば、また精霊を糧とする魔族ならば…

力を宿す精霊王の御子にわざと名を与え、その名をもって生涯を縛り付ける事ができるのだ。

カルローンはづきづきと痛み出した米神に手をあてた。

「風の精霊王は嘆くだろう…下手をしたら水の精霊王とも事を構える事になるぞ。」  
シルフ  
アクア

『有翼人との混血児が一計を案じたのではないか？』とな。

まさか末姫の父親が自分の子を探していないとは思えなかった訳ではあるまい」

「ああ。あの子は末姫のご両親が見つかるまでと、ちゃんと分かっ

ている」

「というか夜の一族か…何故に古の昔に姿を消した伝説がここに？  
しかも魔王や悪魔がいるのだろう？ミディアン華人だザウディと知らぬわけではある  
まい。」

喰い殺されても可笑しくないだろうに、どうしてお前は平然として  
いられるのだエルオーネ？！」

「そのことについて誤解というか、公然の了解というか…ともかく！  
あの村では人に交じって生きることが絶対条件なんだ！それが破  
られない限り安全だ！！」

「安全？  
われら精霊の天敵とも言える者達がいるのに安全だと？！」

「いいか、よく聞けカルローン。有翼人と精霊の混血児である俺が  
だぞ。」

ものすつつつごく珍しい俺が今の今まで無事だった理由は…  
何不自由なく不安もなく過ごしてこられたのは、あの村がポリメ  
シアだからだ！

あの村に住む、ある少年が、俺達を受け入れているからだ。人間  
ではない俺達を、な」

「…先ほどの小僧が、そうなのか？」

「そつだ。あの子がいるからイゼルドゥグアル元魔王や蠢欲オーセルダ・マーティスの悪魔はおとなしくして  
いる。ミディアン

最強と謳われた伝説の夜の一族すら笑って指差しているんだぞ。  
というかだ、最強の一族すら普通に（俺達が）足蹴にしているの  
が現状だしな…」

エルオーネがそう締めくくると、カルローンは顔を歪ませて固まっていた。

それもそうだろう。

精霊の天敵がすぐ傍にいても拘わらず、その恐れている天敵を足蹴にしている等、到底信じられない。

しかし希少である有翼人、そしてその有翼人と精霊の混血児。

更に言い募れば、すでに成人しているエルオーネが無事に生きているのが何よりの証拠となっている。

精霊は基本的に同胞や同属にはおおらかでいる。

しかし混血児となると意見が分かれるのだ。そしてその大半が、排他的となる。

例えばそれが、ファ・ムート皇位精霊の子であっても…

「アクエリス・ファ・ムート水の皇位精霊と有翼人の混血である俺は稀有だろう？」

ポリメシアに来るまでは随分と命懸だったぜ？まさか同属になかま売られるとは思わなかったし。

ヒーシャやロウファがいなかったら俺は今頃どつかの金持ちの屋敷で女とされて飼われてたろうな。

ここに来た時は あのいいや、ちっさい勇者さんに会ってから、俺は日々平穩に過ごしているよ」

「もう、怯える事がない、そういうのだな…」

「さあ…な。まじりめ帝位精霊と厭味ったらしく吐き捨てられなくなった。

俺の背にある翼を、誰も商品とは見なさなかった。青銀の髪を見ても怯まなかった。

薬草の知識があると言っても、利用価値があると村人は誰も考えついていないようだ。

人の姿ではあるが、人外とわかるのに、彼らはただ俺が普通に生活する事を願いた…

全て、何もかもあの小さな少年が、俺をただ一人の俺と認めてくれたから、だから  
「

ハイフリット  
帝位精霊

ファ・ムート  
皇位精霊と他種族との混血児を表す位だ。

ほとんど生まれてくることはなく、それ以上に生き残る確率は少ない。

精霊からは差別的な意味を持つ象徴であり、他種族から見れば利用価値のある商品と認識される。

エルオーネのように成人しなにも傷が残っていないなど、まさに奇跡だった。

「末姫のことも大丈夫だと言うのか？」

まだ疑うようにカルローンはエルオーネを睨む。

「ああ。寧ろ下手にちよっかいを掛けても、逆に返り討ちにあって大変なことになるぞ。

俺は水の精霊王アクアの怒りを買いたい訳ではないし、親父を困らせた訳でもないからな」

エルオーネはそう言って、カルローンに背を向けた。

ずいぶんと長話をしてしまったらしい。

肌寒かった朝の空気が、太陽の光を受けて暖かくなってきた。



数歩だけ歩みを進めたエルオーネだったが、ふと、カルローンに向き直った。

「言い忘れていたが、井戸の水は元に戻しておけよ。」

あと末姫ミルギスの事が心配なら、ちゃんと村の真正面から入ってこい。  
でなきゃ俺は命の保障はしないぜ。ついこの間も精霊バカが悪さをし  
て消されたからな」

今度こそ振り返らずに村に戻っていくエルオーネ。  
そのエルオーネの背中を見送るカカルローンは、深くため息をついた。

朝食の時間も過ぎ、村の中央近くにある大きな噴水の周りには子供たちが集まりだしている。

そんな光景を横目に、エルオーネはポリメシアの村で一番大きな家の扉を開いた。

「あれ…エルオーネ誰かと話してたんでしょ。いいの？そのヒトほ  
つたらかして」

「オーマ、帰ってたのか。いや、アイツは俺に用があったわけじゃない」

「だからだよ。君以外の誰かに用があったって言うなら尚更だね。言っておくけど、外にリセが出て行っただから…おチビちゃんを探しに」

入ってすぐの、大きなリビングでくつろいでいたオーマが首を傾げながらエルオーネに言った。

エルオーネは中を見回し、青銀の細い眉を顰める。

何故　自分よりも早くに戻っているはずの少年がいないのか。どこかに寄り道をしているとも思えない。しかし、ならば何故、少年は戻らないのか。

ふと知己である水守の顔が浮かんだが、少年に危害を加える事をするはずがない。

己はそう言い聞かせたではないか。ではいったい誰が…？

エルオーネは手を口元にやり考え込む。

「　まだ、帰ってきてないのか」

「うん。おばあちゃんも心配してた。ご飯の時には戻るって言ったのにまだ帰ってこない。」

念のためにゼロムを起こして外の様子を見に行かせたよ。ミルギスはおばあちゃんと一緒。

因みにボクはお留守番。井戸の水が枯れたんだってね。君の同属おなかまの仕業？

ボクらは容赦なんてしないよ。特に、おチビちゃんに手を出した馬鹿なヤツらにはね…知ってるでしょ？」

「ああ　　ロウファとセインがあの子に付いている。何かに巻き込まれる事はないはずだ」

「有翼人の守護獣である天狼族<sup>セイリオス</sup>…そう言えば『魔巖の鎖』ってさ捕縛系の魔方陣で、守護獣である彼らにとって一番の苦痛なんだよね？」

しかもこの間、近くの村に商人達が滞在してたんだって…その時におじいちゃんも様子見にいらしいよ」

「何が言いたいんだ…」

「どこぞの元魔王<sup>バカ</sup>が騎獣連れてきてたよね。しかもおじいちゃん達は、何の疑問もなく彼らを使ってるんだから…人目を惹くと思わない？」

「それがなんの　　」

「エルオーネってさ、おチビちゃんに拾われた時、盗賊に襲われてたよね」

オーマの言葉に、エルオーネは顔を顰め、記憶を引きずりだした。

確かに、このポリメシアの村にたどり着いた時、盗賊団の数名に襲われていた。

エルオーネは盗賊団から逃げ出したのだ、誰もいない、誰にも見つからなかった場所を目指して。

しかし見つかってしまった。もうだめかと思ったその時、エルオーネは少年と出会ったのだ。

小さな少年だった。けれどエルオーネを助け出した、小さな勇者でもあった。

盗賊数名は少年が駆け付けたことによって、自分の目の前から消えていったのだ。

間違えるはずがない。確かにこの目で見ていたのだ。

小さな勇者は、やはりただの何の変哲もない少年だったけれど、少年の家族であるオーマやリセが、きっと少年を守るために力をふるったのだらうとエルオーネは結論付けていた。

「っ！しかし、目の前で消えた！お前たちだって知って」

「あの時ね、ボクやリセは一切手を出していないよ」

「な、に……じゃあ、誰が？」

オーマやリセの二人がどういった存在か、またどういった思いを抱えているのかを知っていた。

だからこそ、少年の目の前で人が消えていっても後々納得することができたのだ。

それなのに

「だから、リセとゼロムを走らせたんじゃない」

## 第十五話

え〜っと…僕は何でここにいるんだろう？

僕はロウファとセインと一緒に川までお水を汲みに行つて、それからエルオーネの知ってるおじさんに会つて…

僕は邪魔しちゃいけないと思つたから、先にお家に帰ろうとして…えつと、それから、それから

あ…

覚えてないや。

よし、ひとまず現状把握からだ！

周りを見回してみると木の箱とかある。

ちよつと薄暗いけど、森の中をよく散歩してる僕はこれくらいの暗さは平気。

もうちよつとよく目を凝らしてみよう…

あれつて、お、檻？

なんだか奥の方に白くてもこもこしたものがもぞもぞしてる。

もしかしてロウファかな？

そう思つてロウファって名前を呼ぼうとしたら、口がごわごわ？してた。

「う〜！う〜うう、う〜！〜！」

あ、これさるぐつわっていうやつだ！

エルオーネやオーマがよくゼロムの口につけてたのだ！！

声が出せないようにするんだよね。地味にヒドイいじめだと思うよ僕は。

次に手足を動かそうとしたんだ。でも手が痛かった。

えっと、なんか背中が腕が縛られてるみたい。っと…足も縛られてるし。

「うううううー！」

う…なんだか、ギチギチと締まっていく感じがする。

あんまり動かないほうがいいのかな？

でもずっとこのままっていうのはダメだよね。さっきの檻の中身も気になるし。

ガタンッ

「むぎゅ?!」

檻の傍まで転がっていかうか考えていたら、突然建物が揺れた。

え…この揺れは建物とかじゃない？

縛られている両足で軽く床を叩く。ぱこばこと音が返ってきた。うん。これってもしかして地面とくつついてない。

しかもずっと揺れたままだしカタコトと動いている音も聞こえたまま、馬車かな？

おじいちゃんの使ってる馬車よりも大きくて、広くて、じめっとしててやな感じがする。

んーと。ゆっくりと転がってけば、あの檻のところまでいけるかな？

僕がうつ伏せに寝転がった時、シャツと音がして、あたりが白くなった。

「うつ？！」

め、目が痛い…急に光がはいってきたんだ。目の奥がひりひりする。でも人が寄ってくる気配がするから、ここは意地でも目をあけておくべきだよな。

どんな人が気になるし。もし『悪いヒト』ならすぐに逃げなきゃ。ただの『悪い人』ならオーマやりセがすぐに見つけてくれるけど、『悪いヒト』だったら食べられちゃうって言ってた。

「おー。起きたか坊主。なら丁度いい」

「？」

「しかし、こんな平凡な顔の坊主がなあ」

「？ う？」

「ま、いいか。暴れるなよ。脱がすのが面倒だから」

「……？」

脱がすつて、なに？

うつすらと目をあけて光の中の人を見上げる。

黒い髪で……顔は影になってて見えないけど、きつと、瞳も黒いんじゃないかな。

「いやゝ。そうやって不思議そうに見られると、なけなしの良心が痛むんだけど」

「……？？？」

え、何でこの人近寄ってくるの？

何で両手をワキワキ動かしてるの？

あ、顔が見えた うん。普通の人だ。珍しい髪と目の色の普通の人だ。

「ははは。オレ様の美貌に言葉もないか？」

「ううん」



黒髪の人言葉に、僕は首を横に振る。

だって、ねえ。美貌ってほどの美貌なの？

エルオーネの方がキレイだ。ゼロムの方が印象に残るし。オーマは可愛い。リセの方がカッコいい。

「…まっこうから否定されたのは初めてだぜ、坊主」

なんだか悲しげに呟いてたけど、なんだろう？

僕は首を傾げて男の人を見上げた…ちよつと首が痛いかも。

反転して、ああむけになる。

うん。こっちの方が楽に男の人を見れるね。

「おいおい。ずいぶんと余裕だなあ。つーかよ、背中痛くねえのか？」

背中よりも首が痛くなってるんだけどなあ…

さるぐつわをしているから唸ることしかできないけど。

もぞもぞと動いてみた。お腹に力を入れて勢いよく体を起してみよう！

いつもゼロムがやってるしね。きっと、多分、おそらく、僕にもできるはずだし。

「うつ！……っえ」

「あゝ…今起してやるからな。そんな泣きそうな顔すんなよ。

たまにはこう言う時もあるって。ああ、ほら。ついでに口のもと  
ってやつから、な。泣くなよ」

「ううう。どうして僕のお腹はぷにぷになんだろう。皆はお腹がぽ  
こぽこ割れてるのに…」

「それはアレだアレ。お子様だから仕方ない。にしても、筋  
肉隆々な御仁達なんだな坊主の知り合いは」

「リセもオーマも筋肉なんてついてないよ。でも力を入れると聖剣  
くらい折れるって言うてた。

ゼロムは簡単に刺さっちゃうから、刺さる前に叩き折るって言う  
てたなあ。

あ、そう言えばゼロムは筋肉ある方なのかなあ？力持ちだし、グ  
レイトウォーラー切り倒してたし」

「…あつれえ？<sup>グレイトウォーラー</sup>岩の大樹って魔術でも切り倒せない木だよな？

それともオレ様の聞き間違いか？今、なんか、たった一人が切り  
倒したように聞こえたんだけどよお」

「うん？そうだよ。リセのストレスが溜まって力が暴走しちゃった  
せいで、お家が半分壊れたから

オーマがゼロムにグレイトウォーラーを持ってくるようにって言  
ってたよ。

またリセがストレスためて暴れても、ちょっとやさそつとじゃ壊れ  
ないようにしようねって。

それから皆でお家を改築して、お部屋を増やしたんだ。ポリメシアに来たらすぐに分るよ！

でも、お兄さんは何で僕を縛ってこんな馬車…でいいのかな、ここに乘せてるの？あと何で僕が服を脱ぐの？」

とんとんと会話が弾んでいく。

うん。

このお兄さんは『悪いヒト』じゃないね。でも『悪い人』だとは思  
う。

もしもいい人だったら僕のことを縛ったりしないはずだしね。

「さすが有翼人が住んでいた村だけあるな。そんな化け物までいたのか…」

「むつ。化け物なんてポリメシアにはいないよ！皆ちよつと力持ち  
だったり

頭が良かったり、手先が器用だったり、珍しいのかな。でも、それ  
だけだよ！」

「…なあ、坊主。オレ様って珍しくね？」

「うん。僕、目が黒い人初めて見た」

「あんな、オレ様は実は魔族との混血児なんだよ。  
だからオレ様の髪も眼も闇色なんだぜえ。どうよ、すごくね」

「へえー。魔族って人より強くて何でも食べれちゃうヒト達だよ  
ね。でも黒い色がすごいのかはよく分からないなあ。だってリセも黒

「い髪の毛だし」

あれ…そうするとリセも混血児ってことになるのかな？

だってリセの目の色は真赤  
鉄を焼いた時の色みたいな目だったけど、どうなんだろう？

うーん。でもリセは僕達と一緒に暮らす前はお城にいたんだし。偉い人の子供だったんだよね…

「マジで…？」

お兄さんがびっくりしてる。

「何でおどろいてるの？」

「いや、だってなあ…あー。どうして坊主がこんなに余裕なのか分かった気がした」

「？」

「魔族が近くにいたからオレ様のことを怖がってないんだろう。でもなあ有翼人の坊主、よく聞け。オレ様はジュードだ。」

『漆黒の爪牙』って呼ばれてる、半人半獣の盗賊ジュードだ

」

えーっと…僕はただの農民なんだけどなあ。

間違ってるよね。絶対に勘違いしてるよね、この人。

有翼人ってエルオーネのことだよな。

じゃあ、この人は僕とエルオーネを間違えて、僕をここに連れてきたのかな？

ああ、だからさっき服を脱がそうとしたんだ。背中に羽があるかどうか、確かめたかたんだね。

僕とエルオーネは全然似てないのに。

「盗賊の人なんだね、うん。ジュードさんでいいの？」

そっいうたら、なんでかジュードさんはぽかんと口を開いてた。

なんで？

## 第十六話

「いやいやいやいや。ちょっとまてよ、坊主！

何で普通に会話を継続しようとしてんだよ。ここは怖がるところ？。」

「え、なんで？」

「いや、普通はよお、賞金首が目の前にいたら捕まえるか怖がるかするだろう。」

盗賊ジュードは『漆黒の爪牙』って呼ばれて国家レベルで指名手配されてんだぜ。

しかも騎士団とか特殊部隊の魔性討伐軍とかすらも相手取れるわけよオレ様。

けっこお強いんだぜ、マジで。有翼人誘拐の依頼とかされるくらいにはな。

なのになんで坊主は普通にオレ様と話をしようとしてんだ？

ここは命乞いとか、これから自分がどうなるのかとか焦ってオレ様に聞くとこだらうが！」

指名手配って、悪い人になるものだよね。  
ジュードさん国から追われてるんだ。

「大変なんだねー…？」

あれ、そう言えばゼロムも故郷くにから逃げてたんだっけ？

じゃあゼロムも国家レベルの指名手配犯？

うつん？でもゼロムって農民だって言ってたし…よくわかんないなあ。

「指名手配されてても、ゼロムはいい人だよ？」

「馬鹿にされてんのか、純粹培養液にひたすら浸けられて育った坊主の天然発言なのか…」

「つかゼロムって…今一わからねえ。あーっと、とにかく！背中見せろ。」

運が良けりや男として鑑賞用で売ってやる。運が悪けりや女にして愛玩として買われるからな」

あ　人買いの人なんだ。

ずっと前にエルオーネにヒドイ事をした人達と同じ事をしてるんだ。でも、ジュードさんの言っている意味が分からない。

ジュードさんは僕の上着をするすると脱がして、上の服に手をかけたきた。

「ジュードさん。僕は男の子だよ。男の子は女の子になれないよ。大丈夫？」

「だーかーらー！有翼人は両性だろ！！手順を踏めば男にも女にもなれんだろうが！」

何で有翼人おまえがそんなことを知らないんだよ。一族の特性だろうに。まさか親から何にも聞いてないのか。ああ、だったら頷ける。ここまで無防備なわけがな」

「僕のお父さんもお母さんも、僕が小さい時に遠い処へ行っちゃったよ？」

おじいちゃんが僕は小さいからまだまだ会いに行けないねって言うってたもの」

「…は？」

ジュードさんの手が止まった。

うん。僕が小さいからお父さんにもお母さんにも会えないんだよね。

ああ、早く大人になりたいなあ。

そうすればお父さんとお母さんに会いに行けるんだもの。

でもこの話をおじいちゃん達にすると、なんでだか皆困ったように笑うんだよね。

どうしてあんな顔をしたんだろう？

あんまりにも困っていたから最近はこのように風になんか話さなくなったんだ。

村の皆も僕のお父さん達の話はしないんだよね…

本当に遠いところに行っちゃってるからなんだよね、きっと。

「どうしたの？」

「坊主、お前、親が…亡くなったんだな」

「？　　ねえジュードさん。なくなっただって、僕はなにも無くし



てないよ  
「

「なっ…お前、何言っつてっ、」

ジュードさんが僕の肩を掴んでガクガクゆする。  
なんで、痛そうな顔をしてるんだろっ…

うう。

ちよつと気持ち悪いよお。

「そこまでにしてもらおう!」

ぐるぐると回る景色の中、懐かしい声が聞こえた。

「! 何者だ?!」

「俺が何者か…いいさ、手短かに語ってやろう」

数年前、突如として現代社会からこっちに放り込まれ、必死に日々つつましく生活をしていた俺。

なんか知らん内に勇者と祭り上げられて、各地のモブ…モンスターをハントせざるおえなかった俺。

しかも有名になりすて、勇者の名を騙った偽物として指名手配された経験のある俺…

あ、ちゃんと俺が勇者に祭り上げられた本人だって事は証明して誤解は解けたけどな！

で、どっかの地方にいたちまいドラゴンを根性と気合と意地で倒した俺！

竜の逆鱗すらも打ち砕く！俺の名は、霧間夜キリマ・ヨル ヨルン・キリ

マって言えば分るか？」

「ヨルン、キリマ…まさか、そんなバカな。こんな辺境の地に竜殺ドラゴしの騎士だと？…！」

「日本男児なめんなっ！！おとなしくお縄につけええいっ！！」

「っぐ！」

ヨルン兄さんが目の粗い縄をジュードさんに投げつけた。

それからは簡単。

いつもゼロムがりセやオーマにされてるみたいに、ジュードさんも芋虫になったよ。

「うわあ。ヨルン兄さんの七つ道具が増える」

「ああ、最近ウエスタンに目覚めてな。ところでコイツ誰だ？  
なんでちみつこはこんな裏道にいるんだ？つか、なんのこっこ  
遊び？」

「ヨルン兄さあん。ジュードさん気絶しちゃったよ。」

あとね、遊びじゃないよ。気がついたらここにいたの」

「…………ま、いいか。怪我ないし。なんもされてねーよな？」

「うん。目が回っちゃっただけで、平気だよ」

僕はヨルン兄さんに今までの事を話した。そしたら兄さんは暫く動  
かなかったんだ。

ただ固まってた間にリセが暴れるとか、オーマが笑うとかブツブツ  
言ってたなあ。

「あー、うん。分かった。コイツは突きだそう。」

何よりも俺の為に！リセ辺りならコイツの親知ってそうだし？」

「リセはジュードさんのお父さんたちと知り合いなの？」

「あー。うん。多分。だって魔王様だしー？」

「マオーサマー…？」

「発音がちょっと違うぞ。ま、もうちょっと大きくなったら話して  
やるよ」

そう言つてヨルン兄さんはジュードさんを抱っこしたんだ。  
それから小声で何か言つてたけど…僕には聞こえなかった。内緒話  
はするいなあ。

「あー。あー。ジュード君に告げる。無駄な抵抗はやめなさい。  
ちみっこに怪我させなかった事は情状酌量の余地があるから言い  
分は聞いてやる。

でもこつから逃げることは許さない。赦されない。よりも寄つ  
てあの子を狙つた。

リセからキツーいお叱りと、オーマからツライ尋問？を受けて  
もらう。拒否権はない」

「大人一人分の大きさの剣。刀身は空色。額には水守の加護…  
ドラゴンスレイヤー  
竜殺しの騎士がこんな辺境にいるとはな。情報収集不足だ。オレ  
様もやきが回つたか？」

「まあ、人のいない場所を求めてきたならここは最適だろうけどよ。  
ほんとーにお前は運がねーよ。  
イゼルドウグアル オーセルダ・マーティス ミディアアン  
焦獄の火蛇と蠢欲の悪魔、あと夜の一族が共同保護してるちみつ  
こを狙つたら、なー？」

「は…？お前、いま、何を…ま、待て！？」

今ものすつごい名前が出てこなかったか？！イゼルドウグアル焦獄の火蛇？！  
オセルダ・マーティス蠢欲の悪魔！！？ミティアン夜の一族！！！伝説がこんな辺境に

っ  
」

「がんばれワカゾー。君ノ明日ハ真ッ暗闇ダ。H A H A H A H A！」

「嘘だ！ウソだと言ってくれ竜殺しの騎士！！ドラゴンスレイヤー」

親父に殺される！むしろ親父が殺されるっ！！頼むから嘘だと言  
つてくれ！！」

「H A H A H A H A！」

## 第十七話

「お、ちみつこ。あそこにいるのゼロムっぽくねーか？」

「あ、本当だ！…ゼロムー！…」

金色の頭がひよこひよこ揺れながら近づいてくる。  
あれ、ゼロムが片手で持ち上げてるのって…

「ゼロム…何で、え、え？あれ…エル」

「ゼロム、何でお前が俺のハニーを抱き寄せてるんだ？」

僕がエルオーネの名前を言い終わる前に、ヨルン兄さんはずずいとゼロムの前に出た。

あれ？

ヨルン兄さんがいつの間にか背中にあつた大きな剣を鞘から出して…

ジュードさんがなんかフルフルしてるし…ヨルン兄さんはブツブツ何か言ってるし

僕はヨルン兄さんの背中しか見えないから分らないけど  
ゼロムの顔がだんだん青くなっていく。

「待てヨルン。儂の話を聞け。魔力を高めるな！剣を抜くな！！詠

唱をやめんかつー！！」

ゼロムが片手をわたわた振りながらヨルン兄さんをなだめてる。  
それから今気づいたみたいで、地面に転がされたジュードさんをじいゝと見た。

エルオーネはゼロムに抱っこされたまま。寝ちゃってるのかな？  
全然動かないの。でも土埃が付いてるだけで大きな怪我はしてないのかな？

「H A H A H A！俺ってけっこー独占欲強いんだよなー。  
何でハニーがお前に抱かれてんの？ってかなんでこんなボロボロ  
？」

「一戦やらかしたらしいぞ　で、そっちの黒いのはなんだ？」

「あー。なんか盗賊だってよ。ちみっこ狙ってたみたい」

僕がエルオーネを見てたらヨルン兄さんが事情をゼロムに話した。  
でもちよつと言ってることがヘン。僕、さっきうまく説明できてなかったのかも…

「ちがうよ。エルオーネと僕を間違えたんだよ、ヨルン兄さん」

「「は？」」

「だってジュードさんが言ってたよ。僕は有翼人なんだろうって」

「つまり…てめーは俺のエルオーネを狙ってここまで来たと？」

「ヨルン落ち着け。だから構えるなっ！！！」

ゼロムがエルオーネを抱えたままヨルン兄さんの大きな剣を受け止める。

なんだかジュウジュウ音が鳴ってお肉が焼ける匂いがしてるけど…

「！」

「あー、ゼロム。俺がただこの剣を振り下ろすだけなワケないだろ！。

水の加護持ちだからって、それ以外を使えないと思うなよー。だてにRPGはしてねーし」

「あーるぴー？ま、それより、お前だけはオーマあやしいとリセの用になら  
んと思つとつたのに！」

どこでこんな捻くれ、痛っ！ちょ、マジでしゃれになつとらんぞ  
ヨルン！俺の掌が焼け落ちるっ！！？」

「うわー。ゼロムってけっこー丈夫だな！この技で西のトエボロ一角族の角  
叩き折れたのに」

「おまつ！？真面目にそろそろ骨が軋み出してるんだ！！」

トエボロ何故一角族に喧嘩売るまねしたかとか聞かんから！マジで退けっ  
！！！！」



ギヤーギヤー騒ぐゼロムとヨルン兄さん。

二人の間にもぴくりとも動かないエルオーネがちょっと心配だな…

カルローンおじさんと何かあったのかな？

ううん。でもなあ…よくわかんないなあ。

「な、なあ、少年よ…」

「あ、ジュードさん。芋虫のままじゃつらいでしょ、大丈夫？」

「えっと、そう思うならって、いや別にいいです。じゃなくて！  
ドラゴンスレイヤー 竜殺しの騎士と話してる奴って、グレートウォーラー 岩の大樹切り倒した？」

「うん！」

「まさか、でもあれは魔族じゃない。もっと、恐ろしい…あ、あれが、伝説なのか」

「ううん？」

「トエボロー 一角族の最大の特徴の角を叩き折るとか、やべえよあの竜殺しの  
ドラゴンスレイヤー 騎士」

「ええと？」

「蛮族とか戦闘民族とか色々逸話あるつてのに、まじで怖え、なに

アイツ!?

しかも有翼人と恋人?!あのめっばう他種族に排他的な一族なのに!?!オレ様マジヤベエ!」

「あのね、」

「これで焦獄イセルドウグアルの火蛇とか出てきたらマジで死ねる!」

「ねえ、いぜるとがるって何?」

「魔王だよ!魔王リーセンハイドラの二つ名だっ!」

ああっ!何でオレ様ってばあんな強欲ジジイの依頼受けちまったんだよお」

「???? 魔王って人の前には出てこないヒトなのに、何で怖がってるの?」

「だって、おまっ…!」

ジュードさんは魔族とのハーフって言ってたのに知らないのかな?僕もエルオーネたちに教えてもらうまで知らなかったんだから、馬鹿にするわけじゃないけど。

でもね、ここはちゃんと教えてあげるべきだよね!

「いつまで、そこでじゃれ合っているつもりだ、ヨルン、ゼロム

」

「あ、リセ」

「！！？」

「リセだー。あれ、そのお肉どうしたの？」

僕がジュードさんに魔王はめったに人の前には出てこないって教えたようにしたら、リセがスタスタ歩いてきた。

うん。なんかね、牛一頭くらいの大きさのお肉を肩に抱えて…ただのお肉じゃないのかも。だって血の臭いがしないし。

多分干し肉なのかな…あんなに大きいお肉でどうやって作ったんだろう？魔術？

「うむ、チビか。先程あちらの方で調達してきたのだ。夕餉を期待しておけ。ゼロム貴様に任せるぞ」

「儂が作るんかい！？」

あ、ゼロムが真つ黒な手をぶんぶん振ってる。

もー。エルオーネ抱っこしてるのに泥に触っちゃうなんてダメだなあゼロムは。

「この我に調理場に立てと申すのか？決り焦がすぞ」

「わ、儂って、いたい…」

うん！やっぱりゼロムはヒエラルキーが一番下なんだね。  
しょんぼり肩を落としてるけど、今夜はヨルン兄さんがいるし、お酒もいっぱいだしてあげよう。

それから僕はゼロムの背中をポンポン叩いて、お家に帰ろうっていったんだ。

ヨルン兄さんはエルオーネをゼロムからやさしく抱きとって背負ったの。

リセはしばらくゼロムの方を見てたけど、ヨルン兄さんのほうに行っちゃった。

「うーん。ゼロムは相変わらずだなー。あ、リセ。こいつの処理よろしく」

「ほお。未だ彷徨っているのか稀人<sup>まれびと</sup>」

「おー。帰り方見つかんねーし。エルオーネ愛してるし」

「して、ソレはなんだ？」

「ちみっこ誘拐した犯人」

「罠り殺せばよからう。オーマも呼んでやるか」

「っ！！？！？！？！？」

「あ、俺も混ぜてな。ハニーのことも狙ってたし」

「そうか」

そう呟くと、焦獄の火蛇の二つ名を持つ元魔王はうつそりと嗤った。水の加護を持ち大剣を携える異世界の青年は、くつくつと喉を鳴らした。

「あ…ははは…は…オレ様マジで死ぬかも」

漆黒の半人半獣はほろりと零した。いろいろ。

幕間く家族会議 3

「ぶあっ！」

びしっ

『や、やめてっ！』

「ぶきやつぶきやつ！」

ざしゅっ、ざしゅっ      びったん！  
びよん。

『せ、せなかあ、ぎゃーっ！？ひっ、耳引っいっ！』

「ぶあゝ。ぶえ、ぶきやつ。きやつきやつ」

びったん、びったん。びっしーばっしー！びっしゅっ！……！

「」「」…「」「」

『た、たすけ、誰か、助けてっ……』

ぶっち

「ぶきやつ」

少女と見紛う姿のオーマは思い切りため息をついた。

椅子に深く腰掛け、背もたれにだらりともたれかかる。

ズボンに隠れるほっそりとした足は、これもまただらりと投げやりにのばされていた。

「はあ…これから『第六回、拾われてきちゃったヤツ（仮）』について会議を始め…るのぉ？」

気だるげに腕を上げ、クイッと指を手前に動かす。

オーマの傍に、テーブルに置かれていたクツキーの乗った皿が音もなく移動した。

ぼりぼりぼり。むぐむぐ。ごっくん。

そばに置いた大剣を軽く撫ぜ、水守の加護を持つ異世界の青年

キリマ・ヨル  
霧間夜はため息をついた。

今まで希望に満ち夢見た世界を完全に裏切られたような、そんな表情かをして、だ。

「俺さ 二次元で獣耳とかしつぽとか愛でた記憶はあるんだよ。

獣化はありだ。半人半獣とか獣人とか聞いたら普通は、キター！

って言うだろう？！

っていうか、アレは愛でるものだろ！？美女や美少女だから許されるのであつてっ！

でもこれはっ…こんなのって、こんなのってないぜっ、なんで初めて見たのがっ野郎なんだっ？！」

心からの叫びに連動して、だんっと思いきりテーブルに八つ当たりをする。

こちらではヨルンと呼ばれる彼の心情は少しでも厳しい現実からの逃避だった。

癒されなかった。だからこそ眉間のしわをぐりぐりとほぐし隣に座る人物を見た。

青銀の髪に同色の翼、有翼人と水守の混血児であるエルオーネが力ツプに口付けながら呟く。

ヨルンの期待を籠めた視線などキレイさっぱり無視してだ。

「ニジゲン？が何だか知らないが、見た目はただの犬っぽいし……しかし

きゃんきゃんと吠えられても、何と言っているのかは俺達にはさっぱり分らないし、うるさい」

肩をすくめ、オーマの目の前に置かれた皿を自分の方に引きよせ一つみする。

伝説の一族のはずのゼロムは、つまらなさそうに否、疲労をたっぷりと滲ませた

ため息をつき、自分の膝に頬杖をつきながら日が沈み始めた窓の外を遠く眺めた。

「もういつその事、こ奴は犬のままでいいではないか。

考えるのがめんどくさい。大体にして、リセが仕置きしてコレに落ち着いたのだろう？」



因みに、ゼロムの今の格好は床に胡坐をかき、足の間に華人<sup>サウーディ</sup>のミルギスに乗っけている状態だ。

ミルギスの意思をそのまま表す、ゆらゆら揺れる（濃厚な密度で風の魔力を宿す）布は若干薄紅色になっている。

そしてミルギスの目の前にはコレと称された黒い犬ならぬ、黒い狼がブルブルと震えながら縮こまっていた。

何気に黒い毛皮の間から幾筋も赤い色が見えるが、誰もそれを口に出さない。

唯一、ゼロムだけは、ミルギスも手加減ができるようになったのかとしみじみと思ったと同時に

どうして自分の時には頸動脈を寸分違わず狙ってくるのか、調子のいい時など心臓を一突きではないか…と哀愁を漂わせている。

「そうだね。おチビちゃんの拾い癖とか色々諦めた方がいいかも…」

それにさ、ミルギスのオモチャとしてはコレなかないんじゃない？

普通ありえないよ。皇位精霊<sup>ファ・ムート</sup>の傍に天敵<sup>まぞく</sup>がいるなんてさ…

しかも力の制御をこの頃からできるって、次代の風の精霊王にでもなれるんじゃない？」

オーマは諦めたように、いや、実際は投げやりにゼロムに答えた。だらしなくテーブルに肘を付き、ぽりぽりとクツキーを咀嚼する。勿論、エルオーネの前に置かれた皿を無言で奪い取って、乗っていたクツキーをがつつりと。

美少女と見紛い憂いを帯びる表情を浮かべているのにも拘らず、上

品とはかけ離れた姿だ。

だがやはり誰もそんなオーマの姿に突っ込みを入れない。

『待てよ！一生このままかよっ？！』

きゃんきゃんと吠える黒い狼を無視し、元魔王のリセは額に手をやり、だるそうに頭をふる。

リセの失態はポリメシア<sup>こじ</sup>にきて二度目だ。一度目は彼らが溺愛する少年を泣かせてしまった事。

今回は少年を傷つけてはいないが、少年の傍らに国家指名手配犯の盗賊を置く状況を作ってしまった事だ。

無論、少年に床で縮こまっている黒い狼が『漆黒の爪牙』と呼ばれた盗賊ジュードであるとは告げていない。

リセは溺愛する少年に「盗賊には罪を償わせるだけだから心配いらぬ」と言っていた。

「まさかちびに見つかるとは思わなんだ。終いにはコレの毛並みが気に入ったらしい、非常に不本意だが」

「ホントっ、不愉快だけどね。ねえリセ。裏の山で何する気だったの？」

「うむ、不本意極まりないが。今回はちびが狙われたのではなくエルオーネだったのだろう」

「本気で苛立たいいよな。そう有翼<sup>おれ</sup>人が狙われた。しかも以前も追いかけられた事のある連中だった」

「んー？ だけど盗賊君はハニーとちみつを間違えてたぜ。

あ、もしかしてハニーを以前狙って追ってきたのって依頼主の方か？」

「うむ。ウラド市の商人らしい。その場で八つ裂きにしようと思っただがヤツの傍に…」

「そう言えば、なんぞおったなあ。あれは何だ？」

魔族っぽいが「ぷあ！」ちよつ、ミルギス「ぷう！」イタツ…他のも交じっていたぞ」

「ヤツのコレクションの合成<sup>キメラ</sup>生物だろう。変態な趣味の持ち主だ。まさかあの子を探している途中で鉢合わせになるとは思わなかったぜ。

ゼロムとリセが来なかったら俺もやばいことになってたな。二人とも助かったよ。ありがとう」

「うむ。非常に気色悪いナマモノがいて見るに堪えず、逃がしてしまったので名誉挽回しようと思うてな。

まあその商人がウラド市で幅を利かせているらしいから、コレを使ってダメージでも与えよう…」

魔獣本来の姿のままウラドで暴れさせる予定がちびに見つかってしまい…ちつ。レウの子供の癖に使えん！」

『ぎゃーっす？！ やっぱし親父のこと知っていらした！！ ちよつ、痛っ！』

「ぶきやつぶきやつ」

「裏の山で魔獣の力を覚醒させる、ねえ… やっぱりリセってバカだ

ね。

あそこはおチビちゃんの遊び場でしょ？おじいちゃんやおばあちゃんが入らなくても

おチビちゃんは大体あの場所にいるんだから、ホント何してくれてんの。内臓だけ亜空間に捨てるよ」

「うつ…」

オーマの静かな怒りにリセは椅子に座ったまま後じさる。

「まー。なにはともあれ、ちみっこのペットとしてコレ置くんたろう？」

「しゃーねーって諦めて、コレの名前でもつけて遊んでやればいいじゃねーの。」

つかそろそろ、じい様とばあ様がちみっこと一緒に戻ってくんだろー？部屋片付けねーと」

オーマとリセの緊迫した空気にヨルンがあっさり割って入る。

そして赤く汚れた床と赤黒く肉の挟れているゼロムを指差し、いいのか？と皆に聞く。

「… はあ。もう！ほんっつとに仕様がないねえ」

「あーうーあーあーあー…」

「リセ。幼児退行は部屋片付けて、自分の部屋に戻ってかららいるよ」

「ぶあー！」

「なんかもう、僕の身の安否はスルーするんかい。うう、優しさが欲しい…」

「ゼロムー。今夜酒一緒に飲んでやるから落ち込むなよ、な？」

こうしてぐだぐだにポリメシアの村に新たな住人が加わったのだった。

## 第十八話

カルローンおじさんがミルギスを探しにきてから、またずいぶんと時間が経った。

盗賊のジュードさんも、ちゃんと罪を償うって言ってリセに連れられてからには

よその人がこのポリメシアに来ることがなくなった。

うん。

だって、もう冬だもの。

短いけれど、とても寒い冬がこのポリメシアにやってきた。

「ふえっ…っ

くちえっ」

「寒くなったな。ほら、マントを忘れてるぜ」

「うう…エルオーネは寒くないの、もう慣れたの？」

「俺は慣れたよ。でもゼロムがダメみたいだな。ほらミルギスに小突かれてガタガタしてる

（あれは完全に腹を挟られたな…しかしミルギス、消音で術を行使できるなんて将来有望か？）」

「あ、本当だ！ふふ。ミルギスはハナコのこと気に入ってるみたいだね！」

「ああ。本当にあのハナコを気に入っているな。

大体移動する時はハナコに乗っているか、ゼロムに抱っこされて

るかのどつちかだし」

ミルギスはハナコの背中に乗ったまま。ふふ。本当にハナコが好きなんだね！

ハナコはセインと同じ真つ黒なんだ。でももふもふじゃなくてサラサラな毛並みの。

それから、ハナコはヨルン兄さんが付けた名前。なんでもヨルン兄さんの故郷では普通に皆に知られてる名前なんだって。

うん。ハナコも名前をあげたときすつごく喜んでたよ。

ああ。ほら、今だつてきゃんきゃん吠えながらヨルン兄さんに飛びかかってたるもの。

ミルギスつてば最近腕力が付いてきたからなあ。

ぷら〜んつてゼロムの首にしがみ付いてたり、でも何でかゼロムの顔が土気色になってたけど…

あと僕のことぎゅつてしてきたり可愛いよねえ。ほんとに仲がいいなあ。

「H A H A H A H A！ほーら花子（笑）とつてこーい」

『チクシヨー！！てめえ変な名前付けやがってー！！』

「ほーら、ほーら。適度に運動しないと太るぞー。H A H A H A H A！」

「ぶあー！」　　ぶちっ。

『ぎゃっ！？あ、あねさんっ、背中窺らないでっ！ひいいい？！！』

「ほーらほーら。」

『ドラゴンスレイヤー  
竜殺しの騎士！この恨み、何時かはらすっ！！』

でもゼロムがなんだか微妙そうな顔してるけど、なんでだろう？  
あんなにじやれてきてるのに、何が不満なのさ？  
ハナコは僕にあんまり懷いてくれないのに…

ヨルン兄さんが、ハナコは玉ねぎが大好きって言ってたからハナコ  
のご飯に玉ねぎいっぱい入れてあげたのに…

あれ以来ハナコはご飯のときになると僕から離れちゃうんだよね…  
何で？

一緒にお散歩行く時も、そろそろと遠くに行っちゃうんだ。

お風呂の時だって、オーマの方について行っちゃうし…僕って嫌わ  
れてるのかなあ？

あーあ。

ほっぺが冷たいなあ。

「はあ      あ、息が白いや！本格的に冬が来るね。星焰フイア達が恋し  
いなあ」

「炎の精霊か、水守ウンディーネに近い俺のそこにはあんまり現れないな」

「？」



「仲が悪いわけじゃないんだが、水守と星焰は相反する性質なんだよ」  
ウンディーネ　フイア　タチ

「へえ」

「それはそうと、リセとグレーンがまた遠出をするらしいぞ」

「あ、ゼロム！寒いなら家に入っていればいいのに。それとも僕のマントの中に入る？」

そう言ったらゼロムは僕の頭をなでてくれた。えへへ。  
でもちよつと手が冷たいんだよね。うーん。

「いや、儂がダウンしとるいは主にミルギスの所為だから気にするな。

で、話をもどすが。なんかここの領主が子供を集めるとかなんとか言ってる」と

子供を集める？

オーマみたいにお勉強会でもひらくのかな。

でも何でおじいちゃんが領主さまの所に行くの？

普通村長さんが領主さまの所に行くんじゃないの？

「脈絡がないな。いったい何のために？」

「さあな。確認するために騎獣に乗って出かけたのだろつ。リセは

「護衛だ」

「ふへー。そうなんだあ。ゴエイってなに？」

「護衛は守ることだ。領主の館まで遠いからな。途中で悪い奴らが来たら困るだろう？というか、俺は領主が誰だかも知らないぜ」

「儂だつてポリメシアに流れついたのは最近だ　あ、ちょっと待て確か…」

ゼロムがおでこに手を当ててぶつぶつ何かを言ってる。

うーん。時々「ケルト」とか「知り合いだからか…」とか言ってるのが聞こえる。

あ！もしかして、ケルトって人から貰った魔術ちからで何か知ってるのかな？

「ああ、コレか…？…ふむ。エベノス地方領主で、名はウルト  
「エヴァーゼン？」

「何でそんな疑問形なんだ？」

「儂の使い勝手の悪い能力の一部だ」

「ケルトさんがくれた力なの？」

「！…よく覚えていたなちび。そう儂が喰うばったケルトの記憶ちからだ。若りし頃は魔術師として王都に居た…あー…っと、んん？

ちよつと前にケルト達が魔術師育成の義務？というのを作つとつたようだな」

「ちよつと前つて…お前の感覚だとちよつと前つてどれくらいだ？」

「ちよつとはちよつとだろう？うむ。多分コレだな…」

数年毎に地方から王都の学院に素質のある子供を推薦する制度がある。

おそらく、今回はポリメシアを含めたエベノス地方の子供らの数人が王都へ送られるのだろう」

ゼロムがぐりぐりと眉間のしわを伸ばしながら言う。

でもさ、「ケルトの若りし頃だから60年前か？」とか聞こえたんだけど…

あれえ…ゼロムっておじいちゃんよりも若いよね？

それに、魔術師の学校つて、お金持ちの貴族しか入れないんじゃないのかな？

からころからころ。

僕たちは馬車に乗っている。行者さんは領主さまの知り合いの人。エンビフク服って言うのを着てるんだ。なんだか貴族の人みたい！

「で、ボクとおチビちゃんが領主の家に行く事になったワケだね」

「お出かけだよ！僕ポリメシアからでるの初めて、すっごく楽しみ  
！！」

なんで僕たちが馬車に乗ってるかって言うと、ゼロムが話した通りの  
ことがあったんだよね。

「魔術師の素質のある子供を王都に送る」だって。  
おじいちゃんが帰ってきて、村の皆に領主さまからの伝言を伝えた  
の。

本当はティコたちも一緒に行くはずだったんだけど、行者さんが僕  
とオーマだけって言ったの。

ちよっと残念。子供だけで遠出してみたかったのに…

「ヨカッタネ。えーと、メモには魔術の素質のある子供：何コレ？  
年の頃は8〜13歳。女児でも可。魔力感知ができる事が最低条  
件。」

属性を持つ魔術が行使できればなお良し      おチビちゃん、ボ  
クら領主の所に行くのやめない？」

「えー。せっかくエルオーネにゴシンジュツって言う魔術教えても  
らったのに。」

リセにはケンゾクを貸してやるから安心しろって言われたし。  
ヨルン兄さんは、えーっと、あ、見て見て！ナイフもらったの。  
ゼロムにはウルトって領主さまに怖い事されたら『フィヨードの  
落日』って言って逃げてこいだって」

「そ。護身術とナイフはいいよ。万が一とか考えたらね。でも後の  
は何さ？」

「ったく。リセはヘンな所で馬鹿ったゆーか、突拍子がないってゆ  
ーか……」

「ゼロムもゼロムだね。何、フィヨードの落日って？どっから情報  
仕入れたのさ」

「うん？なんかゼロムの力でケルトさんの力を借りたんだって」

「！へえ。夜の一族特有の能力ってワケだ。  
ミチヤマン

他人の能力を借りる？少なくとも一人は喰べたんだ」

「オーマ？」

「何でもないよ、おチビちゃん。そうそう、リセが言ってた眷族は  
喚んじやダメだよ？

あとヨルンから貰ったナイフも背中に隠しておくんだ、いいね？  
あゝ。めんどくさいなあ。でもおチビちゃんと二人で遠出するつ  
てのもなかなかイイかもね」

「うん！僕もオーマと一緒に出かけするのが嬉しいよ！！」

「からころからころ馬車に揺られながら、遠い領主さまのお家へ向か  
って行く。」

「領主さまはどんな人かな？」

「他の村の子たちと早く会いたいなあ。」

## 第十九話

馬車にゆられて、ゆらゆらゆら。

僕とオーマは領主さまのところで、しつじのおじさんと一緒に馬車旅をする。

ティコとかルストーとか、村の皆は一緒に行けない。

テキセイがどうか、よく分らなかったけどオーマと一緒になら安全だよ。

僕たちが馬車に揺られて五日がたった頃、ガッコン！って音がしたんだ。

そしたら馬車の車輪が緩くなって、外れかかってたんだ。しつじのおじさんは困ったように、「領主様の処に着くのが遅れる」って言ってたの。

「手伝った方がいいのかな？」ってオーマに言ったら「やんなくていいでしょ」って言われちゃった。

でも、もうそろそろ日が暮れちゃうし…

ご飯の準備くらいしといた方がいいよねえ…

「あ、あの！しつじおじさん！」

「どうした？」

「僕たちご飯作るよ！いつも保存食じゃ健康に悪いし。それにね…馬車の修理できなかったらオーマが直してくれるから、おじさん

はちょっとやすんだら?。」

オーマが「あちゃー」とか言いながら頭を抱えてたけど、しつじのおじさんが、ポカーンっておどろいてたけど、

やっぱり困ってるときは皆が皆協力し合わないよね!

何だというのだ...!

何ということだっ...!

ありえない!ありえない!!ありえない!!!

いま、目の前で起こっていることが現実だというのか?!?!?

「おじさん？どうしたの、お腹痛くなったの？」

「あ、おチビちゃん。それまだ入れちゃダメだよ。コルトレの葉を先に入れないと！」

「えー。ゼロムはコルトレの葉をいつも後に入れてたよ？」

「あゝ…コルトレの葉は香り付けの時は後に入れるけどね、野宿の時は別だよ。

野宿の時に食べられるスープってそこら辺の雑草とかが具になつてんの。

ポリメシアは基本精霊がいるから早々普通に食べても問題ないんだけどね。

他の処じゃ毒素持つてるのがあるから、コルトレの葉を先に入れて毒素を中和させるのさ」

「え、毒草って道端にいつぱい生えてるの！？」

僕てつきり森の奥とかに生えてるのだと思ってた！」

「うん。間違つてはいないけどね…あ、おチビちゃん。それ毒草だよ」

「！？」

「何…もしかしていつもつまみ食いしてたり？」

「えっと…ウィーディ風人を見に散歩行く時に…で、でも僕お腹壊さなかった



よ？」

「ウンディーネ水守のたまり場の水飲んでたでしょ」

「うん。湖のお水は美味しいよ。オーマだって、だからお水を引いてきて、噴水作っただんでしょ？」

「はあ…ところで、執事のおじさんはいつまでその馬車の修理に時間をかけるつもり？」

「今日はこちらでお泊りするの？」

「ボクは早く行って用事を済ませたいんだけど。」

「あ、おチビちゃん。帰りはゆっくりと色んなものを見て帰ろうか？」

「本当！　　うわぁ楽しみだな！」

私の目の前にいるのは子供だ。十歳程度の子供が二人いる…

そう領主様に命じられたとおり、各農村の魔力を有する子供を連れていく途中だった。

子供たちをただ連れてくる簡単な任務　　というわけではない。裏を返せば才能のある子供たちを発掘してくる重要なものなのだ。

私はある意味でこの任務を成功させることができるだろう。しかし

この子供たちはいったい何だというのか！

コルトレの葉だとつ      それは秘薬の一種ではないか！！  
我が主ですら入手するのが困難な物をどうしてたかが農民の子供が  
持っている！？

しかも少年がつまみ食いをしていると云う毒草、それはエベノス地  
方特有の猛毒を持つジルヴァーナだぞ？！

その猛毒を癒すために必要な薬草は秘境の中にしかない。

精霊がいる泉の精霊水を飲めば治る可能性もあるが、それは上位精  
霊が憩う場所と条件がつくんだぞ！

その上位精霊がいる泉を見つけるのもほぼ不可能だ！

下位精霊ならば運が良ければ見つけれないこともないが、ジルヴァーナ猛毒草  
の毒を浄化できるなど…

ポリメシアにそんな聖域とも呼べる場所があるというのか？！

ありえない。

私はそんな気配を感じ取れなかった！

私の片目は特殊なものであり、グラムサイト妖精眼と呼ばれている。

精霊になる前の妖精などを見る事が出来る魔眼の一種だ。

私の眼は精霊を見る事も出来る、しかし見続ける事が出来ない。

あまりにも彼らの存在が強烈だからだ。故に、彼らを視ると眼を覆  
い激痛が走ってしまう。

存在を感じ取れても、それ以上は激痛が走り行動が起こせない。

そう、痛みがあれば私の近くに精霊が存在いるすると分かるのに、ポリ  
メシアではそれがなかった。

この子供たちが嘘を付いている？

いや、そんなことは無意味だ。現に今も猛毒草ジルヴァーナを食べている。  
ありえない。

ポリメシアの奥地に上位精霊が住み着いている？

確かに空気は澄んでいたが、精霊の残滓など感じ取れなかった…

この子供は依り代たる素質を持っているのか？

それもなさそうだ。依り代たる素質を持っているなら体の一部に精霊の刻印が刻まれるはず。

それでは？

この子供たちは？

いったい何だというのだ、どうなっているのだ？

ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！  
ありえない！

ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！  
ありえない！

ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！  
ありえない！

ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！  
ありえない！

ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！  
ありえない！

ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！  
ありえない！

ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！  
ありえない！

ありえない！  
ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！  
ありえない！  
ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！  
ありえない！  
ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！  
ありえない！

「そういえば、しつじのおじさんって、片方の目だけ別の色だね。  
キレイな紫色！」

「ソレ<sup>グラムサイト</sup>妖精眼だよ。精霊になる前の妖精<sup>モノ</sup>をみれるんだ。  
裏を返せば、それ以外は感じ取れても視る事が出来ない。普通の  
目の方が幾分かマシなものだね」

「グラムサイト？へえ…紫色の目の人は皆そうなの？」

「そう言うわけじゃないけど…妖精眼<sup>グラムサイト</sup>の見分け方は…大まかに二つ  
かな。

一つ目はこの人みたいに、片方だけ妖精が気まぐれにその眼をく  
れるんだよ。

二つ目は、両目に妖精が自分の印を入れて渡したものがあるんだ。  
前者は中途半端すぎて、あまり歓迎されるものじゃないけど…後  
者は希少価値高いよ」

「きしょーかち…えっと、珍しいんだよね？」

「そ。だって妖精から精霊に格上げした時、その妖精から印をもら

つてた人も力が上がるの。

妖精って何処にでもいるでしょ？長い年月をかけてゆつくりと精霊になる。

ごく稀に精霊になる手前で印を入れて渡すヤツがいるんだよね…ま、相当の物好きに限られるけど」

「ふーん。じゃあしつじのおじさんって、妖精さんと友達なんだ！」

「このおじさんの場合は違うよ。悪戯で目を取り換えられたんだね。ほら この人の目、茶色だけど、輪郭の部分が赤みが強くて輪っかの中に茶色が入ってるし」

「わあ、わあ！すごいっ！なんだか不思議な感じだね！」

「まあどうでもいいけど、ほら、おチビちゃん。スープがいい感じにできたよ」

「はい。いただきまーす あつつ、ふー、ふー…おいひい」

「執事のおじさん。いつまで口開けてるの？一応保護者なんだからしっかりしてよね」

「あ、ああ…っ」

知識がある。ただの農民ではないのか！

貴族か？

ならばどこの貴族だ？追放された話など流れてきていないぞ。では違う？

それにしてもこの少女の知識は辺境にある学院生よりもあるぞ。

「あ…ねえねえオーマ。このおじさんとヨルン兄さん、どっちが珍しいの？」

「それはやっぱりヨルンだね。加護持ちって滅多にいないから」

「へ」

「ま、珍しさで言ったらポリメシアに居るボクらは伝説級だね」

「伝説級？」

「そ。にしても、今日はここで野宿かなあ。領主様の所つくの遅れるね。どうでもいいけど。

それともボクが馬車を直して一晩中走りと押せば今日の分の遅れを取り戻せるだろうけど

執事のおじさんどうする？つくのが遅れたからってボクらが罰せられるなんて嫌だからね…」

「？」

「っ！？」

貴族に対しての常識を持っている…？

間違いない。この少女は貴族の在り方を理解している。

すべての貴族はそうではないが、貴族の傲慢さと理不尽さを知っているようだ。

加護持ちが身近にいたと言っならば、この少女の知識があるのは納得できる。

私は　もしかしたら、とんでもない子供たちを見つけてしまったのかもしれない…

## 第二十話

ほんのりと、空が紫色から明るい色になってきてる。

まだ眠たいけど、馬車から見える景色は、僕がはじめて見るポリメシア以外の場所。

馬車道は石がキレイに埋まってて、固そうだったけど歩きやすいと思うなあ。

僕がもぞもぞと外を見てるとオーマが毛布の中からひょっこりと顔をだした。

「はよ、おチビちゃん。ちょ…朝早くない？ああ、あんまり窓に近づかないでね。

術式が浮かんじゃう。それに執事のおじさんにボクが魔法使えるって知られたくないし」

「えへへ。おはようオーマ。うん、気を付けるね。

…ねえオーマ。オーマは貴族の人がいる魔術師の学校に行きたい？」

馬車の車輪が壊れて、それをオーマが直してる時にしつじのおじさんが、どうして子供を集めてるのかをお話してくれた。

ほとんどゼロムと言ってることが同じだったけど、しつじのおじさんはとっても真剣な感じだった。

あと、魔術師の学校に行くと領主さまからお金がもらえるんだって。



このお金があれば不作の時期でも村一つ分生活するのに困らないって言ってた。

…お金つてさ、ちっちゃくて丸くて、金色だったり銀色だったりのアレかな？

ポリメシアってお金をあんまり使ってない気がするんだけどなあ。持つてるのっておじいちゃんとか、外に物を売りに行くおじさんたちだけな気がするし…

でもおじさんたちが持ってた袋の中身って茶色っぽいのと紫色のだけだったし…

お金ってよく分からないなあ…

しつじのおじさんは他にもイイ事があるっていったつけ。

魔術師の学校は王都にあつて、運が良ければ貴族の人にめしかかえられるって言ってたなあ。

めしかかえられるって、お仕事くれるって事らしいけど…

でもそれってお仕事貰ったら王都の方に住まなくちゃいけないのかな？

もしそうだったら、僕おじいちゃんとおばあちゃんのお手伝いだけでいいや。

ゼロムも貴族はイヤな人ばかりでイイ人なんて少ないぞって言ってたし。

リセは昔お城に住んで、でもお仕事が忙しくて遊べないから家出てきたって言ってたし。

エルオーネは都会は危ないからやめとけって言って、ヨルン兄さんは…うん。

「シヨタコンモエー。キタコレー。ハアハア。テラヤバス」とか呪

文唱えた後、マジメな顔して

さっき言った呪文を唱えるヘンシツシャばっかいるからダメねって  
言ってた。

オーマだったら魔法使えるし、何でも知ってるから魔術師の学校に  
行っても平気だと思っただけだなあ。

ああ、でも離れて暮らすのはなあ…うん。やっぱりイヤだな。

そんな僕の考えてたことがわかったのか、オーマがムスっとした顔  
でいつてきた。

「行きたくないね」

「え、そうなの？」

オーマでもイヤがる場所なんだ。

王都って本当はすっごく危ない場所なのかな…？

「だっておじいちゃんやおばあちゃんと離れなくちゃいけないんだ  
よ？」

おチビちゃんは皆と離れるのイヤでしょ！ま、どうしても行きた  
いって言うなら

収穫が終わって物を売りに行く時に近くの町とかまで乗せてって  
もらおうよ。うん。それがいい」

「あ、そっか。じゃあ魔術師の素質があっても僕ポリメシアにいる  
！」

「それがいいね。いざとなったらリセとかエルオーネに教えてもらいなよ」

「うん！　　オーマは教えてくれないの？」

「あのね…ボク　　魔法使ったよね。魔術じゃなくて、ね」

「うん？」

「魔術って言うのは魔法とは違うんだよ。ねえ、おチビちゃん。

ボクがおチビちゃんと同じ人間じゃないって言ったら、おチビちゃんはどうする　　？」

んん？

「実は、ボクはとっても悪くて怖いモノで、人間を食べちゃうんだ！」

んんん？？

「酷い事も悪い事をいっぱいしたし、色んな人間を困らせてたんだ。楽しかったよ本当に」

んんんん？？？

「ボクはね、悪魔なんだよ」

えーっとな…？

「  
なあんてね」

「え、ウソなの？」

「どっちだと思う？」

どっちって言われてもなあ…あ、今すぐオーマが困ってる。  
眉をきゅってよせて、ズボン握ってる。

僕はオーマにひどい事も、悪い事もされたことないし。

おじいちゃんのお手伝いとか、おばあちゃんのお願いとかがオーマは  
聞いてくれるし。

村の家とか直してくれるし。僕だけじゃなくてティコたちにも勉強

教えてくれるし…

でも、オーマはウソとかついたりしないよ。

「わかんないなあ」

「そ」

「オーマはウソ言わないし」

「は？」

「ひどい事も悪い事も僕はされてないし。いつも一緒に遊んでたし。あ、ねえねえオーマ。アクマってジュードさんと同じ魔族のこと？でも魔族って髪の毛が黒いヒトの事を言うんじゃないの、違うの？」

「あのね、おチビちゃん。あいつは魔族ジュード　魔獣に分類されてるんだよ。

別に髪の毛が黒くない魔族だっているし。髪の毛の黒い精霊とかもいるから…

ただ単に人間には黒って色が発現しにくいだけでね、ほら、セイセイリオスンも毛の色が黒いよね。

天狼族セイリオスって魔族じゃなくて霊獣に近いからさ、ね？それと悪魔は別モノなんだよ」

「んん？」

「悪魔はね、人間の感情から生み出された思念体の事をいうんだ。

んーと。

長い年月をかけて身体を創り上げ、思考を持ち魔力を増やし存在を確固たるものにする。

そしてね、悪魔と契約を交わした人間を魔法使い、または魔女と呼ぶの。

契約をすると体の一部に契約の印が刻まれ、その一生を契約した悪魔に捧げる。

魔法と魔術の違いはね、前者が自分とそれ以外の周りの魔力を使って術を発動させる。

後者は自分の魔力だけを使って術を発動させるもの。まあ、例外はいくつかあるけどね……」

「今言つたのと、オーマに魔術を習うのと何が関係があるの？」

「ボクに魔術を習うってことは、魔法使いになってしまう可能性があるんだよ。

もしも万が一にも本当に運が悪い事に、おチビちゃんが魔法を覚えちゃったら

アースカルド  
神都から指名手配されちゃうよ。ボクはそんなの嫌だしね。

っていうーか。おチビちゃんはさあ、ボクが悪魔でも別になんとも思わないの?」

「うん? うん。僕とオーマが家族で友達なのは変わらないものの。

それによく分からないし。人間じゃななきやいけないなんて決まってるじゃないでしょ?」

エルオーネは水守と有翼人のハーフで、ミルギスは風人の華人でウィーディ ザーディでも僕たちとほとんど変わってなくて、違う所はあるけど、全然気

にならないし。

人間じゃなくちゃいけないって、誰が決めたの

？

「あ」

「あ？」

「あははははは！そうだね！そのとおりさ。決まっではないよ  
！！」

「オーマあ。大きな声出すとしつじのおじさんに聞こえちゃうよ！」

「ボクはそんなへまなんてしないさ！ゼロムじゃあるまいし！！  
あ、おチビちゃん。今言った事は内緒だよ。他の人に言ったらダ  
メだよ。」

「うん。ないしょね。…エルオーネたちにも？」

「いや、エルオーネ達は知ってるからいいよ。でも村の人にはまだ  
内緒」

「！…そつか。うん。まだないしょね！」

”まだ”ないしょかあ。うん。まだ、ないしょだけど、いつか話し  
てくれるんだ！

そならいいよね？

「あーあ。ボクっていつの間にこんな丸くなっただらうっ?」

「オーマの顔はふくふくしてて丸いと思うけど?」

「おチビちゃんはおくおくしてて丸いよね…全体的に」

「!?!」

「まだ朝早いからもうひと眠りしようよ。どうせ帰りもここ通るんだからさ」

「う…うん」

オーマは毛布を広げて、僕はその横にもぞもぞと移動した。領主さまの所に着くまでゆっくと眠ろう。



## 第二十一話

ざわざわ、がやがや。

森の中とは違う音がいつぱい。

ざわざわ、がやがや。かつぽかつぽ。

人の笑い声とか馬の蹄の音がそこかしこで聞こえる。

馬車は道の真ん中をからころからころ。

僕とオーマはゆらゆらゆら。

窓から見える景色は人とかお店とか。

人と人と人と、たくさんいる。皆楽しそうに動き回ってる。

大きな荷馬車とロウファ達よりもちっちゃい犬とか、てくてこしてるし

ポリメシアにはあんまりいない猫が、わんわん、にゃーにゃー。可愛いなあ。

「うわあみてみて、すっごくお家がいつぱいあるよ!」

「そーだねえ…あ、あそこの露天でケンヤンが売ってる」

「ケンヤン?」

「鶏肉で固い部分の肉をタレに一晚漬けて、味をしみ込ませたのをああやって焼くんだよ。」

ポリメシアでは鶏肉よりも魚の方が主食になってるからねえ…まあ帰りにでも寄ってみようか」

「ほんと！？あ、でもお金？僕持ってないよ」

「おじいちゃんからちゃんと二人分のお小遣い貰ったし、平気さ。  
おチビちゃん、買い物してみる？ポリメシアじゃあ物々交換し  
かないからねえ。」

「ここで買い物の仕方を覚えておかないと、隣村とか大きな町や  
都市に行った時力もられちゃうよ」

「えっと…いいの？じゃ、じゃあねえ、さっき言ってたケンヤン食  
べてみたい！」

あと、皆にお土産買って帰る！あと、あとねえ、えっと…リボン  
が欲しいの！」

「リボンって誰にあげるの？」

「おばあちゃんに！髪の毛結んだのが切れちゃったって言ってた  
から」

「そっか。じゃあ丈夫で綺麗なお土産にしようか」

「うん！」

ポリメシアを出てからもう十日が過ぎて、しつじのおじさんと僕と  
オーマはずっと馬車での旅だった。

でもそれも今日までなんだって。そっか。もう領主さまのお家に着  
くんだ。

人がいっぱい居て、お家がいっぱいあって、いろんな音があふれて  
るこの町に領主さまはいるんだああ。

「おチビちゃん。感慨に耽つてるところ悪いんだけど、実はまだ着いてないからね」

「うえ？」

「これからまた別の馬車で移動さ。今度のは使い魔に繋いだ馬車かな？」

「つ、使い魔?!」

使い魔って、前にポリメシアにきた大きなネズミ!!?ど、どうしよう?!

僕、あのツラッティとか言う使い魔は怖いよ!ダメだよ、苦手だよ!!

「あ…言つとくけど、前にポリメシアを荒らしに来たツラッティじゃないよ」

「え…ほ、ほんと?」

「うん。ツラッティって使い魔だけど主に失敗してできたようなモノだし。」

本来はもつと有効に使えるモノだよ。特に移動用は上位者の魔術師が行うから

三流以下の魔術師よりもまだ信用できるし、何かあってもボクがいるから平気だよ」

「そ、そっか。そうだよね」

「まあエノベス地方って余所に比べたら狭いし、あと一日もすれば領主さまのところに着くって」

「えええ！？」

オーマが言ったように、町の中を突っ切って馬車は大きな広場まできた。

その後に、その広場で待っていた…真っ白な馬      使い魔  
遠目から見ても普通の馬とは違うって分った。

だって白い馬の首に赤い模様がゆらゆらしてるんだもの。

確かあれって古代文字だよ。僕オーマに教えてもらったよ！

じっくりと見てる暇はなかったけど、馬に繋がれてる手綱にも

何かの文字が描かれてたみたいだし…そっか、これが普通の魔術師の使い魔なんだ。

色々な所を見て楽しいかったけど…領主さまのお家ちょっと遠い  
と思うな。

うん？

領主さまのお家って街の中にないってこと？

あれ…もしかして村長さんみたいにちよっと離れた所に住んでるの  
かなあ。

馬車から下りて、僕は辺りを見回した。  
森って言うにはなんだか物足りなくて、でも木はいっぱいあって、  
それでも不思議な感じだった。

あ　木の下にお花が一つ二つ、三つ…

他の木の下にも同じ花が同じ数だけある…領主さまの庭だから整備  
されてるのかな？

そっか…だからヘンな感じがしたんだ。うん。なっとくだね！

うんうん僕が頷いてると、オーマが僕をひっぱった。

「あ…っ、ついたの？」

「そうみたい。おチビちゃん疲れてるね」

「そんなこと…あー、でもちょっと喉が疲れたかも。感謝祭のお歌  
の練習今しなくてもいいと思う…」

「暇だったんだから。それに来月はお祭りなんだし、詩歌<sup>うた</sup>ぐらい暗  
唱できなくちゃね」



「ほら、見て。他の村の子達が集まってるよ。ボク達が最後っぽいね」

オーマがまたこっそりと言ってくる。

「ほんとだ。なんだか皆元気ないね？」

「そうだね。でも仕方ないよ。魔術師は地方には来ないからね。

っていうか、前にポリメシアに来たアレは本<sup>まじゅつし</sup>当に特殊っていうか奇特なものだから」

「？」

「こわいってことさ」

「え…なんで？」

僕の声が大きかったのかな？

しつじのおじさんの他にも大人の人がこっちを見てくるし、他の村の子たちもじつと見てくる。

「はあ　これから我が主がお前達を見に来る。私語は慎め。特にお前だ…ちっさいの」

・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
うん？

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「っ！　しつじのおじさんまで僕のことちっちゃいって言った！！？」

しかも指で僕の方をさしてきた。人を指さしたらいけないっておばあちゃんが言ってたのに！！

ひどい！僕は平均的な身長だよ！

オーマは髪の毛がふわふわだから僕よりちょっと大きく見えるだけだよ！！

ポリメシアにいる皆がちょっと大きいだけだよ…同い年の子だって僕と背は変わらないもん



「うう…僕、おっきくなるもん…ゼロムみたいによく寝て、ちゃんとおっきく育つもん」

…か、変わらないもん。ほんのちよつと、ちょこーっただけ僕の方が背がちっちゃい…だ、だけで。

「貴族の執事って、他人を侮辱することしかできないわけ？」

「あ、いや、その…あそこまで頂垂れるほど気にしているとは…」

「あーあ。

ボク達はある大人にならないようにしようね、おチビちゃん」

うん。僕、もうオーマたちのことはあきらめてるから。  
愛情表現って分ってるから…

## 第二十一話（後書き）

次は視点が変わります。そろそろキャラについて詳しく描写しようと考え中です。

しばらく旅行に行くので更新がちょっと止まりますが、帰ってきたら連続で投稿したいと思います。

## 第二十二話

ああ、この時が来た。やっと　　やっと私は私の与えられた仕事を遂行できるのだ。

エベノス地方にある各農村から一定の魔力を有する子供達を集めた。怯える子供達の中、私が見つけてきた二人の子らは気負うことなく自然体のままこの空間に居る。

貴族の屋敷を物珍しがることはなく、品を崩すこともない。

田舎の、それこそ辺境とまで言われた村の出の者が！　　ああ、顔がニヤケてしまう。

執事たるもの、また我が主の体裁のためにもそんなミスは犯せないが！しかし、本当に今回はあたりだと断言できる。

一時は子供らに対し、『ありえない』と恐怖した自分が情けない。

彼らは逸材だ。彼らは鬼才だ。彼らは我が主の役に立ってくれるだろう。

私が見つけた、連れてきた子らは評価される！

貴族についての知識を持つ少女。精霊の依り代たる素質を持つ少年。

我が主であるツハイン<sup>＝</sup>リラ様の名誉の為に　　是が非でもエベノス領主ウルト様の御めがねに適ってもらうぞ！

「遅れまして、誠に申し訳ありません。深くお詫び申し上げます、プロワ執事長殿。

私めが連れてまいりましたのは<sup>ボリメシア</sup>辺境の地より二名、魔術師の資質を持つ者として領主様の下へと推奨いたします」

ツハインⅡリラ専属執事セトⅡルビィナ

エベノス地方にある各農村から一定の魔力を有する子供達を集めた。子供達は皆一様に怯えている。

無理もない。

彼らの親は領主様より報奨金がでると知ると彼らを売り渡したのだ……しっかりと、子供が魔術師の学院へと入学できた場合にのみに支払うと言ったのにも関わらず

そして、まだ子供達が魔術師の素質があるというだけで、確実に王都へと行けるとは限らないのに、だ。

私の行うべきことは、魔術師の選出。

この子供達の中から選ぶのだが、私の琴線に触れる者はいない。

私でこの状態なのだ。我が主もあまりの質の低さにお嘆きになるだろう。

恐らく、此処に居る子供たちは王都にある魔術師の学院へは行けない。

魔力があるとはいえ、教養がなく文字も読めるかも怪しいのだ。

否 数十年前に義務付けされた法など、今も律儀に守っている貴族は少ない。

我が主であり、このエベノス地方の領主たるウルトⅡエヴァーゼン

様は平民には寛容的だが…

此処に集められた子供達は手頃な商人に引き取らせるか…

出来がいい者がいれば此処で下働きさせることもあるだろう  
しかし。

そんな私の思考を中断させる出来事が起きた。

エベノス地方領主ウルト様の奥方や、そのご子息方に疎まれている  
ツハイン様の私兵

ツハイン様の従者を務めている者が、ある子供達を連れて来たのだ。

今更何用できたのか…定刻などとうに過ぎているというのに  
はじめはそう憤慨したものだ。

しかしアレが引き連れた子供達を見た時、ふと違和感を覚えた。

一人は目を見張る程の美しい少女だ。

さわり心地の良いであろう柔らかなダークブラウンの髪と

その髪と同じ色でありながら、どこか潤んでいる大きく、くるりと  
した眸。

少女の頬は仄かに赤みがあり、汚れを知らぬ肌の白さが一層際立っ  
ていた。

成長すれば絶世の美女になるのではと思う程だ      そして魔力が  
他の者よりも上質だった。

もう一人はその美しい少女に手を引かれて入って来た。

はつきり言って特徴がないのが特徴だろう。

否。子供らしいといえば子供らしいのだが、ただそれだけだ。

他の農村の子供らと何ら変わらない。変わらないはずなのだが…何故だ？

まだ違和感が否めない。

そして私の違和感は確かに間違いではなかったのだ。

エヴァーゼン家執事長サモン「ウ」ブロワ

おれらが入ってきた扉とは別のところから、そいつらは入ってきた。

「ほら、見て。他の村の子達が集まってるよ。ボク達が最後っぽいね」

一人はその、なんてーかすっげえ可愛い子だった。おれのいた村で

も比べられないくらい可愛いこだ。

んで、もう一人がチビだった。おれより年下か？

けっこう肉つきいいよな。なんだよ。アイツ金持ちのこのヤツだよ。

なんかム力つくし、丸太っぱいから丸太でいいや。

「ほんとだ。なんだか皆元気ないね？」

元気がない？ 当り前だろ！！

これから魔術師になるかもしれないんだ！

でもそいつらは貴族なんだぞ！素質がある？だから何だってんだよ！？

貴族のヤツらが小さな村の、平民を魔術師にしたがるわけないだろう！！

「そうだね。でも仕方ないよ。魔術師は地方には来ないからね。っていうか、前にポリメシア<sup>まじゅつし</sup>に来たアレは本当に特殊というか奇特なものだから」

「？」

「怖いってことさ」

「え…なんで？」

そいつ…本当にわからねえヤツだった。

すっげえ可愛い子と一緒にいて、手までつないで！

魔術師の、貴族の怖さを知らないなんて、ぜってえ甘やかされて育ったんだな、あのチビ助は。

「はあ　これから我が主がお前達を見に来る。私語は慎め。特にお前だ…ちっさいの」

「っ！　しっじのおじさんまで僕のことちっちゃいって言った！！？」

チビで丸太っぽいガキは貴族の召使に口答えまでして、何考えてんだよ！？

本当にどこの田舎もんだよ！！？

「うう…僕、おっきくなるもん…ゼロムみたいによく寝て、ちゃんとおっきく育つもん」

「貴族の執事って、他人を侮辱することしかできないわけ？」

「あ、いや、その…あそこまで頂垂れるほど気にしているとは…」

じっさいチビのくせに！！しかも可愛いこもチビ助のことかばったし！

貴族のヤツも何も言わないし、召使だってオドオドしてるし、いったい何なんだよ！？



貴族は、貴族に仕えてるヤツらには逆らっちゃいけないんだぞ！  
逆らったら家を焼かれちゃうのに！村の税金だつて増やされちゃう  
のに！！

おれらは父さんや母さんたちと引きはがされたのにつ！！！！

おれはチビ助をにらんだ。思いっきり！

だって本当に、そいつのせいでここにいる貴族が怒ったら？

おんなじ平民ってだけでおれたちまで殺されたら？

ふざけんな！！！！

「それで？ボクたちってなんかのテストでもつけるわけ？  
それとも、そのプロワ執事長だっけ？彼に魔力でもぶつけてみ  
ればいいの？」

な、何言つてんだよあの子…？

「え…そんなことしたらあの人気絶しちゃうよ？  
危ないことしたらダメっておじいちゃん言つてたよ！」

は？      き、気絶？！

ちよつと魔術の素質があるから調子にのってんのか？

ここまで来る間に、貴族の召使から何も聞いてないってのか？

言葉一つで、村を燃やしちまうようなヤツら相手に、あの子もチビ助も何言ってんだよ?!!

「それはおチビちゃんにであってボクにじゃないからね。

おじいちゃんボクには思う存分に殺<sup>ヤ</sup>れって言ってくれたし？」

「ええ… オーマ目立たないようにねって僕に言ったくせに」

「おチビちゃんにね。だってそうでしょ？」

おチビちゃんって魔術が何たるかを知らないんだから。それで？

執事のおじさん

「

なんだ… あの子はなに言ってた…？

そんなこと言ったら、逆らったら、おれたちは殺され

「彼に対峙するのではないなら、その壁で幻術張ってる方をボクは殺<sup>ヤ</sup>ればいいのかな？」

おれの方を            おれがいる壁を目を細めて見てきた。

にらまれてる？            誰を、おれを？

何で？ 壁に幻術使ってるヤツがいるから、じゃあなんでコウイんだ？

後ろにいるのか？ ほんとうに壁際にいるのか、おれまでにらまれてないか？！

「あっちの壁にいるの？僕は男の子がするようにしか見えないけど……」

「ふふ。見えなくていいよ。知る必要なんてないんだから。その……」

可愛らしいあの子が笑う  
おれに向けて、やわらく弧を描いていく口元で。

「そうそのキミ。邪魔だから」

キミごと殺<sup>ヤ</sup>つていいかな。別にいいよね。

「っ……!!?」

…だってキミ睨んできたんだし。

ゆると

嗤う

連れてこられた農村の子供

## 第二十二話（後書き）

領主さままでもうちょっと！といった感じです…

## 第二十三話

「<sup>ッハイン</sup>あの子の子飼か…まったく、なかなかはどうして  
優秀な者を連れてきたようだな」

くぐもった声が聞こえたと思ったら、グニヤリと壁が歪んでそこから人が出てきた！  
オーマの言った通りだった。なんで分ったのかな？

「我が主！？」

「お褒めに預かり光栄です、ウルト様」

「お名前をお聞かせ願えるかな、リトル・レディ」

苦しくないのかなあって思えるほど、服を重ね着してて、キラキラ  
光る石とかもいっぱいいついてた。

あれって輝石かなあ？

あんなにこてこていっぱいいつけてる人が領主さまなんだ…おじいちゃん  
よりもおじいちゃんに見える。

そのせいなのかな？

オーマは女の子じゃなくて僕と同じ男の子なのに…領主さまって実は目が悪いみたい。

そう思ってたなら領主さまはオーマに向かって手を出した。

なんだろう、何か欲しいのかな？

「…シェリー」

「！」

「？」

オーマ？

オーマは笑いながら、でも領主さまの手は空中で止まったままで、ちよつと顔がひくついている。

二人を見比べて、でもどっちも動かなくて…

しばらくじっとしてたら、オーマの方がやれやれって首を振ったの。

「本当はね、大人しくしていようと思ったんだけど…気が变つちやった」

「…気が变わったとは？」

「キミには『彼』を飼い馴らすほどの実力はないでしょう。ちから

『彼』の行動原理は『暇つぶし』や『面白そうだから』なんてもっともらしいのが理由じゃない。

同胞からは異端者と呼ばれる事があるんだ。人間達きみらには『彼』の行動がなんとなく理解できるだろうけど」

「っ

」

同胞？異端者？

彼って誰のこと？さっき呼んでいたシェリーって人のことなの？ぐるぐるする。何を言ってるのか分らないよ…

「本当に恐ろしい程優秀だ。是非とも私の推薦で王都の魔術学院へ通わないかね？」

「ねえ、教えてあげたら？少なくとも知り合いなんですよ？」

「ねえねえ。さっきから誰と話してるの？」

僕が思い切って聞いてみると、オーマはちょっと困った風に笑った。そんな顔されても僕だって気になるよお。

「おチビちゃん。ゼロムからなんか言われてたよね。アレこの人に言ってくれない？」



「領主さま？でも僕たちひどい事されてないよ？」

「いいから、いいから」

「えーっと…『フィヨダの落日』？」

「「「なっ！！？」」」

領主さまだけじゃなくて執事のおじさんとお部屋の真ん中にいたおじさんも驚いてた。

あれ…この人たちってゼロムの…ううん。ケルトさんの知り合いのなかな？

僕が首をかしげるとオーマはクスクス笑ってた。

もお…僕ヘンなことやってないのに。

「フィヨダの落日かのじよが死んだ日

どうしてきみが知っているの？」

真白なぶかぶかのローブをすっぽりとかぶった小さな子が領主さまの後ろから出てきた。

僕と同じ位の背かな？あ、でも、オーマに似てる気がする。

静かな声。

森がざわざわした時みたい　怒ってるわけじゃないと思う。  
でもなんだか：ぽっかり穴があいたような、そんな声。

「えっとね、教えてもらったの。きみもケルトさんのこと知ってるの？」

「「!!」」

ゼロムの友達のケルトさん。でももういない人。  
そんなことを思ってたら、領主さまと僕とオーマを連れてきたしつじのおじさんがびっくりしてた。

「ケルト…ケルト」エンゼリカ　？」

「う、うん。昔、王都にいたって言ってたから…」

「今はどこにいるの？」

「えーっと…」

ぽつかりと穴があいたような声で、僕と同じ位の背の子は問いかけてくる。

ケルトさんとは会えないけどゼロムと一緒にいる…でいいんだよね？でもでも、ゼロムは魔術師の人と、あまり関わりたくないって言うてたし…

ケルトさんの思い出で、いい思い出が少なくて、ゼロムも魔術師の人好きじゃないって言うてたし…

「キミの質問に答えてもいいけど　ただでは、ねえ？」

「え？え？」

「どうして、きみがいるの？」

「ふふ。それはボクの勝手でしょ」

「あの、さ…その。ケルトさんとは多分もう会えないよ？」

「　　どうして？かれはぼくにウソをつかなかった。  
かれはぼくと約束をした。だから　　かれは約束をやぶることをしない」

ゼロムがケルトさんから力をもらって、でもその時にケルトさんの全部をもらって…  
だからゼロムの中にケルトさんが居て、それで会うことができなくて  
こんな感じで言えいいのか？

「もういい！やめなさい！！」

「わ」

領主さまが大声を出す。  
周りに居る子供たちもビクってなって、しつじのおじさんも怖がってて、僕はびっくりして声出しちゃった。

「ねえシェリー？よく考えてごらん。  
語り継がれる物語の主は、囚われてしまったら、いったい誰が助けてくれるというの？」

優しい声でオーマが言う。

僕が知っている優しいオーマの声とはすごく違っててもやっぱり優しいはずの声で…初めて見た気がする、こんなオマを。

「…語り継がれる  
物語の夜あるじの一族

どうして…どうして？  
かれは、かれは人間で、かれは魔術師で、かれは…」

「その先を知りたいならボクと取引おはなししようか。

出れるでしょう？あ、その間おチビちゃんに傷一つでもついたら…ねえ？」

白くて小さな子はしばらくしてからゆっくり頷いた。

とてとてオーマの方に歩いてくる。でも僕の横に来た時にぴたりと止まったの。

「ケルトはぼくのことをキライと言ったの？」

「え？」

「会えないと言った。ケルトがぼくをキライになったから会えないと言ったの？」

「え、え？そ、そう言う意味じゃなくてね。ケルトさん、友達に力を全部あげちゃったから会えないって」

「ちからをぜんぶあげた？  
生命を？ちから魔力を？ちから記憶を？ちから未来を？

ばくにはくれなかったのに…きみの言うトモダチには身をぜんぶあげ捧げたの？たのぜんぶ、わたしたの？」

「う？え？」

「ぼくには約束しかくれなかったのに　　ずるいよ」

「その、シェリーはケルトさんと同じ魔術師の人で仲が良かったの？」

「ぼくは魔術師じゃなくて、悪魔だよ。シェリルシエ」シェリー  
「シエルスサーキス。」

ほかのヒトからは手白香シエルスサーキスと呼ばれているし、同胞からは苛烈シェリの悪魔と呼ばれている。

だからきみは、ぼくをシエルスサーキスと呼ぶんだ。シェリーは同胞かれが呼ぶんだ。

ぼくをシェリルシエと呼んでいいのはケルトたちだけ。ケルトとツハインとフィヨードだけだ」

「シエ、リル…ス？」

「ちがう。シエルスサーキスだ。きみは一度で言ったことをおぼえられないの？」

「え、あ、ご、ごめんね…」

僕って長い名前とか覚えずらくて…初めて会った人とかは特にそうみたい。  
気を付けてるんだけど…うん。大人になるまでには頑張ってなおそう。

「ちょっとシエリー！ボクのおチビちゃんに酷いこと言わないでくれる？」

バカな子ほど可愛いって名言をキミ知らないワケ？  
「信じらないんだけど！」  
だった

「この子バカなんだ  
わってしまったね。  
きみはしばらく会わないうちに性格がかわってしまったね。

すくなくともぼくらが出会ったところから考えると…ほかの同胞の失笑をかうほど変わっている」

「失礼な。もういいよ。ちょっとこつち来て！  
ボクはね、キミと取引して、さっさと帰りたいの！…」  
おはなし

「魔術師の選定をしなくてはいけない」

「そんなの適当でいいよ！魔力持ってそうな力毛…じゃなかった、子を見繕えばいいでしょ！」

「じゃあ…あのバカな子と」

「バカって言わない！」

「ちびと………きみににらまれて怯えてるその子」

「おチビちゃんはボクと一緒に村に帰るからダメ。他のにして！  
っていうか、キミとおチビちゃん背が変わらないじゃない。違和感ありすぎ」

「そんなことない。ぼくのほうが大きい…左から三番めの子。ほかはダメ。無能者<sup>やくたたず</sup>。」

エヴァーゼン。ぼくは同胞<sup>かれ</sup>と話があるから席をはずす。そのちびは丁寧に扱って。

でなければツハイン以外の安全は保証はしない。同胞<sup>かれ</sup>はぼくらの中でも一等ぬきでている」

「な、それは、どういう…っシエルスサーキス?!」

うん…ほんと、オーマの愛情表現って分ってるの。  
でもちよっと、もうちよっと違う時に言って欲しいと思う時があるの。



領主さまが何か言う前に、二人はふらりと外に行っちゃた。

シエルス？の言ってた同胞って、オーマのことだね。

同胞って仲間って意味だね、確か…じゃあオーマ同じアクマの人なのかな？

「行っちゃった…けっきょくフィヨダの落日ってどういう意味だったんだろう？」

「「は?!」」

連れてこられた子供以外の人たちが僕を見てきた。

ちよつとこわいなとか思いつつ、でも僕だって言いたい事が一つあるんだ…

絶対にシエルスより僕の方が背がおっきいよ！

## 第二十四話

しっとりとした茶色のお部屋。

ソファもテーブルも茶色や落ち着いた赤い色の物ばかり。

貴族の人のお部屋つてもつとこてこてしてると思ったのに、そうじゃなかったみたい。

こぼこぼこぼ。

カップにお茶を注ぐ音が部屋に響く。

ほわぁん。

湯気が出てほんわりと部屋に広がっていく。

風と、部屋から見えるお庭の池に住んでる魚が時々飛び跳ねる音だけ。

ささ…。

しつじのおじさんが僕の目の前に座ってる人と僕に、お茶の入ったカップを置いてく。

なんとなくゼロムと似てると思ったの。

ゼロムもしつじのおじさんみたいに、音を立てずに物を置いたり、いつの間にか現れたり…

「どうぞ、ぼっちゃま」

「あ、えっと。ありがとうございます」

ほんと…何でこんな事になっちゃったんだろう？

僕はオーマと一緒に領主さまのところに来て、ただ魔術師の素質がどうかで

終わったらのんびり町を観光してから帰るはずだったのに…

初めてポリメシアから外に出てわくわくしてたのに、今はわくわくよりもそわそわしてる。

目の前に置かれたカップを両手で持ってじっとお茶をのぞいてみた。

…

オーマ、早く帰ってこないかなあ。

はあ。

「気に入りませんか？」

「う、え？」

「難しそうな表情かおをしていたものですから、口に合わないのかと…

他の物をお願いします」

「かしこまりましたツハイン様」

「だ、大丈夫だよ！僕このお茶、好きだと思う！！」

赤みの強い金色の髪をエルオーネみたいに緩く背中にくくってる男の人。

多分ゼロムよりも年上だと思うな…

ツハインさまって呼ばれた人に、僕は急いで返事をする。

だってお茶でも捨てちゃうのはもったいないから。

だからいつきにカップに入ってたお茶を飲んだんだ。

「う？」

ちょっと熱くて、喉がひりひりしちゃったけど…うん。コレあんまりおいしくないや。

ゼロムが入れてくれるお茶の方がいいな。エルオーネが作ってくれる方が全然おいしいし。

「驚いたな…セトの言っていた事が本当だったとは」

「セト？」

「彼です。わたしの専属執事なんですよ」

「え、このしつじのおじさん…セトおじさん？」

「ふふ。まさか本当に<sup>ジルヴァーナ</sup>猛毒草が平気とは…どのような生活をしているので？」

あのケルトⅡエンゼリ力殿も訪れたのでしょうか、其れ程までにポリメシアとは聖域なのですか？」

「？」

「難しい言葉は使っていないと思いますが…何か分からなかった言葉がありましたか？」

「えつと…言葉って言うよりも、ケルトさんってみんなが知ってる人なの？」

あとセイキってどういう意味なのかなあって。

僕たちはシャシャイの世話したり、ミルクをとなりの村に持っていったり

あとね。年に一度だけお祭りしたりするんだ。だからヘンなこととかはしてないけど…」

「あなたは何も知らないというのですか？」

『フィヨダの落日』などと揶揄しておきながら、何も知らないと、そう言うおつもりか」

し、知らないモノは知らないんだもん！

って言えたらいいんだけど、なんかそんなことを言ったら怒られそ

うだなあ…

だって、青と黄色が混じったような色の目がスーって細くなっただよ。

「あの、」

「ところで、先ほどの少女はいたい何者ですか。

シェリルルシエが随分と警戒していましたが、彼女は魔術師なのですか？」

「…オーマは僕と同じ男の子だよ。シェリスとオーマは同じなんだと思うなあ。

前に会ったって言ってたし、ちっちゃい頃に遊んだことがあるんじゃないかな」

「同じ　　同属おなじですか…少女と見紛う姿でしたね。

そして魔力量すらも自在に操れる…少なくとも人間に擬態出来るだけの化け物くわいものですか」

「？」

「失礼　　少々用事が出来たので、わたしはこれで退室させていただきます。

セト。シェリルルシエが戻るまで彼に付いていてください。けして父上の傍に近づけぬように」

「承知いたしましたツハイン様」

そう言つて、ツハインさまはお部屋を出てった。

やっぱり、なんだか怒つてた…？

「セトおじさん。くらいもちつてなあに？」

連れてきた時と変わらず、辺境の田舎村の子供は憶す事なく私に問いかけてくる。

自分がどのような状況に置かれているのか理解していないのか？

否。理解を示していてこうなのか。痛む頭を振りつつ、少年と視線を合わせる。

私は態度を改めた。

エベノス領領主であるウルトⅡエヴァーゼン様が認めた。認めざるおえなかった。

例えばそれが、シエルスサーキス手白香からの脅迫紛いの言葉を受けたモノだったとしても。

そして我が主が認めた

ツハイン様専用の客室へ招いた少年だ。

「…位持ちとはそのままの意味です。精霊にも階級があるように彼ら悪魔にも階級があります。」

ぼっちゃまがオーマと呼ばれていた少女…少年も、中位以上の位を持つていることでしょう。

そうでなければ、ああも完璧に人間と見紛う姿に擬態出来るとは思えません。私も見抜けませんでしたし」

「皇位精霊みたいなの？」

「は…ああ、ええ。」

何故、ファ・ムート皇位精霊が引き合いに出される？！

知識が殆ど無いというのに、たまに突拍子もない事を言い出す少年だ。

いやあの悪魔が少年に対し知識を与えているのかもしれない。

苛烈なる悪魔の異名を持ちつつも、同じ悪魔からは異端と呼ばれ、人間の傍に存在あろうとする。

悪魔的な思考を持たず、人間的な行動を起こす異端者。

人間に寛容な悪魔。シエルスサーキス人間側に着いた悪魔。人は彼の悪魔を手白香と呼んだ。

憶測で我が主であるツハイン様にご報告申し上げるのは遺憾だが、シエルスサーキス手白香が警戒した存在だ。

攻撃される可能性も考慮して対策を立てるべきなのかもしれない。



「僕とオーマはお家帰れる？ひどい事されるの？」

「はい、必ず。危害を加えるなど、我が主は望んでおりません」

そう、わざわざ敵　　しかも悪魔だ！　　を増やそうなどとだれが思うか。

しかし悪魔か…いや、待てよ…この少年はあの悪魔と契約しているのか？

もしそうならば、しかしどうやって聞き出す？　　いや、案外あっさり契約の印を見せるかも知れんが…

「ツハインさまはひどい事しないんだったら、領主さまはの方は？」

「は？」

「セトおじさんの『わが主』がツハインさまなんでしょ？

じゃあ領主さまのほうは僕とオーマをお家に返してくれないの？」

それは…

確かに、あのウルト・エヴァーゼンがこんな極上の実験体を逃がすとは思えない。

しかしそれ以上に手<sup>シエルスサーキス</sup>白香の機嫌を損ねることはしないだろう。

以前、ツハイン様に危害を加えたウルト様の第二夫人サルヴィア様を、目の前で解体されてからは特に気を使っている。  
もともとウルト様がケルトⅡエンゼリカの友人と認められているから今の今まで無事だったのだが…

「ケルトⅡエンゼリカ様の下に帰られるのですよね？そうならば邪魔はされないかと…」

「んん？       じゃあ平気なの、かな…？」

首を傾げつつ、新たに入れたお茶のカップに口を付ける。

平凡な顔立ち、どこにでもいそうな雰囲気少年。

実際、お茶をとる動作に気品など感じられない。しかし不思議な事に、不快を感じさせる動作でもない。

「あ、」

少年が驚いた声を上げる。その視線をたどると、窓際に固定されていた。

そして、そこから悪魔二匹が姿を現したのだ。

「や、おチビちゃん。遅くなってごめんね。シェリーってば我儘ばかり言ってくるからさあ」

「ぼくはわがままなど言っではない。きみが言ったことはりっぱな詐欺だ。」

いけないことはいけないのだと知るべきだ。人間の世界に交じるのならなおのことそうすべきだ」

「あー、ヤダヤダ。だからキミは異端者<sup>はぐれもの</sup>って言われるんだよ。」

さて、おチビちゃん。そろそろ帰ろうか。ボクたちは王都へは行かないんだし」

「もうシェリスとのお話いいの？あ、後ね。」

ツハインさまは帰っていいって言つかもしれないけど、領主さまはどうか判らないって」

「平気だよ」

「もんだいない。エヴァーゼンが欲しいのは魔力保有者であって、魔術師候補ではないから。」

だいたい、ちびを選んでもかれが付いてくるならば、かえってマインナスなことにしかならない」

「へ？」

「ちょっとシェリルう。それどういう意味なワケえ」

「そのままの意味だ。エヴァーゼンが欲しいのは実験体。でもうまくいってないようだったけれど。」

はんたいに、ツハインが望むのは平民出の魔術師。ツハインもそ

「うだから。じぶんとおなじ仲間を創りたがっていた」

「魔術師って魔力のある人がなれるんじゃないの？」

「せいしきな証がないと魔術師となつてはいけない。この国ではそうだった」

「この国では？え？じゃあ他の国では違うの？」

「神都はお金を積みあげば大多数は魔術師とか導師とか神官になれるよ。  
ま、今この場では関係ないかもしれないけど……そうそう。後着けて来たらサクッと殺っちゃうからね」

少年に対し、悪魔は軽い口ぶりで魔術師の事を話す。

よりにもよって引き合いに神都を出すとは……少年の知識はやはりあ  
アズカルド  
 の悪魔からのものようだ。

そして悪魔は私に対し警告を発した。

このまま見逃せ、でなければ死を覚悟しろ  
と

鳩尾を突かれたような感覚がした。

ああ、恐怖したのか。そんなことを考えてしまった。

悪魔を前に、手白香以外の悪魔を前に、私は随分と神経が図太くなつたものだ。

ふと意識を飛ばしていれば、手白香は続けるように言った。

「それこそんだいない。ツハインはそんなことをしない。  
エヴァーゼンはするかもしれないけれど、かれがどれだけ痛手をおおつと、ぼくが動くことはない」

それはつまり、ウルト様を切り捨てるといふことか？！

ウルト「エヴァーゼンではなく、ツハイン様のみを優先するという  
こなのか！！」

コレは、これは本当に                      なんと素晴らしい結果になった事か！  
！！

「シェリス？」

「気にしないでいいよおチビちゃん。シェリーは騙されて怒っている  
だけだから！

くすくす                      読心術みるこじをしなかったキミが悪いんだよシェリー。  
ソレは悪い事だからしてはいけない、だからコレを使うのはやめ  
ようなんて考えなければ騙されなかったのにな」

「フイヨードかのじょとたさいこの約束よめだった。

約束はまもるものだ。どんな結果になっても、破つてはいけない  
…いけないんだ」

初めて見た。  
シェルスサーキス  
手白香が、あくまでも人間のような行動をとり続けるとは…

手白香にとつて約束とは何よりも掛け替えのないモノだとツハイン様はおっしゃっていたか。

其れゆえにアレはここに留まり、今もツハイン様だけでなくウルトⅡエヴァーゼンにも協力していた。

しかしそれが破られた。否　あの悪魔が現実を突きつけたのだろつ。

そしてこれが…今の現状につながっている、と……………

「大好きな人との大事な約束だから守ってるんだね。シエリスはえらいね」

「……………ちびになでられてもうれしくない。ぼくをなでていいのはケルトだけなのに」

「もお。絶対に僕の方が背がおつきいよ！ほら！ほらっ！」

「ぼくのほうが、ながく生きている。ちびは、だからちびなんだ」

「だからって何？！絶対に僕の方がおつきい！」

「ちびだ。幼子<sup>ちび</sup>だ。ひ弱<sup>ちび</sup>だ。夢<sup>ちび</sup>げだ」

「……………っ！」

「ちょっと、生意気だよシエリー。軽く消し飛ぶ？それとも塵に還

る？」

「どうしてきみが怒るんだ？」

「オーマ？」

シエルスサーキス  
手白香に対し殺意を向ける悪魔。

シエルスサーキス  
その殺意に気づかぬ少年、そして何故殺意を向けられるのかを理解していない手白香。

あの少年は悪魔を手玉に取っている…？…いや、何と言つか…ああ…

ひとまず、我が主の身は手白香がシエルスサーキスいる限り安全なままだ。

その後、悪魔と少年はエヴァーゼン邸を後にする。  
何処からか呼び出した魔獣に乗り、風の精霊を味方につけ駆け去って行った。

何故、敵対関係にある魔獣と精霊を同時に使役しているのか？  
聞きたいことは多々あれど、それでも知らなくていい事もあるのだ  
ろうな、などと私は思ってしまった。

ツハイン＝リヲ専属執事セト＝ルビィナ



## 幕間く感謝祭1く

うん？

僕の若い頃かい？それはまあ…やんちゃだったけど。

え？

ダリアとの馴れ初め？こらこら。まだまだお子様のお前が聞くものじゃないよ。

いったい誰に似てそんなに好奇心が旺盛になったんだい？

ああ、悪い意味ではないから、そう落ち込むのではないよ。

なに？

ゼロムとかゼロムとゼロムとゼロムとゼロムとゼロムとゼロムとか  
が聞きたがつてゐるって？

ゼロムだけしかないじゃないか、まったく。

ほら、そんなところに居ないで      オーマヤリセもこっちへおい  
で。

僕とダリア      おばあちゃんの出会いを教えてあげよう。

あれはうだる様な暑い日のことだったんだ。

潮風がとても気持ちいい時間帯だね。僕はふと思ったんだよ。

「そうだ…出家しよう」

え？潮風ってなにかって？

ああ、そうか。お前はポリメシアから外に出たことないんだっけか。  
んん？

ははは。この間のエベノス領主のところにいったことなんて忘れてしまいなさい。

あれは覚えていなくていい事だろう。  
で、潮風だったね。これは海のことだよ。

そう。大きな、それでいてとても温かく、真逆にとっても冷たい、そんな大きな水たまりだ！

こらこら。笑うんじゃないよオーマ。

僕は間違ったこと言っていないだろう？

ん？

ヨルンまで呆れた顔をしないでくれ。

海ってなあにつて聞かれたらそんな感じに答えるもんだらう？

塩辛いとか、海水は目に入ると痛いとか、飲めないとか…

とりあえず森の彼方<sup>エルデーエルヴェ</sup>の国の方にある湖よりも、もっと大きなものだし  
水底なんて見えないくらい深く暗くて  
でも太陽があると透

き通っててキラキラ明るいんだ。

ん…？

ゼロムー！孫達が、孫達の視線がイタイ！！

「僕の話し方はそんなにヘンなのかい？」

「知らんがな。さつさと先を話さんかい、儂は明日の仕込みがあるんじゃないから」

「はいはい。とりあえず僕はポリメシアの出身じゃないんだよ。えーっと何処だったかな？ああ、そうそう。ナーグが故郷なんだ」

おや？

なんでエルオーネが驚くんだ。お前は水守ウンディーネとのハーフだろう？

僕から水わたつみ 海神の気配を感じ取れているはずだよ。

勿論、僕の孫であるこの子だって まあそれを抜きにしてもお前達は仲がよいけれどね。

「ねえおじいちゃん。ナーグって海神ナーグ・ソレイユの長を祭る聖域・ラウ・ルシー・ルの門番街のこ  
と？」

「そう オーマは物知りだね。普通は『ナーグ』って代名詞では判らないモノなのだが…」

さすがに長く生きていると知識量が半端ではなくなってくるのかい？

まあ『ナーグ』と呼ぶのはその街出身の者だけで他国では基本的にソレイユと言われていたかな」

まあ今回はナーグと呼ぶことにして…ともかく僕の故郷はナーグなんだ。

海神わたつみの長を祭る古の海の民が中心となっている街でね。

ん？

海の民が何かって？神々の末裔とされている一族の一つさ。

他にも空の民 エルオーネのように有翼人などの中に居るだろうね。

地上には森の民のエルフが、土の精霊である輪樹<sup>テーラ</sup>を祭ってるねえ…

まあ神代の時代の名残とでも思っていればいいだろう。

「僕はちよつと有名な家の長男だったんだよ。その所為で若い頃、それはそれは大変で…

いつの間にか許嫁が6人とか、婚約者が12人とか…14を迎える時にはその倍近くになって

それでついに堪忍袋の緒がグチャアと潰れてしまったんだよ。いやああの頃は本当に若かったなあ」

もうあれだね。アレ。

女性恐怖症にならなかった僕を褒めて欲しいくらいだよ。

ともかく、家の方で早く子供作れーとか。家督を継げーとか。日々押し付けられててね。

ふらりと近くの海を眺めつつ潮風にあたってたなら

ねえ？

「判る。汝の言いたい事、確かにわかるぞグリーン…！」

「ありがとうりセ。そうだよ、雁字搦めにされるなんてやってられないよね！」

「そうだよな！そう思うものだよな！？もう全部捨ててでも身軽になりたくなるものだよな！！」

「そうそう！だから僕は出家したんだよ！！  
家出とも言い換えられるけど！」

まあ十代のガキが生き急いだところで高が知れるけど、僕って結構器用な子供でね？

商人に交じってナーグを出て、いくつも国を回りつつ追手の目を掻い潜り

このポリメシアにたどり着いたわけだよ。もう心身共に疲れててね…

「そんな時に僕はダリアに出会ったんだ。

彼女は疲れ切ってた僕に視線を合わせてきたんだ。旅人とか滅多にこない村だし

珍しかったのもあるんだけどね…彼女の最初の一言がなければ、きっと僕はここに居なかっただろうね」

旅人さん、旅人さん！此処は自殺の名所ではないんです！自殺なら余所でやってください！！

「ちよっ？！じーさま？！」

「おじいちゃん？」

「なんで自殺なんて言葉で心が動かされんのさ？！」

「ああ、成る程。ここまで凶太くないと海神ナークソレイユの長を祭る聖域・ラウ・ルシーの門番街・ルではやってけなかったのかもな……」

「精魂共に疲れ果てていたのだ。それ位鬼気迫るモノが、ダリアには感じられたのだろう。納得だ」

「何故にお前はそこまでポジティブにグレーンの言葉をとれるんだ」

「……ヨルン。さんざん有名人扱いされたお前ならば僕の気持くらい判るだろう？」

ああ、お前はまだ小さい……うん。まあまだ十歳だからちよつと早いかもしれないね。

オーマ。お前は何を驚いているんだ？ダリアの反応ははっきり言って新鮮だったんだよ。

エルオーネ。『ナーク』の民はそうでもないが海の民は特にそう  
でなくてはねえ…

だって各国だけでなく神都とも話を通る場所だから。

アースカルド

リセ　君と僕は境遇が似ている。ただ君と違って僕には代り  
が居なかったただけだ。

ゼロム。僕は愛に生きるってダリアに会ったあの瞬間に悟ったん  
だ！お前にだって悟った瞬間はあったんだろう？」

「いやあ、まあ…無きにしも非ずというか…ああ　　ともか」

「いや、ゼロムの恋話とかどうでもいいし。おじいちゃん、そ」

「やつぱし、我って、我ってっくくっ！他の魔王共ヤツラがいるから  
いない子！！？」

「海の民　　神々の末裔だとされる一族の一つか、なんか納得だ」

「ハニー。自分の世界に入らないでオレにもかまって…って、だん  
だん力オスってきたな」

「ねえねえ、おじいちゃん！おばあちゃんをモノにするのに村の人  
を三十人切りしたって本当なの？」

いったい何処でって  
それはポリメシアでは当たり前前に知っ  
てることだったつけ。

そう。

あれは僕がポリメシアに流れついてひと月たった頃かな？

正式にお付き合い 勿論、結婚を前提にね を申し込んだ  
時だよ。

ダリアのご両親に物凄く反対されてしまっただけ…

認めてもらうまで何度も頭を下げに行っただけ。

そしてとうとう彼女の両親が条件を出してきたんだよ。

「条件？おばあちゃんはおじいちゃんのこと好きだから結婚したん  
じゃないの？」

「うん。ダリアは僕の事を愛してくれているよ。今もね。  
でもやっぱりご両親のことも大切だから思い切った行動はできな  
かったんだ。

お前だって、知らない旅人にエルオーネやミルギスが連れていか  
れたら嫌だと思っただろう？」

「うん」

「僕はもともとポリメシアにずっと住むつもりだったから、何とか  
納得してもらえたけど

それとこれとはまた別モノって感じでね、ほら、うちの子は可愛  
いんだからまだ一緒にいたいよ  
的な」



「んん？」

「結婚してしまうと、家を新しく建てなければならんだ」

「あ、別々に住むんだ。ちょっとそれはさびしいね」

「そうう。寂しいから、だからダリアのご両親は僕に条件を出したんだ。

まず、山で悪さしている狼を追い出せって言われたんだ。  
その次が、村の男、特にダリアのことが好きな男共を駆逐せよ！  
って。

最後に、ダリアが着る花嫁衣装　まあレースをちゃんと用意  
しろってね…ま、完璧に応えきったけど！」

「ふへえ…」

「血は争えないって言うのか…あの子もそうだった。ただあの子は  
少し不器用だったからねえ。」

いずれ、お前も大切な誰かが、愛しい誰かが、なにものにも  
代え難い誰かが、きつとできるんだろうね」

「？」

「僕は、本当に　　多くを切り捨ててきた、救い出すことができ  
なかった…」

けれど、今ここにお前達が、お前がいてくれて本当に嬉しいんだ。  
ダリアがいてお前がいて

あの子は亡くなってしまったけれど、あの子は遠くに行ってしまう

「たけれど…それでも僕は幸せだ」

「おじいちゃん」

「ん？」

「僕もすごくね、皆といれてね、すっごく嬉しくて、幸せだよ！」

「ああ、そうだね。今は本当に」

ああ、そうだ。お前達、そろそろ戻っておいで。

まだまだお祭りは始まったばかりだ。今度はどんな話をしようか？

んん？

そうだねえ　それじゃあ、昔流行った怖い話でも教えてあげよう…って、リセ、どこへ行くんだい？

え？用事が出来た？

そうなのかい。仕方ない　　オーマ、ゼロム。全力で押さえつけておくれ。

何でこの人選かって？

だって悪魔オーマと夜ゼロムの一族が元魔王リセを抑えるのは適任だろう。

非力な僕じゃとてもとても、敵いはしないよ。

エルオーネ混血児ましてや華人なんて無理だろう？

ヨルンなんて全力出した伝説ゼロムの一族にはさすがに勝てないさ。

あれ？

僕の可愛い孫はどこへ行っただい？

「ごめんね皆。」

僕、皆と一緒に居るのは嬉しいし幸せだけど、おじいちゃんの「ワイ話だけは本当にムリなの」

「そんなこと言わずに来なさい。敵前逃亡なかまはずれはダメだろう？」

「！！！！！！！？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3344f/>

---

ダン=ダンジール

2010年10月10日13時59分発行